

キャストリアと行く聖 杯大戦

ぴんころ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キャストリアと一緒に学校に通って隣同士に座って、肩を寄せ合いながら授業受けたい……受けたくない？

目次

全能少女(ファブリーズ)は王子様に会いたい	1
ファイオレちゃんは籠絡したい	14
聖杯大戦「帰って(沙条愛歌を見ながら)」	28
カリバーンも出番が欲しい	41
獅子GOさんは文句を言いたい	54
TYPE-MOON wikiを見て思 い出してからアストルフオを使ったかっ たと犯人は供述しており	67
キャスター……なんで君は宝剣を大量に 持ち込むの???	79

“黒”のアーサー……???(頭の中によ ぎった戯言)	91
なんで聖杯大戦に勝たないといけないん ですか?(宇宙猫顔)	104
キャストリアは知りたい	117
愛歌ちゃんは尋ねたい	130
ヴラド公は演説したい	141
ジークフリートは戦いたい	153
モーさん、ガチギレるの巻	165
カルナさん、宝具ブツパの巻	179
聖杯大戦おーわり!	193
えびろーぐ	207
おまけ!	219

全能少女（ファブリーズ）は王子様に会いたい

「キャスター」

少年の言葉に少女が応じる。なんでしよう、と。

ここはいと高き空中庭園。敵の本拠地。彼らが聖杯を掴む上で、必ずや打倒しなければならぬサーヴァントがいる場所。

そのような場で、無駄な会話をしている暇などどこにもありはしないというのに。

「四画の令呪をもって命じる」

少年の手の甲に刻まれた、四画の赤い文様が光を放つ。

聖杯が与えた、聖杯戦争への参戦チケット。本来ならば三度限りの絶対命令権が、新たに与えられた一画も加えて最後の戦いを前に消費される。

「第三のスキルを解放し——」

一画、消滅する。

赤い文様は莫大な魔力となり、契約の経路を通じて少女の内へと流れ込む。

解放されるスキルの名は“選定の剣”。少女が最後に辿り着くべきあり方を示す、栄光と破滅を両立するスキル。

「神話の力をその手に宿し——」

一画、消滅する。

二画目もまた嵐の如き魔力と変わり、契約の経路を通して少女の総身に張り巡らされる。

少女の手に現れるのは、神話礼装マルミアドワーズ。火の神が鍛え上げた、『最強の幻想』すらも超える究極の一振り。

「至ることのなかつた全ての幻想を胸に抱き——」

一画、消滅する。

三画目が変換された無限に等しい魔力を前に、契約の経路が悲鳴をあげながらもその命令を少女へ通す。

姿が変わる。ただの村娘、ただの魔術師だったはずの少女が、夢幻の如き究極へ。

まさに“王”と呼ぶほかない。

究極、至高、最強。子供が思い描いたような夢物語が、ここに実現する。

「我が手に勝利をもたらせ——！」

最後の一画が、消滅する。

四画目の、もはや駄目押しの如き解放が、神霊を超える何かに至つたとすら錯覚する少女を契約を通して後押しする。

もはや、無限に等しい魔力すらもその少女にとっては芥の如く。

だが、芥子粒に等しい魔力なれど令呪である。故に当然、サーヴァントとしてある少女の全てを、少女が勝ちを求め続ける限りにおいて永劫の強化をもたらず。

「無論です」

放たれる言葉も、ただの少女然としたものから威光を纏う王のものへと変貌した。

けれど、その中にはマスターである少年への親しみが確かに残っている。

無限に等しい幻想を束ねたその上で、少女は確かに王でありながら魔術師キャスターのサーヴァントとして存在している。

「あなたの望む勝利を、ここに具現しましょう」

故に。

「聞かせてください、あなたの望む勝利とは、いったい何なのかを」

「俺が求める勝利は——」

「キャスターと一緒に時計塔に通って青春したい」

「なら、まずはキャスターのアルトリアを召喚しなさい」

「あふん」

時計塔に通う上で借りた一室で、一応は同級生ということになっている沙条愛歌に少年は蹴り飛ばされた。

少女らしい力の入っていない蹴りに全能らしい無駄に凝った魔術が加わり、ソファから転がり落ちた彼の視界に入ったのは、テーブルの上に置いてある触媒。

彼が聖杯大戦に参加する際、召喚に扱う触媒であり、アルトリア・ペンドラゴンにのみ関わりのある、確定チケット。

これを用いれば、まず確実にアルトリアの誰かが召喚できる。亜種聖杯戦争が広まったこの世界では、大金を買いでも手に入れたい人が多いだろう代物。

彼の手の甲には、赤い三画の文様、令呪。

数ヶ月後、ルーミアで行われる聖杯大戦の令呪がロンドンにいる彼の手元にあるのは全て、目の前の少女が仕組んだが故。

それでもなければ、彼に令呪が与えられることはなかっただろう。

いいかしら、と愛歌は前置きをして。

「私じゃ、これを使ってもキャスターのアルトリアは召喚できないの。そういう世界なのよ、ここは。だから、あなたに召喚してもらえないわ」

沙条愛歌は、確定した未来を語る。

「そうすれば、私はアーサーと結ばれることができるの！」

だからあなたには期待しているのよ、と王子様とは何があるうと出会えない少女は少しだけ興奮した様子で語る。

恋をした愛歌だれかを知り、恋することができない愛歌じぶんを知ったことで、未来視を縛らなかつた少女が語るのは、その上で恋をする自分を疑似体験する方法。

「確か、キャスター以外とは相性悪いんだっけ」

「ええ。どの世界でも」アースー王王は私の悪逆非道は許せないみたいね」

「でも」ただのアルトリアアなら話は別、ってか」

「相性はそんなに良くないでしょうけど……それでもまあ、うまいこと進めば悪いことさえしなれば問題はないでしょう」

細く、白い手で少年の心臓を指差す。

「あなたは、大好きなキャスターのアルトリアと添い遂げられる可能性を得る」

細く、白い手で自分の心臓を指差す。

「私は、恋の熱量を知ることができる」

「だからこれは対等な契約、だったな」

少女は全能でありながらも知ることができない、自分一人の感性に従い、自分以外の誰かを必要とする恋心の熱量を知るために。

少年は矮小な人の身でありながらたった一つ知っている、自分が惚れた女との出会い

を行うために。

二人は、手を組んでいる。

「なら、今夜にでも召喚するか」

「……ああ、そういうこと。かなりのバカをやらかしたのね、あなた」

「自覚はしてる」

根源から情報を引き出した愛歌の言葉に少年は首肯する。

ギリギリの綱渡り。失敗すれば殺されていたとしてもおかしくはない状況。

「まさか、フィオレ・フォルヴェッジ・ユグドミレニアに『大聖杯の行方を知っている』なんて告げるなんて」

「でも、やらなきや」黒も赤も敵に回ってただろうよ」

「でしようね。今の時期、まだ黒も赤もないもの。その状況で聖杯大戦が勃発するなら、最初から参戦するあなたが黒側にあてがわれるのは当然だわ」

そして、そうなれば全てがおしまい。

“黒”の陣営は、魔術協会にケンカを売ることになるユグドミレニア一族で構成されている。

そこにユグドミレニアに関係のないマスターが一人いるのだ。当然、魔術協会の回し者と疑われるに決まっている。

逆に、“赤”の陣営からはユグドミレニアの一員と断定され、処分のために魔術師が来ることになるだろう。

つまり、普通に戦えば合計13の英霊が敵に回る。そうなる前に、どちらかの陣営は味方につけておかなければならない。

だからこそそのファイオレへの密告。

その情報の出所を知らない彼女は、少年の持つ索敵能力を異常に思うはず。

彼らの現長、ダーニツク・プレストーン・ユグドミレニアの情報操作を超えて、真実を手にする能力。

一族の者ではない、という不安要素はあれど、彼ら一族は魔術協会に比べれば非常に弱小。

最悪の場合はユグドミレニアが擁することになる六騎のサーヴァント総出であれば倒せるという心理も働き、最終的には彼を迎え入れることになるだろう。

ならなかったとしても、その場合は愛歌がそういう未来に確定させる。

彼女は勝利の立役者となることで、アルトリアに恩を売ることが目的なのだから。

「なら、サーヴァントの召喚もあるんだから今は寝ておきなさい。召喚されたサーヴァントが弱小だったら、向こうも迎え入れるつもりがなくなるかもしれないわ」

「それは困るな。じゃあ、後は頼んだ」

「ええ、任せられたわ」

その言葉を最後に、少年の意識がどんどん微睡みの淵に落ちていく。

沙条愛歌は、根源接続者。彼女の手にかければ、基本的にできないことなんてありはしない。

無論、魔術回路の本数という限度はあるが、それでも魔術師どころか魔法使いとすら一線を画す存在。

所詮は魔術師の少年一人。強制的に眠らせて魔力の調子が最良になったところで召喚の呪文を唱えさせるくらい、朝飯前のことである。

かつん、かつん、と地下室に繋がる階段を降りる。

一段降りる度に、少年の肉体に走るのは激痛。

魔法陣の中央に近づくほどに、沙条愛歌が作り出した魔法陣に流れる魔力が身を苛む。

一步、足を進める度に、その魔力が少年と同一に調整されていく。

地下室の扉を開く頃には、痛みは完全に退いていた。

「来たわね」

「来たけど……魔法陣は？」

「あら、ちゃんと見なさい」

ここにあるでしょう、と口にした少女が指差したのは、少女自身の真下。

何の紋様も描かれていない、魔法陣が存在しないただの地面。

少年の瞳にも、当然魔法陣があるようには見えない。五感が捉えるのはただの地面で

あり、魔術師としての感覚が捉えるのはその下を流れる霊脈の魔力のみ。

「……いや、まさか」

ふと、少年の脳裏をとある可能性がよぎる。

あまりにも馬鹿げた、どんな魔術師が聞いたとしても頭がイカれていると判断を下す

ような考え。

けれど、沙条愛歌ならば実行できるかもしれない、そんな可能性。

「ええ、正解よ」

視界が、強制的に共有される。

沙条愛歌の俯瞰視点、超上空に置かれた、魔力を捉える魔術師の視覚が、その魔法陣

を視認する。

頬を引き攀らせた少年を、一体誰が責められようか。

あろうことか、この女は。

土地を流れる霊脈そのものの流れを弄つて、霊脈で魔法陣を描いていたのだから。

「これくらいしないと、この世界でキャスターのアルトリアは召喚できないでしょう？」
「いや、それはそうかもしれないけど……」

アルトリア・ペンドラゴン……アーサー王とは、この世界でも有力な伝説だ。

まず確実に、アーサー王を召喚しようとすればセイバーのアーサー王がやってくる。

ランサーは神霊で、アーチャーはセイバーの霊基を弄つたもの、ライダー、アサシン、バーサーカーに至ってはよくわからないナマモノだ。

この世界では決してあり得なかった、王にならなかつたただの魔術師アルトリアなんて、狙い撃つても召喚するのは難しい。

ならば、準備は最大限に。

根源接続者は己の願いを叶えるためならば、世界の全てを滅ぼしたとて構わない。

高々ロンドンの霊脈を弄る程度、己が家が霊脈の一等地から変わり果てたことで発狂する魔術師程度、彼女にとっては些事である。

「さあ——」

私たちの聖杯戦争を始めましょう、と告げた少女に頷いて。

「告げろ」

魔力の込められた詠唱が、少年の口から零れ落ちた。

瞬間、少年は変貌する。人間ではなく、魔術回路を搭載した、奇跡を実現するための機械へと。

力ある言葉が編むのは、英霊召喚と呼ばれる術式。少女の造り替えた人造の自然が模る無色の魔法陣へ、たった一滴なれど彼自身の魔力を落とす。

果たして、触れた神秘の内側から現れたのは、二人の望む結果だった。

「こんにちは。キャスター、アルトリアと言います」

目の前に立つのは、村娘のような少女。

戦場で華々しく戦った英雄、という観点で見ればまず間違いなく失敗したと誰もが思うだろう、そんな少女。

白い制服の上から黒のケープとリボンを身につけ、頭の上には帽子をかぶった、どこか学院の生徒を思わせる格好の、至って平凡な少女なのだが。

二人にとっては、これこそが正解だった。

「サーヴァントというのとはよくわからないですが、魔術なんかでお役に立てるといふのなら、遠慮なくお使いください」

「いや、魔術なんかどうでもいいよ」

少年がマスターとして一歩前に出る。

言葉に嘘偽りはない。彼女に彼が求めるのは、魔術でもサーヴァントとしての役割で

もない。

「結婚してください」

「……え？」

彼女を狙つての召喚は、二人ともに意味がある。

少年にとっては、出会う前からの一目惚れ。

つい思わず、その心が漏れてしまった。ついでに令呪からも光が漏れている。

「はいはい、ふざけたこと言わないの」

求婚。

した方は微動だにせず、された方はいきなりの求婚にフリーズして。

直後、愛歌が少年の首に嫌な音を立てながらねじり、放り投げた。

「キヤスター。あんなバカの言うことは気にしないでいいから、代わりに私の義妹いもうとにな

りなさい？」

「え」

さらによくわからないお誘い。

いくらなんでもただの小娘には訳がわからない事態が続いている。

そこに、先ほど首を捻られたはずの少年が戻ってきた。

「はー？ 気にしなくていいとかされたら泣くぞ?! 俺がこの子をどれだけ求めてたの

か、知らないお前じゃないだろうが！」

「は？ ずっと一途に思い続けるとか言えばいい話かもしれないけど、出会ったことのない女の子のことを知ってるとか、ただのストーカーでしょう！」

「ブーメラン乙。お前がアーサー追いかけるのも同じようなものなんだよなあ……」

「女の子が男性を追いかけるのと、男性が女の子を追いかけるなら犯罪臭強いのは後者に決まってるわよねえ」

しかも、喧嘩まで始めている。

事態の中心っぽく
言われた側であるアルトリアを差し置いて。

「えっと、マスターとそちらの少女は恋人か何か……ですか？」

「そんな訳ない！」

息はぴったりだった。

フィオレちゃんは籠絡したい

「体調はどうですか、エルメロイ先生？」

「II世をつけろと言っているだろう」

キャスターの召喚から数日が経った。

それはつまり、ロンドンに本拠を構える魔術師の大多数が発狂するような霊脈への干渉からも数日が経ったということでもある。

そんな折、少年がやって来たのはとある邸宅。表札はないが、魔術師が見ればそこが誰の居城であるのかは一目瞭然。

エルメロイ邸。

半ば没落寸前の君主、エルメロイの一族が住まう場所。

そういう意味合いで言えば、少年の眼前にいるこの男がいるのは正しいが、同時に何よりも間違っている。

ロード・エルメロイII世。

エルメロイの血を継がない、間に合わせの君主^{ロード}。

魔術師としての位階はそう高くない彼は、魔術協会である『時計塔』の講師であり、少

年の属する現代魔術科の中でも一等人気の存在だった。

そんな男が、つい先日の霊脈干涉に対する奔走で疲れきったところに、少年はやってきている。

「それで、今日は何をしに来た。まさか、以前のように合計12人のアーサー王の幻影でジェットストリームアタック、なんてことではないだろうな」

「して欲しいならしますけど?」

「するな!」

はい、と言いながら少年が手の甲にかけた魔術を解除する。

迷彩の魔術によつて肌の色に溶け込んでいた令呪がⅡ世の視界に入り、彼は目を見開いた。

驚愕は一瞬。エルメロイⅡ世は頼りになる講師として、彼がそれを見せた意味を複数浮かべ、その中から最も可能性が高いものを選出する。

「つまり、ここで……魔術協会のお膝元で聖杯戦争を起こすバカがいると?」

ただし、それは前提条件が空白の状態で出された答えだが。

だから当然、正しい答えにはたどり着かない。

「いいえ、俺たちはこれを、本当の聖杯戦争ではないかと睨んでいます」

睨んでいるどころかそれが真実だと知っているが、それを知っているということを知

られてはいけない。

だから、こういった言い方になる。

「待て、話が飛躍している。そう思った根拠から話せ」

眉間に皺を寄せるエルメロイⅡ世に領き、口にするのは愛歌と示し合わせた通りの内容。

「まず、端的に。イギリス内部には聖杯が存在しません。愛歌にも確認してもらったので、これはまず間違い無いかと」

「亜種聖杯の参加者の選出範囲を超えている、ということか」
「はい」

三度行われたという聖杯戦争では、御三家を除く参加者は冬木……行われる土地にいた人物から選ばれたという。

今の聖杯戦争の主流は亜種聖杯戦争。どうあがいても劣化品でしかない、亜種聖杯が商品だ。

そんなもので国の外にいる人間を、御三家のように探す手立てすらない状況で一人選ぶ、というのは考えにくい。

「あとは時期ですね。前回の聖杯戦争からは七十年近く。聖杯戦争を行う、という前提で見れば『霊脈に流れる魔力の量と質の違い』で開催時期が変化する年数としては十年

はそうおかしくはないかと」

「大聖杯が失われたあと、偶然流れ着いたとは考えづらいな。人為的なものがある、そう考えるほうがいいな。そうなると怪しいのは……ユグドミレニアか。増やしている一族も、ユグドミレニアでマスターを揃えると考えればおかしなことではない」

「ユグドミレニアがどれだけ雑魚でも、聖杯があればサーヴァントは呼べますし、サーヴァントを呼べば魔術師は一掃できますからね」

ユグドミレニア。あるいは千界黄金樹。

そう呼ばれる一族は、実際のところ血の繋がりを持たない、様々な理由で大成できないことが定められた複数の家系が集まったことでできた魔術師の集合体。コミニティ

当然、彼らはユグドミレニアである前から、あるいはユグドミレニアになった後も周囲からはバカにされている。その恨みつらみ、というわかりやすい指針もある。

「最後にもう一つ」

怒らないで聞いてくださいね、と口にした少年にエルメロイⅡ世は嫌な予感を禁じ得ない。

けれど、聞かないというわけにもいかない。

ここで知っておけば、もしものタイミングでの切り札になるかもしれないのだから。「俺が召喚したキャスターが、これが通常の聖杯戦争だと言ってました」

「なっ——」

それは、あまりにも想定外の奇襲。

まさか、そんな怪しすぎることもこの上ない聖杯戦争へと平然と参加しようとする少年への驚き。

話を聞くにつれ、生徒に持たせていい令呪ではないと、手放すように言おうとしたところでのこの言葉。

エルメロイⅡ世の口から言葉が出てこないのは当然のことだった。

「貴様、最初から聖杯戦争に参加する気だったな！」

「はい。ちゃんと全部根回しして、聖杯戦争に参加できなきや殺されるって状況にしてからきましたよ」

「きさ、貴様……っ！」

「ついでに言えば、先生のところに来る前にユグドミレニアに接触はしておいたんで、時計塔関連のことは先生にお願いしますね！」

天を仰ぐエルメロイⅡ世。

その隙に、少年は目の前から逃げ出すように走り出す。

「とりあえず、ユグドミレニア側にスパイってことで入ってきまーす！」

「貴様っ！ 帰ってきたら課題は10倍だぞ……っ！」

「じゃあ、その時は『アーサー王顔について』ってタイトルの論文だしてパパッと卒業させてもらいます！」

「そのアーサー王への執着はなんなんだ……！」

エルメロイⅡ世の言葉を無視して敷地の外に出れば、そこには迎えがすでにきている。

「あ、マス——」

マスター、と続けようとして少女、キャスターは口ごもった。

理由は簡単。マスターなんて呼んでしまえば、それがサーヴァントであることは魔術師からは一目瞭然。魔術師ではなくとも女の子にご主人様呼びをさせている変態として名が広まる。

「れ、レンさん」

少しだけ恥ずかしそうに、キャスターは少年——永宮憐の名を口にする。

その姿だけで、憐は心臓が止まりそうだった。

「い、行くうか」

「はっ」

憐が差し出した手をキャスターは握り返し、二人が歩き始める。

なんとなく何を話していいのかわからずに無言のまま歩く。

その無言を断ち切ったのは少年の方だった。

「その服、愛歌が選んだんだっけ？」

「え、あ、はい。マナカさんがあの服だと現代には溶け込めないからって」

召喚された時点でのキャスターの服は、どこかの学院の制服と言われるのがしっくり来る見た目。

鎧姿に比べればマシとは言え、現代に溶け込むという点では少女自身の見た目もあって少し浮世離れしている面があった。

だから、今の彼女は愛歌が用意した服装に着替えて、ただの美少女として歩いている。「さすがに、初めて会った時にいきなり妹になってって言われたのは驚きましたけど」

「ああ、うん……それはな」

「確か、あの人の好きな人と私が兄妹みたいなものなんでしたっけ」

「そうそう」

“あなたがキャスターのアルトリアを召喚して、私がキャスターのアルトリアと姉妹になる。私がアルトリアの義姉あねになれば、それはもう実質アーサー王子様と結婚したようなものでしょう？”

初めて出会った時、愛歌が憐に向けて発した言葉。

二人の協力関係は、それを果たすためにこそ結ばれている。

「その……いきなりのプロポーズにも驚きましたけど」

「あ、うん……あれは、その……」

「嘘、ではないんでしょう?」

「うん、それだけは誓える」

「なら、あとは貴方達の言う聖杯大戦の中で見定めさせてください」

「……わかった」

好きになつてもらえるように頑張るよ、と戯けた様子で口にした憐。

そんな彼にキャスターはくすりと笑みをこぼし——使用していた魔術を解除する。

使っていたのは簡易的な結界。

ただし、彼女の基準での簡易的なそれは、現代の魔術師にとっては目を見開くような神秘である。

効果は、認識阻害。

少なくとも、今空を飛んで彼らを探し回っている無粋なユグドミレニア程度では、彼らのことを見つけるのは不可能だった。

そして、それが解けた今、小鳥を使い魔として二人を探し回っていたユグドミレニアも彼らを発見したことだろう。

歩く二人の前に、ユグドミレニアの使い魔がやってくるのは数分後のことだった。

「やあ、いらつしやい。フィオレ」

「……なるほど、そういうことでしたか」

視線は、まず憐の手の甲にある令呪。次にキャスターへと向かい。

カマをかけたわけですね、と怒りの片鱗を見せながら車椅子に乗った少女は口にし
た。

「まあ、そういうことだな」

令呪があつて。

サーヴァントから亜種ではない聖杯戦争と告げられて。

大聖杯の存在がいつ消えたのかという情報。

万が一にも関係ない人間に令呪が宿らなければ、自ら公開しない限りは自分たちに都合よく進められるほどの組織力を持つ。

そんな条件を一つ一つ考慮していけば、第三次にも参戦していた、そして魔術協会への復讐理由があるユグドミレニアが候補に上がってくることは当然だった。

無論、それ以外の候補もいるにはいるのだが、そのあたりは全て愛歌が潰してある。

まず確実に、誰であつても最後にはユグドミレニアに辿り着けるように。

憐がたどり着けてもおかしくはないように。

「それで、ユグドミレニアとしてはどうする?」

「そうですね……」

すつと、少女は指を顎に当てて考え込むような動作をする。

見目麗しい少女がそんなことをすれば、普通の人間であれば見惚れることは間違いな
い。

だが。

——やはり、これは悪手ですか。

少女の動作が発動させた一工程シングルアクションの魔術は即座に抵抗レジストされる。

これで相手の思考を誘導できれば御の字、と考えていた程度なので失敗は気に留めな
い。

結論は、ユグドミレニアの内部ですでに決まっている。

あとは、そこへどう持ち込むのか、だ。

「私個人としては、学友であるあなたとは戦いたくありません」

「魔術師らしくないね」

「ええ、そう言われると返す言葉もありません」

とはいえ、交渉が決裂したならば殺し合うことはできる。それが魔術師というもの

だ。

何せ、目の前にいるのはあくまで親しい他人、自らの研究を後世に残す、何よりも維持すべき血筋ではないのだから。

「ですが、ユグドミレニアとしては一族の者ですらない魔術師がこの聖杯戦争に参戦することを厭います」

「まあ、それはそうだろうね」

「だから、マスターを籠絡しようとした、と？ 控えよ、魔術師^{メイガス}。一度目は軽拳として見逃そう。だが、次同じことをすれば、貴様ら一族の魔術師としての生命はそこで終わりを迎えることになるぞ」

瞬間、眼前より溢れ出た殺意に、少女は英霊というものを理解する。

いいや、理解は未だ遠く。百分率ですら表すことを躊躇われる、天文学的な数値であろう。一端と呼ぶことすら憚られる、ほんの一欠片の怒気。

だが、それだけでもサーヴァントの、己の人生を伝説と昇華するほどに鮮烈に駆け抜けた者達の偉大さは理解できるはず。

脂汗を浮かべながら、半ば過呼吸に近い状態になりながら、受け継いだ魔術刻印は勝手に駆動し少女を平静へと近づける。

「ええ、今の言葉で十分に」

一度、息を整えて。

「私たちが提示するのは、あなたをこの聖杯大戦の間、ユグドミレニアの一員として迎え入れたい、ということですよ」

「そもそも、目の前の人物は異常なのだ、とフィオレは当主の言葉を思い出す。

本来ならば、ユグドミレニアの一族しか令呪が宿らないはずの聖杯戦争。

そこに、ユグドミレニアの誰よりも早く、しかも大聖杯のあるルーマニアではなくロンドンにいる人物に令呪が宿った。

これが異常事態ではなくなんという、と。

「ユグドミレニアに？　なぜそれを俺が受け入れると？　気分を悪くするかもしれない

が、我が家系は」

「存じております。そもそも、現代魔術科の講師、ロード・エルメロイⅡ世が目にかけている、というだけで十分に大成することが保証されているようなものでしょう。こちらが用意できるカードは悉くが無意味」

だが。

「ですが、今回に至っては一つ、こちらから切れるカードがあります」

「大聖杯」

「ええ。勝利すればどんな願いでも叶う万能の願望機、聖杯。世界中に散らばった亜種

聖杯の真物。オリジナル ユグドミレニアの同胞になるのであれば、あなたもその一端に触れることが叶うでしょう」

何よりも。

「令呪が宿った、ということは貴方にも叶えたい願いがあるのではないですか？」

そしてそれは、魔術協会で亜種聖杯を虎視眈々と狙うよりも、魔術を極める道を進むよりも。

「聖杯ならば、確実に願いを叶えられますよ」

「そして、聖杯戦争が開始すれば、君たちが全員で手を組んで俺たちを殺しにくる、と？」
「あら、ユグドミレニアの同胞にそんなことはしませんよ。聖杯に焼べる魔力も、聖杯の予備システムを用いて、魔術協会側にサーヴァントを呼んでもらう予定ですから」

「なるほどね」

少しの沈黙。

瞳を閉じての考え事。

フィオレの行った自然な魔術行使とはまた違う、ただの仕草。

「じゃあ、最後にもう一つ」

「なんででしょう？」

「俺がこの場で君を殺して、君たちの企みを全て魔術協会にバラすつていうのはどうか

な？　そうすれば、七対七のチーム戦から八対六になってしまいうし、そうじゃなくてもユグドミレニアには君レベルのマスターはいないんじゃない」

「あら、そんなことをしても聖杯が手に入る可能性が小さくなるだけですよ。なにせ、我々一族の血脈の繋がりととは違って、魔術協会の陣営はお粗末な同盟ではないのですから。我々を殲滅したとて、後に待ち受ける光景は容易に想像できるではありませんか？」

「……うん、そこまでわかっているのなら」

少年が手を差し出す。

「いいだろう。君達と手を組ませてもらうよ」

「ええ、あなたが力になってくれるのでしたら、千人力にもなった気分です」
それをフィオレが握り返し、ユグドミレニアとの協力関係が締結された。

聖杯大戦「帰って（沙条愛歌を見ながら）」

「マスター、ここが？」

「ああ、ダーニツクのやつが選んだ会合場所だよ」

「あら、多少は淑女の扱いというものを心得てるみたいね。サーヴァントだからといってただの使い魔と同じように扱わないのは少し加点よ」

「まあ、本質的には魔術師だけど、取り繕うことはできるんだろう」

「うっ……部屋を汚くしてすみません」

「あーあ、キャスターを責めちやダメじゃない」

うっ、と憐が言葉に詰まる。

彼らが訪れたのはロンドン郊外のとある施設。ダーニツクが指定した会合場所。

すでにフィオレとの会合からは数週間の時が流れた。

この数週間、ユグドミレニアとの情報共有は全てフィオレを通して行われ、未だに一度も憐はルーマニアにあるユグドミレニアの本拠、ミレニア城塞には足を運んでいない。

そんな中訪れたのが、八枚舌とも呼ばれるユグドミレニアの長、ダーニツクとの会合。

基本、時計塔の中での情報共有の相手はフィオレであり、ダーニックは動けない。一応は彼も冠位グラントの階位を抱く身。

そんな男が、ただの生徒に話しかけていては目立つことこの上ない。そういうわけで詳しい話し合いのために訪れたのだが。

「サーヴァントがいるな」

「いるわね」

「確か、ダーニックのはヴラド三世だっけ」

愛歌への確認。

根源接続者である彼女は、当然一瞬でその確認の裏付けができるのだが。

「え、ちよつと待ってください」

キヤスターには、そのことはまだ伝えていなかった。

突然、未だ見たことも出会ったことも、ましてや情報すらない相手のサーヴァントの真名を当然のように共有する二人への驚きが表情にはつきりと現れている。

「ああ、そういえばまだ話してなかったっけ」

「まさか、“こつち”のあなたを呼び出さずに、あなたを呼び出したことがただの偶然だなんて思ってたかったですか？」

「それは……そうですけど」

「まあ、詳しい話は後でな」

建物の中に入る。

空気が入れ替わったことが、誰の目にも明らかだった。

その中心は、内部にて待つ若々しい姿をした、けれどどこか老獪な雰囲気を持つ男。

そして、そんな男がまるで従者のように傳く相手こそが、サーヴァント。

普通の魔術師が見れば嘲笑するような、使い魔を尊重する態度。

「はじめまして。ダーニック・プレストーン・ユグドミレニア。それとも、当主殿と呼んだ方が？」

「好きに呼んでくれて構わんよ」

「そしてそっちがランサーか」

ほう、とどこか面白そうなランサーのサーヴァント。

逆に、ダーニックは一瞬だけ不愉快そうに表情を歪めた。

クラスは教えていない、武器も見せていない、宝具なんてとんでもない。

そんな状況下でサーヴァントのクラスを当てて見せた存在への反応は主従で対照的だった。

一瞬だけ愛歌へと向けられる視線。

そこには魔術協会側か、という懐疑があつて。

けれど、わかりやすく魔術協会の人間を連れてくることはないだろう、と。表面上はにこやかに話し合いが始まった。

「では、話し合いを始めようかダーニツク」

「ああ、我らユグドミレニアの栄光のために」

会合そのものは終始穏やかに進んだ。

ユグドミレニアの情報網。ミレニア城塞への帰還……憐の場合は訪問の際にはどのような手順を踏んでいけばいいのか。

そして、なぜ彼が誰よりも早く令呪を手に入れることができたのかの推測も、二人で進めて。

キャスターのアドバンテージ、〃この世界では真名にたどり着く手段がない〃という部分も開示する。

どちらに取つても〃致命的〃とまではならない当たり障りのない情報の開示。

ミレニア城塞の侵入手段は、自己強制証明セルフキヤス・スクロールを使用していない相手に開示するのは危険な綱渡りとも呼ぶべきものだったが、それは憐が敵になる場合の話。

裏切らなければまず確実に大聖杯を使用することができるユグドミレニア側の立場を捨ててまで、魔術協会に肩入れする必要がない、という魔術師として当然の思考が、わざわざ使用するほどの必要性を見出さなかった。

そうして話し合いが終わり——最後に鋼の音が鳴り響く。

戦うのは、ダーニツクの用意した二体のホムンクルス。

キヤスターを用いた雑兵の兵力向上が可能であるかどうかの確認の一環。

もともと召喚する予定だったゴーレムマスターを召喚する余地はすでになく、彼の代わりのキヤスターがどれだけ使えるのかを確かめるのは当然のことだった。

「……素晴らしい」

呟いたのは、ダーニツクだったのか。

いいや、おそらくは彼ではなくサーヴァント。

彼のマスターは目の目に繰り広げられる光景に呆然としている。

「なるほど、これならば正面からの戦闘でも平均的なサーヴァントが相手であれば数秒は保つであろうな」

「なら、期待しないほうがいいってことかな」

「でしようね、魔術協会がコケにされて平均的なサーヴァント、なんて呼ぶはずがないもの。蹂躪のために全力を尽くす未来が目に見えるわ」

サーヴァントからの評価は非常に高いが、それでも現実を考えれば評価できるようなものではない。

ダーニツクは魔術協会側が用意するであろうサーヴァントを想像し、けれど首を振つ

て否定する。

思い浮かんだのはアキレウスやヘラクレスなど、世界最高峰の英霊や、これまでの聖杯戦争で見つかったインド神話の強大な英霊達。

とはいえ、そんな触媒はダーニツクの六十年でも見つからない。ならばたかが亜種如き、そこまで注視するべきでない聖杯戦争のために触媒を集めた人間などいないだろう。

あつたとしても、ルーマニアでのランサー……ヴラド三世ならば劣ることはない。六十年かけて見繕った、最高峰の知名度補正を受けられる最強の英霊なのだから。

『なんてことを考えているんでしょうね』

『いきなり念話してくるなバカ』

憐の脳内に響く愛歌からの念話。

ポーカーフェイスを貫いているが、本心は顔を顰めているのが丸わかり。

「では今日の会合はここまでとしようか」

その言葉と同時に、キャスターの強化を受けた二体のホムンクルスの片割れが槍を弾かれた。

弾かれた槍は地に刺さり、ランサーが立ち上がる。

それに追従するようにダーニツク、そして二体のホムンクルスも動き出す。

「此度の会合は有意義なものだった。次に会おう時が処罰の時でないことを祈ろう」

「魔術師とは、己が利のために道義も道徳も持たぬ者だよ、ランサー」

「なるほど、こちらが利を用意する限りは裏切らぬ、と」

義によって助太刀、というわけではないのが不愉快ではあるが、わかりやすく裏切らない理由があるのはいい。

魔術協会を裏切ってはいるのだが、それはダーニツクも同じこと。味方になるというのであれば彼も容認しなければなるまい。

笑うランサーがその場を去ったことを愛歌が確認して、歓談のための結界が解除される。

「行ったわよ」

「愛歌の情報通りのサーヴァントだったな」

聖杯戦争のマスターに与えられるステータスの透視能力。

それは、マスターではない沙条愛歌は当然持たないはずであり、持っていたとしても一度も見たことのないサーヴァントを相手に先に知っている、というのはあまりにも不自然。

先の、すでに真名を知っていたということも合わせて、いくらなんでもおかしいと言える。

そんな疑問が顔に出ていたのか、キャスターが何かを口にする前に憐はその理由を口にした。

「こいつ、根源接統者なんだよ」

聞いたことないか、と言われて。

ふと思いついたのは冠位……あらゆる時代を考慮しても最高峰に位置する彼女の師匠。

「マーリンの言っていたあれですか」

“君はこれから先、僕よりも魔術の腕が立つ、とんでもない邪悪と出会うだろう”

あの時は『あなた以上の人でなしなんてそうはいないでしょう』と返したが。

数日間も共に過ごしていれば、沙条愛歌が人間を人間同類とみなしていないことは発言の節々から感じられる。

まあ、その上で邪悪（姉）にしかなくておらず、恋心に一直線なこともわかるので、特別何があるかと殺さなければならぬ邪悪だとは思わないが。

「マーリンがなんて言ったのかは知らないけど、多分それであつてるよ。こいつは昨日の献立を語るように未来で召喚されるサーヴァントの名前を口にして、未来のことを語るように過去の聖杯戦争の結末を語る。この世界のことだと思つたら別の世界のことを語つて、空想を語つてると思つたら未来の話をしてる。そういう、時間も空間も関

係ないのがこいつなんだ」

「……なるほど、マスターとマナカは仲がよろしいんですね」

「……なぜそういう結論に？」

「だって、そういうことって普通言えませんかし信じられませんかよ？」

それが言えるし信じられるっていいことじゃないですか、と。

「私は所詮、期待できない程度の魔術しか使えないサーヴァントですから……」

あ、これはまずいな、と聞いていた二人が悟る。

いじけているな、とも。

どうやら、先ほどのホームンクルスへの強化の時の話が、後を引いているらしい。

『ちよ、ちよつとどうにかしなさい。あなたのサーヴァントでしょう！』

『は、はあつ!? 俺のサーヴァントではあるけど、まだサーヴァントでしかないしー？』

むしろ、姉になりたいて言うのならお前が姉らしいところを見せて慰めるべきだろうがっ！ 姉……あ、そっかあ……お前一回失敗してたっけ。妹に王子様寝取られたとか
なんとかか』

『殺すわ』

『ここで俺を殺せば、お前は絶対に姉になれなくなるぞ』

『ぐぬぬ……』

この間、5秒もない。

念話を通して互いに押し付け合いながら、お互いキャスターへかける言葉を探す。

そうして――

「なら、あいつらの期待をはるかに超えて、見ただけで度肝を抜いて心臓が止まってしま
うような魔術を作ってしまったおう」

「え？」

「ほら、そこに愛歌もいるし。俺も俺で色々と魔術で遊んでるし」

エルメロイⅡ世へのアルトリア、s ジェットストリームアタックとか。

「なんか良さげなアイデアとか、一人で全員殲滅することができる魔術とか、そう言うの
だって作れるだろ」

その言葉に、ようやくくくすりとキャスターは笑った。

「あ、どうせならマーリンを殺せる魔術も作りたいですね」

「あいつ、今も生きてるんだっけ」

「ええ、聖杯の知識が、生きてるって言ってます」

なら、と放置されてどこか不満げな愛歌に視線を向けて。

「そういうのは、やっぱり愛歌に手を貸してもらおうか」

今現在、彼らが住んでいるのは時計塔が保有する寮の一室だ。

基本、魔術師という生き物の生態を考えれば住まうのは一人。そのため、部屋そのものはそこまで広くないのだが。

こと、この一室に限っては話は別。

「さて、今日はどうするの？」

いつのまにか座敷童の如く住み着いた愛歌が口にする。

彼女が空間置換で繋げてあるのは、聖杯戦争で発生することが考えられるあらゆる事態に対応するための礼装が置いてある空間。

根源接続者の考えるあらゆる事態とは、すなわち「事実」全て“の可能性”。

逆に多すぎて、取捨選択をしなければとつさの判断で使えないだろう、と言われるほどに膨大な対策がそこにはある。

「まずはキャスターの礼装だろ。俺が狙われた時のものは作ってあるけど、基本的には城塞の中にいるだろうし、愛歌の作った礼装があればユグドミレニア側の裏切りについては、まあどうとでもなりそうだからな」

「うーん、そうなるにあなた用は宝石とかで十分よね。あなた、一応後継者として一族の秘奥は使えるけど、キャスターを全力で戦わせながらっていうのはまだ難しいでしょう」

「？」

「だな。亜種聖杯を使って願いを叶えることに全能力を費やしてる家系ならともかく、うちは聖杯戦争より前に生まれた家系だから」

「うわ、出たわ御家自慢」

「事実を言ってるだけだろうがっ！」

隣の礼装はあっさりと言った。

ユグドミレニアの六十年には遠く及ばない準備期間ではあるが、質という面ではこの世の誰もが追いつけない準備が彼らにはある。

沙条愛歌が王子様と結ばれるためにはどんな手段も容認している以上、数年ほどあれば、ユグドミレニアの準備を彼らの装備が超えるのは当然のことだった。

だから、気にするべきはキャスターの方。

彼女に関しての用意は、全くと言っていいほどに進んでいない。

「それで、キャスターは何か欲しい礼装はある？」

「……そうですね。今のままだと近接戦が心許ないので、その辺りのカバーができるものはありませんか？」

「あるわよ」

「あるんですか？」

「あるのよ」

「諦めろ、キャスター。こいつはそういうやつだ。何も言っていないのに気がつけばこっちの考えを完全に理解しているのも、その上でとぼけたり、不気味なぐらいに気が利いたりするのも日常茶飯事だ」

「後で文句言われるの面倒なもの」

そして、その礼装を見せられて。

「ああ、なるほど。確かにキャスターに渡す礼装としてはこれ以上のものはないな」

「これは………いったい………?」

キャスターの疑問に愛歌が応えて。

その礼装を思わずまじまじと見つめるのだった。

カリバーンも出番が欲しい

「——以上が事の顛末だ。君には魔術協会へと聖杯大戦の情報をもたらし、ユグドミレニアにスパイとして入った君の弟子でもある私の生徒と協力して彼の一族の殲滅を行ってもらいたい」

まず間違いなく、その触媒から召喚されるサーヴァントの力を実力以上に引き出してくれるだろう。

まるでそれが当然、という様子で口にしたロード・エルメロイⅡ世に、獅子劫界離は疑問を抱く。

「そう言い切ると言うことは、あのバカのサーヴァントの真名も？」

「ああ、すでに報告されている。思わず頭を抱えたくなくなるような内容だったかな」

手がこつそりと触れたのは、先ほど彼に依頼をしてきた、エルメロイとはまた別のロードから受け取った触媒。

かつてとある騎士達が集ったと言われる円卓、その木片。ここから呼び出される英霊はまず間違いなく一流のサーヴァント。

だが同時に、その触媒はいくつものサーヴァントに縁がある。

誰が呼び出されるかに問わず、呼び出された英霊のやる気をさらに引き出す、とまで言われるのならば――

「まさか……!」

「君の予想はわかるが、それは半分正解で半分間違いだ」

渡された紙の束。びっしりと書かれた文字には、わかっている限りのサーヴァントとそのマスターの特徴。

万が一にもユグドミレニアに知られるわけにはいかない、とその場で破棄することを求められたその資料の最後に、永宮憐という戦場での戦い方における弟子と、そのサーヴァントについて書かれていた。

そして、それを見た途端、獅子劫は目を見開き、彼の様子に気持ちはわかると頷くエルメロイⅡ世。

「なるほど……」

呻くように口にされた言葉には、納得の色が非常に濃い。

「こいつは確かに、円卓の騎士なら絶対にやる気を出してくれるな」

魔術師のサーヴァント、アーサー。

別の世界の、王にならなかつたと思しきアーサー王。

たとえば別の世界であろうとも、「アーサー王」からの信頼を受けて戦う円卓の騎士

が、生前の恥を禊ぐ機会に奮起しないはずがない。

少なくとも、この時点の獅子劫はそう思っていた。

今では、全くそうは思えない。

「あー……その、だなセイバー」

「なんだ、マスター」

「一応、出会ったとしてもいきなり斬りかかるんじゃないぞ」

「自信はない」

召喚した英霊の名はモードレッド。

かつてアーサー王に反逆した騎士であり、彼……この場合は彼女か、その物語を終わらせた者。

そして、協力者のことを聞いた時点で彼女の機嫌は急降下している。

これは先に言わなかったら、出合い頭に斬りかかっていただろうな、と確信を持てるほどに。

「とりあえず、今日のところは向こうの本拠地を御目にかかる程度にしとくか」

今の状態のセイバーを会わせるわけにはいかないな、ということも合わせて。

彼らの聖杯大戦、その真なる意味での初日が始まる。

“魔術は秘匿されなければならない”という暗黙の了解を満たす、夜の帳が降りきつ

た。

「ま、当然っちゃ当然だよな」

直後、姿を見せる数々の人型。

それがホムンクルスである、と気がついたのは獅子劫が先。

魔術師、あるいは魔術使いとしてある獅子劫だからこそ、その存在には敏感だった。

「ホムンクルスにしちゃ、どっかイかれてんな」

「ああ？ どういうことだよマスター」

そして零した眩きに、セイバーは敏感に反応する。

獅子劫の視界の先、ホムンクルスたちは己の主人の命令をこなすため、各々の武器を構えているのだが。

「あまりにも人間味がありすぎる」

そこに立つのは、一瞬人間と見紛うほどに感情を発露する存在。

最初からある程度の年月をかけて育成することを念頭に置いているならばまだしも、サーヴァントに当てて使い潰すような立場のホムンクルスに、感情などという裏切る要素を与えるか、という疑問が獅子劫の中にある。

「サーヴァント、だろうよ。胸糞悪い。うちの魔術師を思い出す所業だ」

「へえ……」

アーサー王伝説で最も有名な魔術師といえは、おそらくはマーリン。

死んでいないため召喚はできないが、それと近い事ができる、という事ならば。

「こりや、あの情報もマジって事なのかもな」

ぼやけば、セイバー……モードレッドがギロリと睨む。

おおよそマスターに対する視線ではない。ないが、今のは自分の失言だった、と謝罪する。

無論、声には出さずに。出しては、彼らが“黒”のキャスターの真名を知っていると
いうところから憐がスパイであるとバレるかもしれないから。

こいつはアーサー王が好きなのか嫌いなのか。

アーサー王がマーリンの同属扱いされてキレルあたり、愛憎入り混じっていそうだが
さて、と獅子劫も己の礼装を構えたところで。

「マスターは下がってな。これがもしも俺の予想通りなら、多分普通のホムンクルス
じゃねえぞこいつら」

「……あこよ」

セイバーからの戦力外通告。

通告を出した当人は、固有のスキルにまで至った直感に腹を立てている。

倒しきれないのか？——否。騎士王の継子たるセイバーが高々現代の魔術師の一品

程度に負けるなどありえぬ。

では、苦戦するの？——否。これもやはり、騎士王の後継者たるセイバーが英霊相手でもないので負けるなどありえぬ。

ならば、マスターを殺される？——ありえる。

直感は、そんな答えを導き出していた。

マスターがヘマを打って殺される、という可能性もあるが、それではセイバーがマスターのドジを挽回できない程度の雑魚、ということではないか。

何度でも言おう。我こそは騎士王アーサー・ペンドラゴンの正当なる後継者、モードレッド。

故に当然、騎士として、王として、マスターと己に勝利を捧げるのみである。

その宣誓を心の中で終えて、彼女は一気に飛び出した。

地割れの如き踏み込みが生み出す弾丸を想起させる突進。

セイバーのサーヴァントの特徴、最優と呼ばれる所以である全体的に非常に高水準の基礎性能^{スベツク}。

ただの身体能力ですらも、彼女のそれは人を殺せる凶器としては十分以上。

ましてや、その手の内にあつて振るわれる邪剣が宝具であるというのならば。

高々魔術師の用意した程度の、礼装にも及ばぬ槍ごと、ホムンクルスの首を両断せし

めよう。

そんな気迫を乗せた一撃は、当然彼女の想定通り、ホムンクルスの首を武器ごと斬り飛ばす。

だが、求めた通りの成果にもセイバーは顔を顰めたまま。

「雑魚が反応しやがって！」

自らの剣術は、英雄、いいや戦士ですらないただのホムンクルス風情が反応できていはいはずがない、と。

防がれたことにももちろん、それがホムンクルスが自ら研鑽して身につけた技術でもなくただの後付けのドーピングによって為されたことにイラつきを零す。

そうして燃える怒りが高揚させた戦意が、モードレッドの一撃をより力強く進化させる。

一瞬ごとに意思だけで強くなる“赤”のセイバーは、
獣性を宿した剣術を放つ“赤”のセイバーは。

一体のホムンクルスを倒すまでに必要な時間を一体ごとに削いでいく。

「チッ」

最終的にかかった時間は一分足らず。

不機嫌そうに鼻を鳴らすセイバーと相對したが故に目立たず、成す術もなく殺された

ホムンクルス。

普通の魔術師であればこのホムンクルスをただの雑魚と判断するかもしれないが、獅子劫は違った。

「こいつら、低ランクのサーヴァントクラスはあつたんじやないか？」

「だろうな」

セイバーの言葉に考え込む獅子劫。

今、この戦場に出てきた数はそう多くはなかった。

だが、もしもユグドミレニアに攻め込むとなると出てくる数は倍では済まないだろう。

そうなれば、マスターを殺されるという可能性がよりはつきりと――

「心配すんな、マスター」

そんな思考は、セイバーに背中を叩かれたことで強制的に終了させられる。

咽せる己のマスターに、セイバーは俺を信じろと言いつつ切った。

こいつ、と思いつながらにも確かにセイバーの言う通り。

「まあ、最初にお前を従えるに相応しい一流だつて言っちゃったもんなあ」

こいつが負けると考えるのはつまり、所詮自分はその程度のサーヴァントしか使役できない魔術師だと宣言するようなもの。

「頼むぜ、セイバー。一流の魔術師の魔力供給を受ける超一流のサーヴァントつてのがどれだけ強いのか、この大戦で見せてくれよ」

「お、おう」

ちよつとした不満に100点満点中120点の回答を返されて、少しもるセイバー。

主従仲の良い、よっぽどのことがない限りは良好な組み合わせであるということをはつきりと示し、今日のところは一旦地下墓地カタコンベに帰ろう、とそういうことになったその瞬間のことだった。

「これで終わりだと思いましたが?」

ミレニア城塞にある“王の間”と呼ばれる部屋。

そこで、敵のセイバーがホムンクルスを撃破した瞬間を見届けた“黒”の陣営。キャスターの強化したホムンクルスに対する反応は対照的。

戦場をまるで知らないマスター達は、所詮はサーヴァントには及ばぬ雑魚でしかない、と思ひ。

幾千もの戦場を越えてきた英霊達と、すでにその実力を見たダーニツクはサーヴァン

ト基準で上等な兵士レベルに至ったホムンクルスを歯牙にかけないセイバーを脅威と見る。

そんな折のことだった。

キャスターがその言葉を発したのは。

それが魔術だ、と気がつけたのはいったいどれだけいたのか。

宝具だと。そう考えた方が当然の一撃を少女はすでに用意している。

自らに対する嘲笑の視線は我慢するけれど、マスターに対する侮蔑まで許した覚えはない。

とりあえず、まずは軽く牽制の魔術でも放つて、即座にその侮蔑を取り消させなければならぬ、とキャスターはその魔術を展開する。

セイバー、モードレッドの対魔力は宝具によつて隠されているがBランク。詠唱が三節以下であれば無効化するレベルのもの。

それがわからずとも、あのサーヴァントの高水準のステータスを見て、普通の魔術が通用するとは思えない。対魔力は、セイバーのサーヴァントであれば、誰もが持っているのだから。

あの二人がその場を去るまでに用意できる程度の魔術で、彼らを倒せる可能性のある魔術など、普通は作れない。

しかも、ミレニア城塞から街中に向けてなど、なんて。

そんな魔術師達の予想を、キャスターは正面から撃ち抜いていく。

「先ほど、あとはあのセイバーの宝具がわかれば、と言いましたねアーチャー」

「ええ……まさか、あなたは」

「いいえ、宝具は使いません。ですが向こうの宝具を、それが叶わずとも令呪を使わせましょう」

マスター、許可を。

そう告げるキャスターへと憐も頷く。

「ああ。切り札の魔術を一枚切ることを許可する」

「感謝を」

取り出したのは一つの槍。それを触媒に、一つの魔術が稼働する。

術式は、精緻にして複雑。

その術式の名は、『最果^{ロンドン}にて輝^{ミニアド}ける槍』。

魔術にて再現された、モードレッドを殺したという聖なる槍。すなわち宝具。

終末とはいえ神代にあつてなおも、^{オリジナル}「独自魔術」と称されるキャスターの砲撃。

放たれた一撃は、ミレニア城塞を光の速さで飛び去って、モードレッドの元へと向かう。

視認した彼女から爆発的な魔力が漏れ出す。が、その魔力は迫る黄金に比べればあまりにも貧弱だった。

振り下ろした剣もまた、迫る光と等しく宝具。

その威容がはつきり見える、とまでは黄金の光量が強すぎていかないが、それでも剣から莫大な魔力を赤雷の光線として放っていることがわかる。

爆撃じみた一撃は音を消し飛ばし、爆風が視界を遮ったことでその真名までは読み取れない。

“黒”のアーチャー……ケイローンならば、あるいは読唇術と推測を重ねることでその真名を暴いたかもしれないが、今はそれよりもセイバーの安否だろう。

セイバーが倒せていなかった場合のみ、彼が読み取った真名にも意味が生まれる。

魔術で再現された聖なる光と赤き稲妻を纏う剣光の激突。

徐々に、徐々になれど聖なる光が押し込み始め、それを押し返すようにアーサー王を殺す光が雷鳴を奔らせる。

「では、もう一度」

そして、その奥でキャスターが再度、同じ魔術を装填し終えた。

キャスターを見つめるマスター達の視線に宿ったのは畏怖。

そうして、あとは瞬き一つで放たれる、そんな瞬間のことだった。

赤い剣光の奥で、一際輝く赤い紋様。

それが令呪の光であると悟るのに時間はいらさない。

この場で行われる命令は二つに一つ。

すなわち、宝具の強化による押し切りか。

あるいは、セイバーの空間転移による撤退か。

果たして、獅子劫が選んだのは――

獅子GOさんは文句を言いたい

「それで、何か弁明でもあるか？」

「ないよ師匠。ぶっちゃけ、先に伝えてたわけだし」

「お前はそういうやつだよなあ……」

聖杯大戦二日目。獅子劫が起きた時点で、地下墓地の外には“黒”の陣営の一角、より正確にはキャスター陣営とでも呼ぶべき三人がそこにいた。

当然、獅子劫が会談の場所を選ぶのは地下墓地の中。自らのテリトリーであるということに加え、ここならば自らのサーヴァントが宝具を使えない、使ってしまったら自分も死ぬという、キャスターと出会うことも踏まえての場所。

では、その二人はというと――

「あなたが、その……この世界の私の子供、なんですか？」

「お、おう……」

お見合いで初めて出会った男女のようになっている。

“黒”のキャスターからすれば、なんだか突然生えた実子。

“赤”のセイバーからすれば、なんだか突然増えた父上（母）。

どう反応すればいいのか、困り方はお互いどこか似ていた。

「いや……ああ、うんそうか。あんたは、この世界のアーサーではないんだな」

どこか納得した様子のモードレッド。

この世界のアーサー王にはありえない、自らを子供と認める言動に何を思ったのかは、彼女自身にしかわからない。

けれど、最低限悪いことにはならなそうだと見ている誰もが共通して思った。

「もしかしなくてもあの子を私の娘にした方がアーサーとの結婚は簡単なんじゃないかしら……?」

「はい、愛歌はちよつと落ち着こうな。気が多い奴は嫌われるぞ」

一人、まったく違うことを考えてはいたのだが。

少なくとも、聖杯大戦における共闘はまず間違はなく実行できる、と。

「二応聞いとくけど、昨日のあれはなんだったんだ? セイバー曰くロンゴミニアドだつてことだが」

「この父上は魔術師キヤスターなんだろう? だつたら持つてこれねーはずだし、そうでなくても王になつてないなら槍を手にする機会がそもそももねーだろ」

「……父上? 私、男だつたんですか……?」

「いいえ、あなたは普通に女よ、キヤスター。お風呂にも一緒に入って確認は済んでも

の

「は？ お前、父上と一緒に風呂に入ったとか言ったか？」

「あら、〃赤〃のセイバー。一応言っておくけど、その子は王様でも騎士でもないのよ。女性として扱われて、男装する必要はない、ただの少女。求めるなら母性で、どっちかっていうと騎士あなが守るべき立場のはずよ？ だから私が一緒にお風呂に入っても問題ないわ。女の子同士だものねー」

「はいー」

「うぐっ……父上……」

モードレッドの呼び方に、キャスターが多少パニックになったり。

愛歌の発言にモードレッドがキレ散らかしたり。

そういう会話で、最初の上そよそしきは少しずつ抑えられていく。

「あれは魔術で再現したロンゴミアドだよ。先に言っておいただろ？ 一番疑われやすいのは俺なんだから、協力関係だつてバレないために令呪か宝具を使わないとどうにもならないレベルの一撃は放つて」

「両方使わされるレベルだとは思わなかったぞ」

「まあ、能力がわかんなかったからな。その上で、セイバーがモードレッドってことはわかって、キャスターもモードレッドって息子がアーサー王にいることは聖杯からの知

識でわかってたから、息子ならなんか対抗手段持つてるだろうってことでロンゴミニアドを使つたらしい」

背後で、息子なら超えられるだろう、と思われていたと知ったモードレッドがわかりやすい反応をしている。

が、どちらも触れない。この状況で触れてもいいことは何もなさそうだと。

「とりあえず、昨日のあれで俺たちがそつちと繋がつてるって考えは下火になったみたいだ」

「令呪を消費させて、宝具の真名解放までいきなり使わせるような味方はいないってか」
「令呪一画と宝具の真名で敵対する全サーヴァントの真名とステータスが手に入るって、安い買い物なのか高い買い物なのか」

「ついでに内情も手に入るんだし、安いって言うてもいいんじゃない？」

「じゃ、こつちからも情報だ。こつち赤のアサシンのマスター。シロウ・コトミネとかいう神父なんだが、セイバー曰くあいつは怪しい、らしい」

「ほーん」

シロウ・コトミネ。

愛歌曰く、前回の聖杯戦争でアインツベルンが召喚したサーヴァント、天草四郎時貞の現代の姿。

大聖杯を用いて、全人類に第三魔法を行使し救済するという理念を持った聖人。

「セイバーの直感が言ってるんだから、まず間違いねえ。スキルにまでなってるんだ、外れるってことはないだろう」

「まあ、俺が出会うことはないだろうし、そこはそっちに任せるよ」

「……師匠呼びするんならもうちよい敬えよ、お前」

「敬つて、実力を信頼してるから任せてるんじゃないか」

「物は言いようだなあ」

ははは、と笑う獅子劫。ただし目は笑っていない。

自己強制証明を結ぶかどうか、というところはまだ結ばない、ということとで締結。

下手な内容で結んだ場合、一応は敵対陣営に属する二人がその自己強制証明を破らなければならぬ事態に陥るかもしれないことを危惧してのこと。

「うちの場合、ランサーが仕切ってるからな」

「ヴラド三世。確かにルーマニアではこれ以上ない英霊だな」

「結ぶにしても、ランサーとダーニックが倒れてから。その時も、陣営が崩壊した後の共通関係についての締結、程度で済ませたほうがいいかもしれないっすね」

情報共有、同盟関係の締結。そういった、諸々のことを済ませて、憐は立ち上がった。

愛歌とキャスターの方に視線を向ければ、セイバーと何かを話している。

と思えば、セイバーが憐れを覗む。英霊の気迫に少し後ずさりしながらも睨み返せば、不愉快そうに鼻を鳴らして外方を向いた少女。

「二人とも、帰るぞー」

「あら、話し合いはもう終わり？」

「はい、マスター。モードレッドさんも、また今度ゆっくり話しましょう」

「おう。父上もやられんじゃねーぞ」

そうして地下墓地カタコンベの外に出たところで、そこにはホムンクルスが一人立っている。

ジーク、いずれそう呼ばれるはずだったホムンクルス。

“黒”のキヤスターがアヴィケブロンではないことによる影響で、炉心として切り捨てられることになくなったホムンクルスである。

とはいえ、“生きたい”という願いを抱いたのは変わりなく、創造主に逆らうほどの意思に興味を抱いたキヤスターによって、魔力供給槽から取り出されたのだ。

「憐れ、愛歌様、キヤスター様。こちらにあの魔術師は？」

「ああ、いなかった。あの死霊魔術師ネクロマンサーも、やはり魔術使い。戦場を駆ける輩は、敵の本拠に工房を置くほどの間抜けではなかったようだ」

「そうですか」

「とはいえ、昨晚のうちに用意はしていたのだろうか。わずかばかりの罨があった。ど

れもこれも魔術的な罠ばかり。破られた、というのはもう向こうにも伝わっているだろう」

「了解しました」

今、三人が行なっているのは地下墓地巡り。ジークはその監視役。

獅子劫は、先日令呪を用いての転移による撤退を行なった。

セイバーの戦闘能力は高いが、先日のダメージが残っているだろう今ならば、こちらのサーヴァントによる撃滅が叶うかもしれない。

それが叶わずとも、敵の本拠を発見できるといっただけでも価値がある。

ダーニツクが口にした内容を簡潔にまとめればそういう話。

そのため、現在はセイバーを倒し得るサーヴァント。

“黒”のセイバー、アーチャー、キャスターの三名がミレニア城塞付近一帯の墓地を回っている。

沙条愛歌の協力により、一部サーヴァントは本来に比べ強化が成されているのだが、それでもなお“赤”のセイバーを倒し得るのはこの三騎と、あとはそう簡単には動かせない領王のみ。

ダーニツクは、今更になってその事実を不安視し始めたが、もうすでに賽は投げられた。

そのため、彼の思考は自らの不安をもみ消すような形で展開される。あれほどのサーヴァント、魔術協会にとつても虎の子の触媒を使ったに違いない。ルーマニアにおける領王とすら戦えるほどのサーヴァントなのだ。そんなものが、何騎もいるはずがない。

六十年かけて見出した、この聖杯戦争における最強のサーヴァントなのだから、と。

「セッ
ト
起
動」

体内の魔術回路を起動する。

武具を引き抜くようなイメージで、堰き止められていた魔力が流れ始めた。

かつての憐ならば、ここから魔術の訓練をしたのだろうが、今回に関しては鍛錬のための起動ではない。

というよりも、当たり前前に考えれば聖杯戦争の最中に魔術の鍛錬を行うのは自殺行為でしかない。

なにせ、『聖杯戦争は夜に行う』というのは、あくまで魔術の大原則に則った暗黙の了解。

破ろうと思えば誰でも破れるものであり、街中に出た途端にサーヴァントに出会い戦

闘に入る可能性だつてある。

いつ如何なる時においてもサーヴァント戦に備え、常に自らのコンディションを最高にしておくのは、魔術師としての当然の義務だ。

それでも魔術の鍛錬を行う意義があるとすれば。

身につけた魔術がサーヴァント戦においても有用となる場合くらいだろうか。

そして、憐ではそのレベルの魔術には未だ到達する兆しすらなく。

故に当然、わざわざユグドミレニアで魔術回路を起動し、魔力を生成する必要性はない。

「ありがとうございます、マスター」

それを知るから、キャスターは感謝の言葉を告げる。

生成した魔力は一滴残らずキャスターの身へと。

魔力供給用のホムンクルスは、ユグドミレニア全体の共有品。キャスター個人で全て使つていい代物ではない。

そうして流れ込んだ魔力を用いて、キャスターはユグドミレニア……とりわけ、己のマスターの私室の工房化を進める。

己が身につけた魔術。師匠譲りの幻術。あとは対霊体用の魔術をいくつか。

その全てが、最低限サーヴァントを相手にしても令呪を使う程度の時間は稼げる代

物。

急ピッチでの用意に一つ二つ宝石を消費してしまう事態にはなったが、命には代えられないだろう。

ついでに言えば、あの宝石は愛歌が用意したもので、憐の懐は全く痛んでいない。

「あ、あなたのカードを使って購入してるわよ」

「おい待て、いつの間に掏り取った」

「失礼ね、ちゃんと許可はもらったわ。暗示を使って」

「それは許可とは言わねえ……」

心を読んだかのような発言に驚くことは、キャスターももうなくなった。

代わりに、憐に背中を預けてくれることが多くなった。

そしてほしい、そういう時には何を求めているのか。召喚から数ヶ月も経てばある程度はわかるようになる。

「キャスターの方も助かった。こういうのは、ユグドミレニア側が何を仕掛けてるのかわからないからな。対処できるお前が一から工房化してくれるのは安心できる」

「そうやって褒められると、ちよつと恥ずかしいですね。魔術なんかでそこまで褒められるのは」

少し、顔を赤くしてキャスターは口にする。

その発言に、ちよつとだけ気がひけるが憐が口を出そうとすると。

「あ、こういうのはダメなんでしたっけ？」

「俺も愛歌も別にいいけど、他の魔術師に聞かれたら、ちよつとまずいことになりそうだよなあ」

直後、コンコンとノックの音が室内に響く。

どきり、と心臓が跳ねたのは憐とキャスターのみ。

愛歌は、平然とその何者かを招き入れる。

「永宮、ちよつといいか？」

そこにいたのはカウレス・フォルヴェツジ・ユグドミレニア。

ファイオレの弟であり、彼女には遠く及ばない程度の実力しかない魔術師であり、この聖杯戦争におけるバーサーカーのマスター。

仲がいいわけでもなく、悪いわけでもない。そんな相手。

「別にいいけど、どうしたんだ？」

尋ねれば、口にするべき答えにカウレス自身困惑している様子。

けれど、事実としてそこにある以上は受け入れなければならぬ。

聖堂協会、並びにユグドミレニアが持つ霊器盤に、とある霊基反応が同時に出了。

すでに黒が七騎、赤も七騎。聖杯大戦の許容はもうない。けれど——1つだけ、召喚

される可能性のあるクラスがある。

「ルーラーが召喚されたらしい」

「ふうん」

「ふうんって、お前なあ……もうちよつと驚けよ」

「世界に類を見ない規模の聖杯戦争なんだ。それくらいのにイレギュラーはあってもおかしくないだろう」

「まあ、それはそうなんだけどさ。とりあえず、ダーニック叔父さんはルーラーをこつちに引き入れたいらしくてな、今日の夜にでもゴールド叔父さんが接触することになりそうなんだ」

「あのおっさんが？ どう考えても人選ミスだろ」

「そう言つてやるなつて。そういうわけだから、今日の夜も“王の間”に集合するように、つてさつきあつたダーニック叔父さんに伝えるように言われたんだ」

「りよーかい」

そう返答して、夜までは陣地の強化を行うと告げたことでカウレスは去っていく。

彼が完全にいなくなつたことをキャスターと愛歌が確認をしたところで。

「今日、ようやく聖杯戦争が始まるのか」

「サーヴァント同士の戦い、という意味ではね。前哨戦ならちよくちよくやつていたで

しよう」

「ちよつとだけ、不安です。私がどこまで戦えるのか」
そんな、わずかな不安を吐露するキャスターの手を握った。

TYPE—MOON wikiを見て思い出してからア
ストルフオを使ったかつたと犯人は供述しており

聖杯戦争とは、七人の魔術師が万能の願望機“聖杯”を求めて争う魔術儀式。

サーヴァントという代理を立てて、魔術師では決して上がることができない闘争の位階で争う儀式。

そういう意味では、先日のセイバーの一件は“聖杯戦争”とは呼べない、お粗末な代物だった。

あれはあくまでもサーヴァント同士の戦いではなかったのだから。

だが、今晚は違う。

本当の意味での聖杯大戦の初戦。

キヤスターのスキル、“希望のカリスマ”による強化を受けたホームンクルスによる襲撃程度で済ませはしない。

今回に関しては、それで失敗しては目も当てられないのだから。

今、“王の間”に集つたのは合計五組。

“黒”が有するセイバーの英霊とそのマスター、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニア

はここにいない。

代わりに、彼らのいる場所がキャスターの放った使い魔によって可視化されている。

「ふむ、敵はランサーか」

そこにいたのは「赤」の陣営が有するサーヴァントが一騎。

誰もが理解したそのクラスを最初に口にしたのは、本来の聖杯戦争ではありえない同一クラスにて招かれた「黒」のランサー。

まず、彼が目を向けたのは「黒」の陣営が有する大賢者。

「大賢者よ、君はどう考える？」

「倒せない相手ではない、というレベルでしょうか。おそらくは最上位の英霊でしょう。此度は「宝具の性質がわかれば」というレベルではなく、そもそも「相手の宝具がどういうものなのか」を見た時点でこちらの損害は目を瞑れないレベルになる。そういう難敵だと私は思います」

「なるほど」

当然、「黒」と「赤」が出会ってしまえば戦う以外に道はない。

「赤」のランサーと「黒」のセイバーの戦いは、すでに始まってから一時間が過ぎ去ろうとしていた。

闇の中でなお鮮烈に輝く、二騎のサーヴァント。

そのどちらも、闇の中でありながら表情が誰の目にもはつきりと見える。

魔力を込めて剣の力を放つわけでもないただの剣技。

魔力を乗せて槍に炎を纏ったわけでもないただの槍技。

どちらも、音を置き去りとする絶技であり、だからこそ鋼がぶつかり合う回数は秒間100を超える。

絶技を持つ英雄同士、互いに次にどう動くのかを頭の中で浮かべることができてしま

う。
お互いがお互いに、“この男ならばこの程度”という思いを浮かべ、それを暗黙の了解として一瞬前の自分を超えていく。

散る火花が消えるよりもなお早く次の、また次の。鋼から無限に火花が生まれ、夜闇に包まれた街道を照らし出す。

斬撃の嵐に巻き込まれ、開始数秒で消し飛んだ街灯よりもなお明るく、その空間は恒星のように光り輝いている。

「これが、聖杯戦争……」

本当の意味でのサーヴァントのぶつかり合い。

その多大な畏怖の混じった声を発したのは、この聖杯戦争の調停者にして、今現在の対戦カードが組まれるきっかけとなったサーヴァント、ルーラー。

真名をジャンヌ・ダルク。救国の聖女と謳われた彼女は、この聖杯戦争の破綻を防ぐ役割を担う、何よりも重要な立ち位置。

そんな彼女を“赤”のサーヴァントは狙い、それを“黒”が阻止するという構図が、この戦いの始まりだった。

そうして始まった戦いは、徐々に推移しながら、戦況の天秤が傾くことなく均衡を保つ。

剣が、槍が、己が絶対の信頼を預けている武技を超えて、肉体に鋼の冷たさと相手が積み重ねた研鑽に込められた熱意を叩き込んでくる。

当たり前に考えれば傷は肉体性能の低下を招く一因。一つ一つは小さくとも、英霊同士の戦いにおいてそれは無視していい代物ではない。

だが、二人のサーヴァントは、その傷など知ったことではないと言わんばかりに戦っている。

理由は簡単、なぜなら二人は共に“不死身”であるのだから。
けれど、二つの不死身は対照的。

“黒”のセイバー、その真名はジークフリート。

世界的にも有名な“不死身の英雄”であり、背中という明確な弱点を持つ、という意味でも“英霊の真名隠匿”の概念を語る上での代表例。

竜殺しの名前をあげる場合、おそらくは最上位に来るだろう大英雄であり、当然霊格もそれに見合ったもの。

今回の現界において彼はその不死身の肉体を宝具という形で持ち込んでいる。

真名を『アーチャー・オブ・ファウニール悪竜の血鎧』。その効果は、一定以下の攻撃の無効化と、基準値を超える攻撃に対しての一定の減衰。

その基準は、Bランク。彼を傷つけるにはAランク……つまり英霊の中でも最高峰の力を持つ者の力が必須であり、彼が存在している時点で一部聖杯戦争では勝利が決まるとさえ言える英霊。

彼が身につける鎧を超えたとしても、その肉体に施された概念的な守りを超えられるかどうかは話が別。

では、そんな防御という面では目を見張る宝具を、宝具すら使わずに超えるこのサーヴァントは何者なのか。

現代の魔術師如きの治癒魔術ですぐに消滅する程度とはいえ、傷は傷。このサーヴァントの一撃はまさしく宝具級である、という事実がそこにはある。

それを成す“赤”のランサーの真名はカルナ。

生まれ持った時より、父である太陽神から不死身の鎧をもらい駆け抜けたインドの大英雄。

その黄金の鎧は、ジークフリートが竜殺しを成した武器である『幻想大剣・天魔失墜』
を受けてなお揺らぐことはない。

そして、何よりも重要なのが。

“赤”のランサーの鎧が破られた逸話はない。

受けるダメージを全て十分の一にまで軽減する鎧は、神話においてなお、奸計を
用いて奪われる、という形で排除されるだけだった。

故に、その鎧を破るならば致死量の十倍のダメージを与える必要がある、そのような
一撃を用意するのであればまず確実に宝具。

だが、宝具の真名解放など、やっている余裕はない。

ならば当然、二人の英霊はいつまでも戦い続けることになる。

“神秘の隠匿”の原則に従い、朝が来るまでは。

「あー、疲れました！ ただの村娘に、王様の前とか辛いです！」

「お疲れ様、キャスター」

戦いの中継を終えて部屋に戻った途端、誰の目もないのをいいことにキャスターは
ベッドに腰掛けた。

その顔からは当人の言葉通り、疲労がうかがえる。そこにちよどよく、部屋に残っていた愛歌が顔をだす。

「あ、チョコレート！」

「ええ、用意しておいたわ」

彼女が手に持っていたのは、チョコレートクッキーを乗せた皿。

それを見たキャスターが目を輝かせて、己のマスターに視線を向ける。

苦笑しながらも領けば、少女は愛歌に感謝を告げて、ひよいと一つ口に入れて幸せそうにはにかんだ。

「前は王様の前でも平然としてたのにな」

「あの時はほら、マスターが侮られるのは我慢なりませんでしたから」

今回はすでに実力を示した後だから考える余裕ができてしまったのだと、少女は笑う。

その言葉が憐にはとても嬉しい。

「なら、余裕のある今日は息抜きでもしようか？」

今日はサーヴァントは来ないんだよな、と尋ねる相手は沙条愛歌。

この聖杯大戦の全てを牛耳っていると云っても過言ではない、根源接続者。

「ええ。予定では、赤のバーサーカーの進撃が始まるのが明日ね」

「つてことは今日一日くらいなら、街中に繰り出しても問題ないわけだ」

「そうですね……えへへ、ルーマニアはほとんど周ったことがないので楽しみですよ！」

「二応、ライダーあたりと一緒にいこう。本当ならデートにできればいいんだけど、まーだ向こうは俺たちが魔術協会と繋がってるって考えてるみたいだからな」

監視役がいた方がやりやすい、と。

ライダー、その真名はアストルフオ。逸話の中で明言された事実をスキルとして持つ英霊の中でも、ひときわ目立つ存在。

その最たる特徴は、ライダー特有の多数の宝具でもなく、どこか低めのステータスでもなく、スキル“理性蒸発”。

“理性蒸発”をスキルで明言されているサーヴァントではあれど、だからこそ自分の欲望のための裏切りは許さない人物であろう。

真名を明かせば、蒸発した理性は勝手にそれを口にするかもしれないし、自分の感性に従う以上助けを求められたらば応えるかもしれない。

だが同時に、かの騎士はそれゆえに行動基準がわかりやすい。

裏切りのような行動を取らなければ、まず間違いなく彼がキャスターたちに敵対する理由はない。

「言っておくけど、私はやる必要があるから行かないわよ?」

「え、そんなんですか？」

「ええ。こればかりは他の人には任せておけないもの。私のことは気にしなくていいわ。あなたが色々とやってる間に遊んでるから」

「うー……」

「ほら、そんな顔をしないで？ また今度シヨッピングでもしましょう」

「絶対ですよ？」

そうと決まれば話は早い。

マスターであるセレニケ・アイスコル・ユグドミレニアの愛玩から抜け出したライダーに声をかけ、二人も同伴する形で“息抜き”を開始する。

そうして外に出てきた三人を、一羽の鳩が見ていた。

「確か、魔術師のアーサー王、だったかのう？」

その鳩の視界を通して、彼らの様子を見ていたのは“赤”のアサシン。

ルーミア全土に広がった鳩の警戒網は、アサシン……セミラミスが“使い魔（鳩）”をスキルとして持つことを知らなければ警戒などできようはずもない。

「ええ。獅子劫さんがこちら側にくれた情報の通りのようですよ」

そして、そのアサシンのマスターこそがシロウ・コトミネ。

かつて起きた最後の真なる聖杯戦争、亜種でも大戦でもないその戦いで召喚された、

アインツベルンのサーヴァント。

その聖杯戦争におけるクラスはルーラー。その時の特権を未だ残す、“見ただけで全
てのサーヴァントが何者かわかる”という反則級の力を持つマスターである。

「ジークフリートの対処はまだどうとでもなります」

だが、その彼を以てしても“黒”のキャスターの対処には悩む。

戦闘能力という点では、まず間違いなく“黒”のセイバー、ジークフリートの方が上
であるというのに。

とはいえ、それも当然のことだろう。

「彼は背中が弱点だということがわかっている。そこを狙えば、まず確実に倒せるで
しょう」

「それを除いても、まずライダーが相手をすれば負けはせん。神性を持たぬ者では傷一
つつけられないのが彼奴の特徴じゃからな」

「キャスターについても、そうであればいいのですが」

逸話がある、ということとは情報を得られる、ということだ。

情報を得られる、ということとは対策を練ることもできる。

だが、“黒”のキャスターにはそれが無い。

わかるのはサーヴァントとしての情報だけなのだ。

「ステータスだけでは対策が全く取れない。ライダーを下手にぶつけた結果、神性特攻を持ち合わせていては、彼を失うことになるだけです」

セイバー戦。そしてマスターとしての共通のステータス視認能力。意味をなさない真名看破。

この三つだけが今の彼がもつキャスターに対する情報。

アーサー王伝説を紐解けば予想はできるかもしれないが、それもあくまで予想にすぎない。

“アーサー王伝説にない何かの原因で魔術師になった”なんてことであれば、予想外に殴られる可能性もある。

なぜなら、この世界で彼女の能力を知ることができるのは彼女がそれを行使した時だけなのだから。

今のところ行使されたのは、キャスターがサーヴァントのスキルで言うところの『カリスマ』を持っていること。

宝具にも匹敵する超大規模魔術砲撃を放つことができること。

その二つだけ。

「初めてですよ。“普通のマスター”のような悩みを経験するのは」

「それも良い経験だろうよ」

くつくつと笑いを漏らすアサシンに、困った顔の神父。

普通に見ればサーヴァントに振り回されるマスター、と言う様子だが、これで二人の仲は良好なのだから不思議なものだ。

「ところで、もう一人のライダーの方の真名はどうなっておる？」

「そちらも情報通りですよ」

「確か……アストルフオ、だったか」

「ええ、よくある史実と性別が違うサーヴァントですね。全てが情報通りなら、“黒”のサーヴァントの中で空中庭園に入る手段を持つのは彼女だけでしょう」

あなたの庭園が負けるとは思いませんが、と告げるシロウに当然と返すアサシン。

シロウが願い、アサシンが興味を持った結末に至るため、二人の計画はじきに雌伏の時を終えることになる。

キヤスター……なんで君は宝剣を大量に持ち込むの???

ミレニア城塞における“王の間”とは、文字通りの王の間……城でいうところの玉座である。

当然、そこは“黒”のランサー……ヴラド三世が座るべき場所。

聖杯大戦が動く何かがあったならば、全てのマスターとサーヴァントがその場に集い、彼の従者という立ち位置を崩さないダーニツクからその“何か”が伝えられる。

今回もまた、そういう話だった。

「諸君」

此度の兆しを見つけたのはキヤスター。

というよりも、魔術師のサーヴァントである彼女以上に早く発見することは難しい。

ユグドミレニアの警戒網は、彼女が放った使い魔によって構築されているのだから。暗くなった室内に映し出されるのは、キヤスターの使い魔が視認した映像。

常にその映像の中心に立つように焦点が合わされているのは、半裸の筋肉だった。

「キヤスターによれば、このサーヴァントは昼夜を問わずに真つ直ぐ森を突き進み、このミレニア城塞を目指して進んでいる」

二メートルを超える巨漢。その青白い肌には無数の傷が刻まれていて、なのに何が面白いのか笑みを絶やさずに森の中を走り抜けている。

彼の周囲にはサーヴァントの気配はない。七騎ものサーヴァントが待ち構えるミレニア城塞に単騎で突撃するなど正気の沙汰ではないが、同時に正気ではないからこそそのクラスは絞られる。

「私はこれをバーサーカーだと睨んでいる」

当然、聖杯戦争をよく知るダーニツクがそれに気がつかないはずもない。

理性がないバーサーカーのクラスはマスターの命令に従うが、クラススキル“狂化”のランクが高ければ、こうした暴走も十分にあり得るのだ、と。

この六十年間で集まった、亜種^{サブ}聖杯戦争^{バトル}から読み取れたクラスの傾向を口にする。

「叔父様、どうなさいますか?」

どうする、とは聞きながらも排除することは疑っていないフィオレ。

だからこれは、どれだけの戦力を用いて撃破しますか、という疑問。

“赤”のバーサーカー、スパルタクスはマスターのステータス透視能力で確認したところ、筋力は最高峰、耐久が規格外。あとはそこまで高くはないとはいえ、筋力と耐久が高評価である以上生半可な戦力では撃破されるだけの可能性もある。

ただでさえ、アサシンが合流していない今、少しでも“黒”の戦力が減らされるのは

避けたいところなのだが――

そんなことは当然、ダーニックもわかっている。

「無論、この機を逃す手はない」

だが同時に、アサシンが合流していない七対六の状況だからこそ、アサシンが合流する前に攻められたとしてもどうにか巻き返せるように減らしておきたい、というのも事実。

けれど、ダーニックにはもう一つだけ思い浮かんだことがあった。

成功すれば一発逆転とまでは行かずとも、こちらの戦力補充となり相手の戦力を減らすことができる、そんな手が。

「倒すだけならばサーヴァントを三騎も出せば事足りるだろう。だが、これは此度の聖杯戦争で唯一無二の好機。上手くすれば、この“赤”のバーサーカーと思しきサーヴァントを、こちらの手駒にできるのではないかと考えている」

マスターの鞍替え。

聖杯大戦の陣営とは、あくまでも『まずは共に戦う間柄』でしかない。

最終的に願いを叶えられるのが一騎な以上、相手陣営を倒してしまえば、その瞬間仲間は敵に早変わり。

つまり、潜在的には自分以外のサーヴァントは全て敵、というのは普通の聖杯戦争と

変わりない。

それを考えれば敵対するサーヴァントを内に引き入れ、戦力として敵にぶつけるとい
うのは不可能ではないが。

自分のサーヴァント以外は全て敵である、というのが前提としてあった“黒”の陣営
の面々がざわめくのは無理のないことだと言えるだろう。

「では、具体的なプランを聞かせてもらおうかダーニツク」

ざわめきが落ち着いたら頃合いになって尋ねたのはランサー。

口にする、ということはそのための策があるのだろう、という確信を込めた呟き。

「はい、領王^{ロード}よ」

その言葉にダーニツクも頷き、作戦が伝達される。

“赤”のバーサーカーを捕獲する作戦。その開始は彼がミレニア城塞に到達する頃
合い。

緩やかな闊歩にて迫るバーサーカーが到着するまでには、あと一両日程度の時間があ
る。

その間に準備を整えて、確実にバーサーカーを確保、できずとも“赤”の戦力を削ぐ
ことを目的に、サーヴァントたちは一斉に動き出した。

「あんな大男、私の趣味ではないのだけれど」

愛のために定められた歴史に反逆した少女は。

愛のために英霊を使い潰す暴虐を平然と働いた少女は。

根源由来の知識ではなく、キャスターの魔術で視認した英霊を見てそう呟いた。

「そうは言っても、今こっちでサーヴァントを使役する余裕があるのはあなただけなんだから仕方ないでしょう？」

そんな彼女に呆れた様子を見せるのはライダーのマスター、セレニケ。

趣味の波長がなんとなく似通った二人は時折、こうして二人で会話をしたりする中である。

「代わりにライダーをちょうだいな。そしたら、あなたがバーサーカーを使えるじゃない」

「いやよ、あなたの趣味じゃないってことは私の趣味でもないってわかってるでしょう」

映像に映るのは、“赤”のバーサーカーの快進撃。

そこに目を惹かれるところなどありはしない。

“希望のカリスマ”と“独自魔術”による恩寵を賜ったホムンクルスたちは、下級

サーヴァントであれば十分に戦えるだけの身体能力スベツクを誇る。

普通の聖杯戦争ならば、十分な脅威と呼ぶことができた代物ではあるが、この聖杯大戦に限っては話は別。

魔術協会は己の威信を守るため、全力でユグドミレニアを潰しにきている。

当然、低スペックのサーヴァントなど呼ぶはずもなく、ホームクルスは結局雑兵以上にはなることはできない。

もし仮に、彼らのスペックが高くとも、英雄相手に意志薄弱な彼らで勝てるはずもないが。

「もうちよつとスマートに戦ってほしいわよね」

「戦いの時は凛々しくもあつてほしいわ」

「あの不気味な笑みは減点ね」

「同じ」敵の攻撃を受け止める」でも、あんなに気色悪いとは思わなかったわよ」

一つ一つ、丁寧にダメ出しを上げていく。

あのサーヴァントを受け入れられない理由も、趣味が合う二人は「趣味に合わないから」という理由でほしい共通する。

相手が述べた不満点は大体自分の不満点でもあり、打てば響くように自分が口にした不満点を口にしてくれるから話はどんどん弾む。

「あ、マナカ。そろそろあなたの出番だと言ってましたよ」

「そう、それじゃあ私はもう行くわね」

「ええ、頑張りなさい」

ふらりと、キャスターが姿を現す。

もう時間になったのね、と。キャスターが来たのはつまりそういうこと。

本来ならばキャスターがするべきだったサーヴァント契約が愛歌に回って来たのは、

セイバー戦で見せた大規模魔術。

セイバーの宝具『幻想大剣・天魔失墜』にすら匹敵するレベルの魔術を使える相手を、

サーヴァントへの魔力供給で無駄に手間を増やす必要もないだろう、と。

愛歌を呼び出したキャスターは、そのまま城壁の上へと登る。

彼女の視界はサーヴァントとしては平均的だが、使い魔を用いることで弓兵以上の範

囲を多角的に見ることが可能。

そんな彼女を以てしても、バーサーカーの援護のためにやって来た“赤”のライダー

の動きを視認することは非常に難しかった。

「アーチャー、ライダーの援護はあなたに任せても？」

「ええ、任せましょう」

バーサーカーの援護は、“赤”のアーチャーことアタランテとライダー、アキレウス

の二人。

当初よりバーサーカーの援護に何某かのサーヴァントが来ることは予想されていた。それを見越して決定されていた布陣ゆえに、必要最低限の連携のための意思疎通は交わしてある。

「まさか、ライダーがこれほどまでに強いとは」

「まあ、当然と言えば当然でしょう。彼はアキレウス、最速の英雄なのですから」

「弟子、なのですよね？」

「はい。ですが、気にする必要はありませんよ。可能性は低いとは言え、こうなることは十分にありえますから」

キャスターの場合は少し違ったが、生前の知り合いが敵に回るなど聖杯戦争ではよくあること。

一々気にしては召喚に応じるなどできはしない。

二人には、“黒”のセイバーとバーサーカーがアキレウスを相手取っている姿が見える。

セイバー、ジークフリートは確かに有名ではあるが、人体の一部にすらその名を冠するアキレウスと比べれば、どうしようもなく見劣りしてしまう。

バーサーカー、フランケンシュタインの怪物は、そもそも近代の英霊であり、神代の

戦いに喰らいつけているだけでも優秀と呼ぶべきだろう。

何よりも、“黒”のセイバー、“赤”のランサーとはまた違う不死性が彼に備わっているせいで、何者の介入もない場合、この戦いの結末は始まった時点で決まってしまう。

「神性がないと攻撃が通用しない、ですか」

「ですから、あの二人では決してアキレウスには勝てない。踵を狙えるならば話は別ですが、それをさせてくれるほど甘い戦士に育てた覚えはありませんからね」

ぎりぎり、とアーチャー、ケイローンが弓を引き絞る。

その心眼は幼い時分に見極めたアキレウスの癖、性格、あらゆる要素を加味しての回避不能の一撃。

そしてその上で、回避する、迎撃する、そういった可能性を考慮し、その偶然^{当然}を掴み取った場合の彼の挙動をも見透かす。

「余裕ができ次第そちらの支援も行います」

「ええ、ありがとうございます。私も正直に言えば彼の動きが見えているわけではないので、動きを妨害してくれるのならやりやすくなります」

キャスターが魔術詠唱を開始する。

同時に、彼女が持つ宝剣の数々が、その詠唱に従い並列起動。

サーヴァントの武器であり、同時に“アーサー王伝説にその名を残す”という一点で宝具級の神秘を宿した魔術触媒として、より高次の魔術戦を可能とする。

「暗殺者の真似事は得意ではないのですが、魔術師として正々堂々、決闘という名前の不意打ちをさせてもらいますね」

——セクエンス、カルンウエナン。 リミテッド 限定開放。

告げられたのは二つの銘。

同時に、輝いた宝剣が伝説に記されし力を発揮する。

月明かりが作り出す影の中に少女の姿が溶け込む。

影潜みのカルンウエナン。その真骨頂。

影に溶け込み、その状態のまま魔術詠唱。

置換魔術を用いて、影から影へと渡り歩く。

向かう場所は“赤”のアーチャーの足元の影。

英雄としての嗅覚を持つアキレウスは、自らを傷つけることができる“黒”のアーチャーへとその全てを向けている。

殺気、大気の震え、戦意、あらゆる要素が彼を現実に引き戻すだろうが、だからこそ外界に影響を及ぼすことのない影中の魔術行使は、そこにまで気を向けていないアキレウスは気がつけない。

「セクエンス。あなたの力を、ここに」

たどり着いた先で、少女は影の中、一つの魔術礼装を取り出す。

沙条愛歌に頼んで用意してもらった魔術礼装。掌よりもわずかに大きなカードの名は、クラスカード。

剣士が描かれたそれは、アーサー王を己に置換する力を持っている。

「夢幻召喚」
イェンストリアル

正直に言うのならば、こんなことをする必要はない。

するのならば武器だけ呼び出すインクルード限定展開でも十分。

けれど、剣を扱うのが少し怖いキヤスターは、剣を扱うことに長けたアーサー王の力も引き出した。

呼び出したのはアーサー王の代名詞、エクスカリバー。

セクエンスが置換され、唯一無二の聖剣に変わった。

けれど同時に、それはまだセクエンスでもある。

「約束された」
エックス

カルンウエナンの力が解除される。

直後、“赤”のアーチャーの影から少女の姿が見えた。

弓は、矢を番え、引く動作が入るもの。それはたとえ、英霊であろうと変わらない。

たとえ、どれだけその動作が早かろうと。

この距離ならば、少女が聖剣の真名を解放する方が確実に早い。

最速の英霊が止めようと走りだす。

獣の俊敏を宿した弓兵が、間に合わないかと察知して避けるために全霊を尽くす。

けれど、どちらももう遅い。

「勝利の剣——ッ！」

瞬間、光の濁流が夜の森に輝いた。

“黒”のアーサー……???(頭の中によぎった戯言)

セクエンス。

それはアーサー王伝説に出てくる剣の一種。

伝承に曰く、“決闘でのみ使用を許される剣”である。

クラスカードは、その英霊を置換するものではあるが、触媒に使う魔術礼装の力が発揮されなくなる、ということはない。

どこかの世界で、アーサー王を夢幻召喚インストールした少女が、無限の魔力供給をなされていたように。

どこかの世界で、夢幻召喚を行なった少女が、置換した状態の魔術礼装が持つ疑似人格と会話をしていたように。

“黒”のアーチャーの援護は完璧だった。

完璧に、アキレウスの動きを読みきって、アキレウスが“赤”のアーチャーを助ける動きを封殺していた。

そしてその上で、ライダーは彼の妨害のすべてを超えて、最速の名に相応しく“赤”のアーチャーへと向けて走っていた。

英雄らしい、あらゆる困難を踏破する姿。

仲間を助け、障害を踏破し、勝利の証たる凱旋を迎える。

そんな未来が待ち受けていると、何の根拠もなく信じられるその姿。

けれど、忘れてはいけない。

英雄とは、仲間を失い、没落し、最後には非業の死を遂げるまでが英雄譚なのだ。

結論から言えば。

ライダーはその光の奔流からアタランテを助け出すことが叶わなかった。

相手は英雄。ならば、どれだけの備えをしても足りないということはないだろう。

セクエンスは、決闘でのみ使うことが許される剣。

つまりそれは“使った時点で、それが決闘とみなされる”ということでもある。

使用者と対象を一对一の状態に持ち込む、そういう宝剣が使用された以上、アキレウ

スにはそれを阻害する手段がなかった。

「姐さん！」

アキレウスは見る。

そして悟る。これはもう無理だ、と。

半身が吹き飛んでしまっているこれは、もう“回復”ではどうにもならない、蘇生の

域の魔術が必要となる。

歯ぎしりをしたアキレウスの瞳が、影に溶け込もうとするキャスターの姿を捉えた。
「逃がさん！」

最速の英霊が、その逸話から得た宝具を用いて走る。

視界に入っている以上、彼女が影に溶け込むよりもなお早く、彼はその場に到達し心臓を穿つ。

ただし、邪魔が入らなければ、の話ではあるが。

「ちいっ！」「黒」のアーチャー！

矢が風を斬り裂いて届く。アキレウスの動きは怒りに鈍ることもなく、これ以上なく完璧に撃ち落とす。

セイバーが切り込んだ。届いた大剣は彼に痛痒も与えることはできず、引き戻した槍の一撃が衝撃で彼を弾き飛ばす。

バーサーカーが戦槌を叩きつける。所詮、セイバーにも劣る英霊。条件を満たさぬ以上注視する必要はない。

そこにさらに差し込まれる「黒」のアーチャーの一撃。戦鎚を弾き飛ばすコンマ秒以下に届く矢を膝の鎧で流そうとして――

「っ」

失策を悟る。

背筋が凍るような悪寒。ゆるりと光沢すら発する鋼の曲面が流すはずの矢が、微妙に外れている。

アーチャーの放った矢の通る位置、風を斬る音から察した届く位置を、それをライダーが察することをさらに察して微妙にそらす絶技。

そして、何よりも。

この光景を見ていた誰もが、“赤”のライダー自身も驚くべき結果がそこにはあった。

それこそ、敗れてしまった“赤”のアーチャーへの心配が吹き飛んでしまうほどの、現実が。

「は——」

流れている。

赤い一筋の雫。とても浅く、その傷は致命傷には程遠く、戦いを妨げるほどの価値もないが。

それでも、今この場においては値千金の価値を持つアキレウスの血。

同時に、誰もがその不死身の理由を理解する。

火力という面で劣ると思われないが、ジークフリートの聖剣は容易く弾かれ、ただの鍔は通ったというその事実。

概念防御。

遠距離攻撃に対して防御が働かない、というわけではない。

それならば、落とし方はもつと必死になっていたはずだ。

そうでなくとも、傷つけられたという事実には呆然とするはずがない。

概念が破られた今ならば、通るかもしれない。

そんな錯覚を抱いた“黒”のセイバーは即座にそれを破棄する。

不死身の概念を持つ英霊は基本的に、正当な、神話の中での破り方をされた場合霊核に致命傷を負う。

ジークフリート自身が、背中を傷つけられれば死ぬように。

不死身の弱点を突くというのは、英雄譚の終わりを再現するということなのだから。

何よりも――

「面白いぞ、アーチャー！ お前は俺を傷つけることができるのか！」

先ほどもまだ呆然としていた、今は歓喜に打ち震え、哄笑するライダーをこそ、ジークフリートは警戒した。

自らを殺せるという戦士を前に、怯えるでもなく歓喜するこの戦士をこそ。

その気持ちが変わってしまうことが、また憎い。

ほんの少し前、“黒”のセイバーが“赤”のランサーと戦った時に抱いた感情。

それに近いものをこの男は感じているのだろう、と。

あるいは、その不死身が自ら勝ち得たものでなかったとするならば、彼の歓喜は想像を絶するものかもしれない。

今すぐに“黒”のアーチャーに向けて飛び出すかもしれない。

その警戒が、“黒”のセイバーの総身に満ちる。

「おお、オリンピックの神々よ！ この戦いに名誉と栄光を与え給え！」

その言葉とともに、戦意が爆発する。

“黒”のアーチャーはケイローン。ギリシャ神話における英雄たちの教師。

かの有名なヘラクレスも、そして目の前のアキレウスも彼が育てた存在。

当然、近接戦の心得も熟してしかるべきではあるが、それでも本質は弓兵なのだ。

俊足の英霊を前に、敗れないという保証はない。

飛び出す、そう思った瞬間に前に出たジークフリート。

けれど実態はその真逆。

“黒”のアーチャーに向けて飛び出すと思われた“赤”のライダーがその場を跳び退り、ジークフリートは目を見開く。

ライダーの視界には、もはやセイバーもバーサーカーも入っていない。

入っているのは未だ姿も見えぬアーチャーのみ。

「仕切り直した、アーチャーよ！ その首、次に会う時まで預けておく。そして、その戦いこそがこの聖杯大戦の行く末を決めるものとなろうぞ！」

その言葉に、“黒”のセイバーも納得する。

要は、感情の問題だ。

自分たちでは、“赤”のライダーに傷をつけることはできない。

概念防御を前にしては、如何に強力な宝具であろうと、概念を有さなければ無意味であり、傷をつけることができたケイローンと傷をつけることができなかつたジークフリート、そしてバーサーカーには共通する概念が一つも存在しない。

つまり、セイバーとバーサーカーは彼にとつては障害ではあつても敵対者とまで呼べる域には達していない。

自らが得難い難敵であつた“赤”のランサーと決着をつけたいと望むのと同様に、彼は自らを傷つけ得る“黒”のアーチャーとの決着をつけたいのだ。

それも、誰の邪魔も入らない決戦という形で。

だが、気持ちはわかるが逃がしてやる義理もない。

むしろ、“黒”のアーチャーが確実に健在で、他のサーヴァントによる邪魔が入らない今のうちにこそ倒しておくべき敵である。

セイバーはそう認識して走り出す。

指笛を吹き、彼がライダーである所以たる騎馬が現れる。

空から闇を切り裂き舞い降りたのは三頭立ての戦車。

不死を宿した二頭の神馬、クサントスとバリオス。そして、それに匹敵する名馬、ペーダソスが繋がれた戦車はライダーを乗せて夜空を切り裂き、瞬時にミレニア城塞からの撤退をなすだろう。

走り出す寸前、セイバーが跳躍。スタートを切る秒の刹那にその大剣にて斬りかかる。

馬を一頭でも落とせば、戦車の機動力を完全には発揮できぬ。

三頭ある馬のうち、彼が狙ったのはペーダソス。唯一不死ではない、けれどそれに匹敵する馬。

それを狙ったのは完全な偶然。あるいは戦士の勘とでもいうべきもの。だが同時に、最適解であった。

放たれた剛剣はその首を両断する勢いで走り――

「……………」

到達する直前、クサントスがどこか億劫そうな顔でその身をわずかな隙間に差し込む。

不死の神馬には不死殺しの属性のない幻想大剣は通らない。

ただの馬にはありえぬ硬さに瞠目したセイバーを、走り出したバリオスが轢き飛ばす。

引きずられるように走り出した二頭の馬も加わって、瞬時に音を超えるスピードへと到達する。

これでまだトップスピードではないというのだから恐ろしい話だ。

もう、あの速度ではアーチャーの弓矢も追いつけない。

この場は撤退する彼を見逃すしかない、という事実には剣を下ろす。

『これ、いい感じですね』

その直後、キャスターの声影が響く。

彼女の興味を向けられたバーサーカーがウウ、と不満そうな声を漏らす。

“赤”のライダー戦での援護が一切なかったことへの不満、なのだろう。

狂化のランクが低い彼女は、意思疎通ができる程度には理性があるとキャスターも聞いている。

『ごめんなさい、この一撃の準備をしてたんです』

だから、大した一撃でなければ許さないぞ、と思つて。

直後、その場に残った残留魔力の一斉励起に目を見開いた。

『聖槍、抜錨』

威力は極限まで落としても問題はない。代わりに、今も空を駆けるライダーに届く速度へ威力を変換する。

これは、ただの確認。

キャスターの魔術が通用するのかどうかの。

他の魔術では、神性のない彼女は通用させられないだろうが。

この再現術式ならば、あるいは。

『解放、〃最果てにて輝ける槍〃!』

放つ聖槍は宝具と呼ぶには威力がまるで足りない。

けれど、サーヴァントへ最低限のダメージを与える程度の神秘は保有し、それが音速

の魔力砲撃としてライダーに迫る。

「ちっ」

ライダー自身ならば神性宿らぬ攻撃である限り問題ないが、戦車はそうはいかない。

キャスターが狙いを定めているのか、戦車の急旋回にすら対応してくる。

ならばこの身で受け止めるのみ。

姐さんと呼び慕ったアーチャーを破った相手。

聞いた話では〃赤〃のセイバーを撃退する際にも似たような魔力砲撃が使われたら

しい。

つまりこれは宝具級。そして先ほど見たあの剣の光……これはまず間違いなく”黒のサーヴァントの切り札。

宝具名を聞いたことで、なおさらクラスがわからなくなった、あの英霊が全てをかけるにたる、そんな代物。

その全霊を身一つで受け止めることでアーチャーへの手向けとしようと、迫る光に振り向いた瞬間。

「——っ」

アキレウスは、盾を呼んでいた。

真名の解放は行わない。それほどの威力はこの光熱には宿っていない。

だが、防がなければならなかった。

その確信は、盾にぶつかり散る光が宿した熱が、わずかにアキレウスの頬を焼いたことで間違っていないかったと自覚する。

「なるほど」

光が消え、盾も魔力に還し、アキレウスは笑みを浮かべながら呟く。

一日で、二人も自らを傷つけ得る好敵手を発見した。その事実が、たまらなく嬉しい。

何故ならば、彼は英雄。英雄とは、強い力を持って伝説を残したのではなく、困難に挑み、自らよりも強大な存在から勝利をもぎ取ってこそ。

自らに傷すらつけられない”障害”をいくら倒したとて、それが何の自慢になろう。傷をつけられないとは、つまり負けられないということであり、そんな自分と対峙して踵を狙い打てるというなら、それこそ本望。

アキレウスという最大級の英霊の猛攻をかいくぐり、踵を狙うことができる技量を持つということなのだから。

「貴様も、また俺と対峙する資格を持つということか、“黒”のサーヴァント、アーサー！」

先ほど、“赤”のアーチャーを撃破した宝具を聞けば、その真名は一目瞭然。

聖剣を持つセイバーのクラスも、聖槍を持つランサーのクラスも埋まっている以上、どのクラスで召喚されたかはあとでいいけ好かない神父に聞く必要があるだろうが、と。

アーチャーを殺した相手への敵意はある。あるが同時に、一筋縄ではいかない難敵との戦いは心が踊る、とライダーの顔が綻ぶ。

「ならば、待っているがいい！ 次の戦いの時を！ その時まで誰にも殺されることなく、この“赤”のライダーの槍が心臓を刺し貫く時をな！」

憎悪と敬意と感謝の入り混じった宣誓。

もう、決して届くはずもない距離にいるはずのライダーの、力のこもった宣誓は、けれど使い魔を通して“赤”の陣営の場所を探る黒の陣営に届く。

「アーチャー、次の時は完全に任せますね。私、魔術師キヤスターですから」

「ええ、前哨戦はこうでしたが、次に彼が攻めてくるとなると、“赤”の陣営の総攻撃でしょう。その時、あなたには“赤”のキヤスターの魔術援護を砕きながら、こちらの援護をもらう必要がありますしね」

「そつちも大変ですけど、絶対に大英雄アキレスと相対するよりはマシですよね」

寄つてきたセイバーとバーサーカーが、その真名を聞いて驚愕と、同時に納得をする。神によつて与えられた不死の加護は、神の力でなければ貫けない。

それがあの頑丈さの種だったのか、と。

「じゃあ、私はマスターの元に戻りますね」

報告をお願いします、とそう言つて楽しそうに小走り進むキヤスターは、どう見てもただの村娘にしか見えない。

王にならなかつた、一応は一般人でしかない少女が、あれほどの一撃を放てる。アーサー王の時代、というのが一体どのような時代だったのか、ふときになる三騎のサーヴァントだった。

なんで聖杯大戦に勝たないといけないんですか？（宇宙

猫顔）

「素晴らしい戦果だと思わないか、ダーニック？」

「ええ、まさかこれほどまでとは……」

ランサーに応えるダーニックの言葉には、これ以上ない喜色が混じっていた。

彼が王の前で感情を顕にするのは珍しいことではあるが、それも当然のことだろう。

元々の予定では、“赤”のバーサーカーを確保し、六対七の状況から七対六に逆転させるはずだった。

その援護にやってくるであろう“赤”のサーヴァントは、倒せずとも邪魔さえさせなければ、それで問題ないと思っていた。

けれど蓋を開けてみれば、“赤”のバーサーカーを確保し、“赤”のアーチャーを撃破し、“赤”のライダーの真名を暴くという戦果。

その上で、暴かれたのは未だ信用しきれない“黒”のキャスターの真名のみ。

最も良い戦果がこちらの情報を一切与えずに相手のサーヴァントを奪い、そして援護にきたサーヴァントを撃滅することだとするならば、これは考えうる中で三番目にいい

戦果。

六十年、聖杯の降臨と己が子孫の未来の栄達を取り戻すために準備をし続けたダーニツクからすれば、最高の滑り出しについて言葉に感情が乗るのは仕方のないこと。

「……申し訳ありません、領王^{ロド}よ」

「いい。気にするな」

とはいえ、魔術師としての彼はそうは思わない。

己の感情を制御できないなど、魔術師としては三流。先代のエルメロイが婚約者に気を取られた結果、無残な敗北をしたというのは魔術師の中では有名なことである。

本心ではない、あるいは恐怖からくる阿諛追従は聞き飽きたランサーからすれば、こちらの方がわかりやすく大変結構だとしても。

彼に王としてのプライドがあるように、ダーニツクにも魔術師として、ユグドミレニアの長としてのプライドがある。

アキレウスは、神性なくば攻撃が通らない。

踵を狙うならば話は別だが、その程度、相手が想定していないはずがない。

ならば、彼はケイローンに任せるべきだろう。

むしろ、問題があるとするならば――

「ふむ、キャスターは神性を宿す攻撃もできるか」

「そのようです」

そう、キャスターのことだ。

言ってしまうえば、できることが多彩過ぎる。それに尽きる。

今は味方だから問題ないが、“赤”の陣営を倒し終えれば、そのあとは普通の聖杯戦争。

強力な、頼りになる味方として共に戦った者が全て敵に回るのだ。

(いや)

彼らの場合は、今味方であるかどうかすら怪しい。

ユグドミレニアの人間でない憐への警戒がダーニツクの中から完全に消え去ることはないだろう。

それこそ、ユグドミレニアの者と婚姻でもして、完全にユグドミレニア側にならない限り。

(ファイオレを使うか……?)

彼女を用いれば、その婚姻が成功しようと失敗しようとどちらであろうと問題はなくなる。

ユグドミレニアの結束を深めるため、未だ同盟者でしかない憐を真に千界黄金樹に迎え入れようと思う、などと口にすれば断れまい。

断れば、『ユグドミレニアに入ること厭う』ということでも魔術協会側であると難癖はつけることができる。

(だが……)

それをすれば、憐が獅子身中の虫であるかどうかは確認できるが、せつかくの戦力を失うことにも繋がりがかねない。

さらには、“赤”のバーサーカーを使役する沙条愛歌も、彼が持ち込んだバックアツプだ。

キャスターのマスターが離れることになれば、あるいは彼女も離反するかもしれない。

サーヴァントは、使い魔ではあるが同時に一個の人格を宿した敬意を表すべき存在である

敵のサーヴァントが強力であることが発覚した今、キャスターの力を十全に發揮させられる憐をわざわざ切り離すのは――

(問題は山積みだ)

そこまで考えて、心の中で一つため息を吐く。

どう言い繕っても、今は一応味方であるという事実。そして彼らの力が必須であることには変わりがない。

潜在的な敵だというのならば炙り出し、その上で即座に処理すればいいだけのこと。使えるうちは存分に使わせてもらおう、と“黒”のキャスターの運用法を考える。

“黒”のキャスター、真名はアルトリア。アルトリア・キャスター。

こちらとはまた別の世界、王にならなかつたアーサー王。

アーサー王が女であつた、というのは驚くべきことではない。

だが、並行世界の存在を呼び出した、というのは脅威である。

何があろうと、この世界では彼女についての情報を得られない。

（この世界のアーサー王と弱点が同じとは限らないが）

今の所、警戒できるのはアーサー王を殺した騎士、反逆の騎士モードレッド程度であらう。

だが、“黒”のアーチャーと“赤”のライダーで、すでに生前の因縁を持つ二人が同じ聖杯戦争に召喚されるという事態は起きている。

この上で、ピンポイントに“赤”にモードレッドが召喚されているとは考えづらい。

「失礼します、叔父様」

「フィオレか」

そんな思考を中断したのは、“王の間”にやってきたフィオレ。

彼女の車椅子を押すのは、フィオレのサーヴァントである“黒”のアーチャー。

二人とも、今日の戦果に非常にそぐわない顔をしている。そこが、ダーニツクには疑問だった。

「つい先ほど、ホームクルスたちが」赤のセイバーとそのマスターを発見しました」
「ほう」

あの超大規模魔力砲撃から令呪を使用したとはいえ生き残ったという事実。

死霊魔術師として、死体漁りのために多くの戦場を駆け抜けた魔術使い、獅子劫界離。未だ年若きファイオレやカウレス、プライドだけが肥大化したゴールドあたりがそれを嫌悪し、見下すのはわかるが、自らもどうやら過小評価していたようだ。評価を上方修正する。

「ということは、あのサーヴァントの真名を伝えにきたのかね？」

「ええ」

ランサーの言葉に、アーチャーが頷く。

“赤”のセイバーは、キャスターの魔術からマスターと己を守るために宝具を解放した。

魔力砲撃は超轟音を立てて迫ったが故にその真名は誰の耳にも届かなかったが、だからと言って真名がわからないわけではない。

ケイローン、ギリシャ神話に名高きケンタウロス、多くの英雄を育て上げた教師。当

然そんな彼は読唇術も備えていても不思議ではない。

「あのセイバーの使った宝具、その真名は『我が麗クラレント・ブラッドブラッドアーサーへの叛逆』」

だから、その言葉も信じるしかない。

ダーニツクが目を見開き、ランサーが面白そうにほう、と呟くのはそれが簡単には信じられないような出来事であるからで。

けれど、ケイローンが口にするのであれば、それにはきつと間違いはない。

『燦然クララと輝ラレく王キング剣』、だと!？」

その宝具の名前は知っている。

アーサー王伝説を知る者ならば、きつと誰もが知っている。

その剣は、アーサー王伝説を終わらせた叛逆の騎士が持つ武器の名前だから。

「つまり、あの『赤』のセイバーの真名は」

「はい、そうなのでしよう」

叛逆の騎士、モードレッド。

アーサー王の息子にして、認められることのなかった後継者。

カムランの丘にてアーサー王を殺した騎士。

「なんと偶然だ……」

いくら最大規模の聖杯戦争とはいえ、二組も生前に因縁を持つサーヴァントがいると

は。

そう考えて、いいや最大規模だからこそか、と思い直す。

最大規模で、どうしても負けるわけにはいかない戦いで、だからこそ、選出はどうしても似通う。

最上級の英霊を！ 最強の英霊を！

基本の思考はそんなものだろう。

「だが、そうなるとキャスターにはできる限りこの城塞を出ないように言わなければならぬ」
「ええ。モードレッドが相手となると、よく外に共に出るライダーが前衛を務めるのは無理でしょう」

そして、ライダーはその“最上級の英霊”には含まれない。

どちらかといえば、セレニケの趣味とライダーの特徴である“多彩な宝具”を求めたの選出。

対応力は高いが、正面戦闘力はそこまで、といったレベルのサーヴァント。

外に出るといふのならば、“黒”の陣営では三騎士レベルが欲しいところ。

けれど、ランサーは王故に動かさず。セイバーはマスターの命で自由な行動ができず。アーチャーはマスターの生活補助がある。

キャスター、そしてライダーの娯楽のために外に出る、というのももう難しいだろう。

「キャスターは今どこに？　明日になれば、きつとまたライダーが共に出かけるように誘うだろう。そうなる前に言い含めておかなければ」

そうと決まれば、当然まずはキャスターにそのことを伝達しなければならない。

ダーニックが尋ね、フィオレ主従が知らないキャスターがどこにいるのかというところ――

「これが大聖杯、ですか」

「ああ。冬木から持ち去られて六十年。ずつとここに隠してあったらしい」

ユグドミレニアの秘奥、大聖杯の前。

本来ならばダーニックとフィオレ、現在の当主と次期当主以外には知らされないはずのその居場所を、憐とキャスターは訪れていた。

知られれば、まず確実に裏切りと取られる言動。

「それで、どうだ？」

「うーん、ダメですね」

魔力の溜まった宝石を飲み込みながら尋ねる憐に、大聖杯に触れたキャスターは首を振る。

まだ魔力が溜まっていません、と。

聖杯とは、そのうちに溜め込んだ膨大な魔力を用いてあらゆる願いを叶える願望機。

その魔力の源は、敗れたサーヴァントたち。

サーヴァントの数にして六騎。それだけの英霊が魔力として聖杯の内に還元されれば、世界の内側のことであればなんでも叶えられるだけの魔力になる。

つまり、願いの内容によつては一騎倒しただけでも魔力量的には十分叶えられる可能性はあるのだが。

「ダメだったかー」

「はい、感覚的には後一、二騎分の魔力が溜まればいけるかなあ……行けるといいなあ」
キャスターの願いは、どうやらまだ叶わない様子。

そんなことを考えて、ふと憐は気がついた。

そういえば、まだキャスターの願いは聞いてないな、と。

はつきりとはわからないが、想像はつく。

魔術師として根源を目指す少女には見えない彼女は、どこにでもいる村娘のようだからこそ願いもありふれた、些細なものではないか、と。

だからこれまで気にしてこなかったわけなのだが、一度気になってしまえば、頭から離れない。

「え、私の願い……ですか？」

「ああ、うん。そういえば聞いたことなかったなつて」

聞けば、少し恥ずかしいのですが、と前置きをして。

赤くした頬を指で触れながら、少女はその願いを告げる。

「実は、もうちよつとだけでいいので身長が欲しいなって」

他の人の壮大な願い、これからの人生に関わるような願いに比べればあまりにもちつぽけな願い。

それを聞いて頷いた憐の思考は、一つの結論にたどり着いた。

「なるほど、それなら結婚できるな」

「え」

身長が欲しい。

でも、霊体のままでは全盛期のまま姿が変わることはない。

ならば、身長を伸ばすには受肉する必要がある。

受肉してしまえば結婚することも可能である。

そういう考え方。

「そ、その前にまずはマナカに言われたことを済ませてしましましょう！」

「頼んだ」

マスターの命に従い、キャスターが大聖杯に触れる。

やることは簡単。大聖杯に必要な魔力が溜まり次第、先行入力された願いを叶えるよ

うにすること。

そして、それが終わった後、余った魔力で自ら大爆発を起こすように。

今の憐は、魔術協会からのスパイでもある。

そして、その目的は“赤”の陣営の勝利ではなく、正確にはユグドミレニアへの誅罰を与える魔術協会への支援。

要するに、聖杯戦争で勝利することが目的ではなく、ユグドミレニアが滅べばそれでいいのだ。

自分たちの願いを勝手に叶えるように細工をしておいて、願いが叶い次第離脱。

大聖杯が失われたことにより、ユグドミレニアは魔力供給用のホムンクルスを一瞬で干上がらせサーヴァントを維持できず、純粋な魔術戦に移行する。

そうなれば、確実にユグドミレニアは滅ぶ。ユグドミレニアとは衰退した、あるいは未熟な、未来のない魔術師一族が集まってできた黄金樹なのだから。

時計塔としては大聖杯が欲しいのだろうが、そのあたりは何も言われてないから気にしないでいい。

言わなかった方が悪いのだ。

受肉済みとはいえサーヴァントという切り札もある以上、魔術師は手を出すことができずに彼らは平穩に過ごせる。

彼らの仕込みは、つまりそれを達成するための準備なのだつた。

キヤストリアは知りたい

「あれが、ルーラーですか」

“赤”のアーチャーが聖杯戦争初の脱落者となった翌日のこと。

ミレニア城塞に訪れ、いくつかの会話を済ませ去つていく後姿を見て、キヤスターはつぶやいた。

そのサーヴァントには、サーヴァントらしさがない。というよりも、サーヴァント特有の霊格を抑え込んでいるように見える。

疑問が顔に出ていたのか、憐は愛歌から聞いている事実を部屋へと戻る最中、歩きながら口にする。

「ああ、現代人レティシアの体に憑依している特異なルーラー、ジャンヌ・ダルク。霊体化できない、食事も、睡眠も、普通の人間が必要とする行為を全て必要とするらしいサーヴァントだよ」

「なんとなく、私に似ていました」

「狂った状態のジル・ド・レエとはいえ、見間違える程度には要素が似てるんだろ」
瓜二つ、ドッペルゲンガー、そういうレベルには達していない。

有名人のそっくりさん、という程度の似通った顔立ち。

精神異常をスキルとして患った状態とはいえ、誰よりもジャンヌ・ダルクを知るジル・ド・レエが見間違えるのだから、まあ当然ではあるな、と憐は納得する。

「……実は、あつちに見惚れたりしてませんか？」

「なんで？」

「いえ、ほら。私も出会った直後に求婚されましたから。似たような顔のあの人を見たらやっぱり求婚するのかなあって」

「んー」

少しだけ考え込む様子を見せる憐。

「なんだかどきどきするなあ、とその様子を見るキャストラー。」

憐と愛歌と色々と暗躍する日々は、普段しないような、そして現代だからこそできるような刺激に満ちた日々だったから。

彼の関心が他に向いたら、ああいう日々は終わりを告げるのだろうか、なんて。

そんなことを考えている間に、憐は考えがまとまったのか一つ頷いて。

「いや、あれはねえわ」

「ええ……」

見るからに「苦手です」といった雰囲気漂わせ、ルーラーはダメだと首を横に振つ

た。

そのあまりの嫌悪に、邂逅時間は一時間もなかったというのに、何がダメなのかと逆に気になってくる。

「いや、何がダメってほら、あいつ村娘のはずなのに覚悟ガンギマリなのが目に見えてるっていうか……」

どう見てもあれは「導く側」、英雄として周囲を鼓舞するあり方の女だと否定する。

「別にそういうのがダメって言うつもりはないんだけど、それだとルーラーが何かしたら周囲が「ほら来た今だ担ぎ上げろ」って感じになりそうであ。魔術師的には目立つのはアウトだし、俺個人としても一緒に平穩に暮らせる相手がいいし」

「あー」

ジャンヌ・ダルク、と言う英霊についてはサーヴァントになった時点でキャスターも知っている。

百年戦争にて現れ、フランスの快進撃の立役者となった少女だ。

ただの村娘だった彼女がそうなれたのは、神の声という名前の扇動スキルが高かったということなのだろう。

そんなのと一緒にいれば、確かに毎日が刺激的になりそうだ。

「っていうか、それを除いても俺からすればあいつは敵」

「聖杯戦争の裁定者^{ルーラー}なのに、ですか?」

「いくらありえない存在だからって、キャスターをあんな目で見た時点で俺の敵だよ」

真名すら看破することが許されているルーラーゆえに、誰に言われるまでもなく理解したキャスターの特殊性。

本来ならば存在しないはずの英霊を呼び出した、その事実が彼女の中でキャスター陣営を要注意人物とした理由。

理屈はわかるが、感情は納得していない。

部屋に戻れば、気が抜けたのかキャスターから欠伸が出る。

「眠たいなら寝ても問題ないぞ?」

「は……」

前回に比べても、なお激しい魔力消費。

隣の方は魔力のこもった宝石を食べることで無理矢理な回復を行なったが、キャスターの方は大聖杯への細工を含め未だ休憩を取れていない。

聖杯大戦が動くのは夜である、という原則を考えれば、朝になった今休んでも問題ない、と告げた己のマスターにくしくしと目をこすりながら少女は頷く。

そのままふらふらとベッドの方に歩いて行って――

「あ、ちよつと待ってそつち違う俺のベッドキャスターの部屋はもう一つ別にもらつて

るでしょそつちで寝られたら俺がちよつとまずいことに——！」

そのままぼすん、と憐のベッドの上に寝転がる。

焦りが混じった憐の声など聞こえていないというように、寝息が聞こえてきたのはそのすぐ後のこと。

「……」の場合、俺がキャスターのベッドで寝ればいいのか？ 嫌だなあ……絶対なんか言われそう。キャスターは言わなそうだけど、愛歌とか、絶対煽ってくるぞあいつ……」

そんなぼやきも、眠りについたキャスターの耳には届かない。

サーヴァントには三大欲求なんてないけれど、それでも元は人間なのだ。

疲れれば眠りたい、と思うこともあるだろうし、食事を楽しむという概念も存在する。特に、王様でもなんでもないキャスターには、こういう戦争は荷が重たいのだろう。そうでなくとも、幸せそうな顔で眠っている少女を起こす気にはなれなかった。

「さて、どんな夢を見ているのやら」

とは言っても決まっているか、と苦笑する。

サーヴァントは元来眠ることが必須ではないせいとか、それとも何某かの理由があるせいか、夢を見ることがない、と何処かで聞いたことがある。

ならば、見る夢なんて一つだけ。

マスターは、契約の経路パスを通じてサーヴァントの過去を見ることがあるという。ならば、逆にサーヴァントにマスターの過去が流れ込むことだつてあつてもおかしくはないだろう。

「うわあ……」

そう考えると、憐はとてつもなく恥ずかしくなってきた。

え、これまさか俺が一目惚れした瞬間とか見られちゃうわけ、と。

ここで起こせば、そういう事態にはならないだろう。

それはわかっているけれど。

「これを起こすのは無理だなあ……」

さすがに、そんなことのためにキャスターの眠りを妨げるのは無理だな、と諦める。

できることなら、初恋の瞬間だけは見て欲しくない、とそう思いながら眠るキャスターの頭を撫でるのだった。

そんなことを願われているとはつゆ知らず、キャスターの見る夢は彼の想定通り、マスターの過去であつた。

見ている過去そのものは面白いところなど何も無い。どこにでもある、普通の魔術師

の半生。

『あなた、よく、そう、育ってくれたわね』

沙条愛歌が現れるまでは。

魔術師である両親に魔術師として愛された。

キャスターから見ても、良い両親だと思う。

魔術師とは基本本人でなしだが、憐の両親はまあ普通の両親だった。

普通の範疇で、そして魔術師でもあった。

彼が魔術の道から逃げることを許しはせず。かと言って、非人道的と呼ばれる実験をすることもなかった。

魔術師としての感性が強く、普通の幸せというものを理解できていなかったが、それでも、幸せを感じるのは辛さに身を投げ出すよりもいいことだろうと決して否定することはなかった。

そして、彼に家の秘奥を授ける前日、三割ほどの魔術刻印を継がせたところで、彼らは死んだ。

原因がなんだったのかはわかっていない。

わかっているのは、両親から教えられたこと、あの当時、近場で亜種聖杯戦争が行われていたということだけ。

亜種聖杯戦争に参加したから殺されたのか、亜種聖杯戦争の参加者と間違われて殺されたのか。

あるいは、全く関係ないところで死んだのか。

真実が何もわからない状況で、わかりやすく憎悪を向けられる亜種聖杯戦争へと憎悪を向けようとした。

そんな折に現れたのが、沙条愛歌だった。

『あなたに、生きる意味を与えてあげる』

そう告げた少女は、いずれ出会う運命を少年に授けた。

その日、少年は運命に出会わされた。

いずれ出会う、これ以上なく心を奪われることになる聖杯戦争でしか出会えぬサーヴァントと。

沙条愛歌が、彼にその未来の可能性を与えてしまった。

『私に付いて来なさい。あなたが彼女を召喚することは、私にとっても都合がいいもの』

少女が見せた未来図に、少年は心奪われる。

亜種聖杯戦争への憎悪は、すでに消えてしまっていた。

両親を殺したと思しき聖杯戦争への恨みはあつたが、復讐の憎悪に身を焦がすよりも幸せに対して手を伸ばした。

そこからは、まさしく激動の時間だった。

認識をずらした沙条愛歌によって、彼女の弟子として憐は時計塔に潜り込むことになる。

生前の父から学ぶことができなかった魔術を学ぶ彼を取り巻く周囲の認識を徐々に狂わせていく。

気がつけば、時計塔全体が畏怖する魔術師、沙条愛歌がとった弟子という称号が逆転していた。

沙条愛歌という時計塔史上最大の魔術師をどこからともなく引き抜いて来たどこぞの生徒、という形に。

それが“師匠が弟子についていく”ではなく“弟子が師匠についていく”という形の方が楽だったから、過去改竄をしたのだ、と沙条愛歌から聞いた瞬間には、キャスターにも畏怖が走った。

現代魔術科にいたのは、そう大した理由ではない。

ただ、そこが一番既存の魔術師らしくなく、彼の思考に影響を与えてくれたから。

彼の半生で、一番幸せそうな時間だ、とキャスターは思う。

その幸せそうな時間も、結局はキャスターに会うための準備期間だったのだが。

——なんというか。

自分の想定以上に思われていることに、驚きと嬉しさが少女の心を満たす。

聖杯大戦の後には、ちよつと挨拶にもいかないといけないかな、と。

一目惚れされた、顔だけを見て告白された、と思っていたが、それは正解であり、間違っていたようだ、と。

一目惚れ、というのは間違いではないが。

出会う前、知った時点で好かれていたとは、まるで思わなかった。

ちよつとだけ、憐の家族に申し訳なく思いましたが、そういうのは全てが終わった後でも問題はないな、と一つ頷く。

夢の中なので、実際には頷けないが。

自分に対する熱量を理解して、キャスターは納得を得られた。

なんとというか、これまで何度もプロポーズされていたが、嬉しくはあったが正直不思議でもあったのだ。

どうしてこんなに好かれているんだろう、と。

ただ、これで納得はいった。

(まあ)

もう片方、沙条愛歌の姉になろうとする感性はよくわかっていないのだが。

理屈そのものは説明されたが、理解できるようなものではなかったのでその言葉通り

に飲み込んでいる。

(これなら、私もちゃんと答えを返せるでしょうか?)

そんな、ふとした疑問とともに、少女の意識は現実へと戻っていく。

目を覚ませば、そこには少女が今さつき過去を垣間見た己のマスターの姿。

自分を見ながら慌てている姿がどこかおかしくて、くすくすと笑った、気がする。

「ん、起きたかキヤスター」

「はい、起きました」

声が、少女の意識を完全に夢の海から引き上げた。

目を覚ませば、そこには意識が途切れる直前と同じくマスターの姿がそこにある。

「あれ、マナカは?」

「ライダーとセレニケが一緒に出かけてる。ライダーからしても、ちよつと見る目が怖いけど、セレニケが変なことをしないで、まともな少女らしく過ごせるならそれが一番さ、って」

「それなら、私も誘ってくれればよかったのに……」

「寝てるキヤスターを起こすのも、っていうのと、“赤”のセイバーがモードレッドだつてことがわかったからな。アーサー王は隠しておきたいんだろう」

「ああ、そういう……」

ユグドミレニアが愛歌と憐の関係をどう捉えているのかはわからないが、そこらへんは愛歌がどうにかしているのだろう。

今の今まで一度も尋ねられたことはない。

ユグドミレニアを裏切れないように人質として作用させるつもりなのか、考えはわからないが、まあどんな考えであろうと彼女なら平然と踏みつぶすという信頼もある。

そもそも、憐には彼女をどうにかできる力はない。

その上で、自由にミレニア城塞で過ごす愛歌は、一番仲の良いセレニケと時折出かけているらしい。

二人ともマスターなので、ライダーを護衛として連れていく形ではあるが。

ライダー個人としても、自分にマスターが変なことをせず、さらには友人とお出かけを楽しめるというのなら、それは喜ばしいことなのだろう。

“黒”の陣営六騎と、“赤”のバーサーカーが一騎。

現在の戦力のうち、要石であるマスターが二人外に出ている。

ライダーが護衛としてあるとはいえ、魔術師同士の暗黙の了解を絶対視しすぎではないか、と言われるような行動。

そこに、カウレスがさらなる言葉を持ち込んできた。

「今から、俺とバーサーカーは出かけてくる。なんか“黒”のアサシンが連続殺人鬼と

して名前を馳せてるらしい」

愛歌ちゃんは尋ねたい

カウレス曰く、まず最初に“それ”に気がついたのは、自分の姉だったとのこと。

聖杯戦争は原則、人の目についてはいけな。神秘の漏洩は魔術師にとつて最も許されざる罪。

だから誰もが、すでに起こった戦闘から読み取れる要素を、過去の文献から探る。

聖杯戦争の最中に事件に気を配る、というのはあくまで“昨日、どこそこで戦闘が行われた”、そういった情報を探り当てる程度にしか役に立たない。

そういう意味では新聞は注視されるほどのものではなかった。

だが、一つだけ。新聞が役に立つ場合が存在する。

相手が神秘の秘匿という大原則を知らない、あるいは知っていて無視している場合だ。

最初にフィオレが気がつけたのは、つまりそういう理由。

遠い過去の文献ではなく、ここ数日の情報を取り扱う新聞を読む癖が彼女にはあったから、最近発生しているその案件に気がつくことができた。

新聞の一面を飾っている内容は、ルーマニア全土で発生している殺人事件について。

場所は首都ブカレストに始まり、今現在では北上したのかシギシヨアラにまで到達している。

特に、“黒”の陣営を目を引いたのは、その全ての犯行で心臓が抜き取られていること。

それを指して、ジャック・ザ・リツパーの再来などと噂されているらしい。彼らだけは知っている。

“黒”の陣営、その最後の一騎。未だミレニア城塞に合流していない“黒”のアサシンの真名がジャック・ザ・リツパーであることを。

「つまりこれは、魂喰いつてことか？」

「だろうよ。姉さんもそう思ったはずだ。そうじゃなきゃ、行く意味がないからな。……まあ、姉さんの場合はそれだけでもなさそうだけど」

サーヴァントというのは、魔力喰らいだ。

現実に肉を持たず、魔力で肉体を編まれただけの彼らは、ただそこにあるだけでも魔力を消費し、あらゆる行動で備蓄した魔力を消費する。

ただ、その魔力が消費されるような事態にはそう簡単には至らない。

単純な話として、マスターという魔力源があるから、最後の手段である備蓄魔力にまで手を出す必要性がないのだ。

では、マスターがサーヴァントをともに戦わせてやれない場合はどうなのか。

その場合もやはり、マスター以外の魔力源を見つければいい。

それこそが、魂喰いと呼ばれる行為。

心臓という、人間の生命の源であれば、それが魔術師ではなくとも多少の魔力補給にはなる。

「そのことはわかった。でもなんでわざわざそれを俺に言いに来た？」

“赤”のセイバーがモードレッドであるという通達がなされた時点で、ミレニア城塞の中に蔓延する空気は“キャスターを外に出してはいけない”という事で一致している。

当然そのことはユグドミレニアのマスターであるカウレスも理解しているものだと思われるのだが。

「簡単な話だ。お前の弟子、セレニケと一緒にいるんだろ？ だったら、携帯……は魔術師らしくないからいいけど、何かの通信手段ぐらいあるんじゃないか？ 気をつけろ、つて一報ぐらいは入れられると思ったんだけど」

「弟子……ああ、愛歌のことか。わかった、すぐにでも連絡を入れとくよ」

昨晚、シギシヨアラで事件が起きたということは、今もシギシヨアラにいる、ということとイコールではない。

ジャック・ザ・リッパースターのステータスがわからない以上、あるいは一晩走り続けてすでにトウリフアスにまで来ている、という可能性がゼロとは誰にも言えない。

「でも、アーチャーがいるなら、フィオレを気にする必要はないんじゃないか？」

「……いや、今回の事件の被害者は魔術協会の魔術師らしい」

「ああ、乱戦の可能性」

「そういうことだ」

ユグドミレニアのスパイは、当然魔術協会に潜んでいる。

そこから触媒の流れを探り、敵のサーヴァントの真名を探り当て、あるいは魔術協会側の動きに先んじて準備をすることを目的としているのだが、今回そのスパイが送って来た情報は、現在魔術協会側からルーマニアに密かに送り込まれた魔術師が殺されたという事。

それに伴い、ユグドミレニアは異常な情報収集能力を持つとしてスパイがいるのではないかと疑われているらしい。

が、ここで重要なのは魔術協会側の魔術師がやられたということ。

普通に考えるならば、魔術協会と敵対しているという状況。“黒”のアサシンは己が“黒”の陣営への帰属意識、魔術協会が擁する“赤”と敵対している、と思ってもいいのだが。

ここで、こちら側に一報も入れないという事実がその考えの足を引く。

事ここに至るまで、“黒”のアサシンに関わる情報は一切なかった。

裏切った、と考えるのが普通のこと、でも単純に裏切り……“赤”の陣営についてというのならば、“赤”^{魔術協会}の陣営側の魔術師を殺す、というのは不自然。

つまり、アサシン陣営はどちらにも組していない、と考えるのが一番自然な結論。

その場合、“黒”のアサシンは“黒”と“赤”の両方が倒すべきだと思っっている相手ということになる。

神祕の漏洩に近い行為を行なっているのだから、最優先で。

ファイオレが気がついた以上、“赤”の陣営が気がついていない、と考えるのはあまりに愚鈍。

「じゃ、行ってくる。連絡は頼んだ」

「おっけー。セレニケはどうする？ そっちの援護に向かって欲しいっていうなら一緒に伝えとくけど」

「あー……そうだな、一応来てもらおうように言っておいてもらってもいいか？ 来てくれたなら撤退は楽になるだろうし」

「はいはい」

取り出すのは携帯。

あ、お前も電子機器使えるのね、というような顔のカウレスは放置して、愛歌に対する電話をかける。

『はいはい、何かしら』

「愛歌。なんか黒〳〵のアサシンが昨日シギシヨアラで発見されたんだと。こつちに來てる可能性もあるから、早めに戻って——って、はい……？」

なんだか、信じられないような言葉を聞いた、そんな顔をした。

「それで」

一体どういうことだ、とダーニツクは困惑する。

「どういうことも、愛歌が黒〳〵のアサシンをマスターごと拾って來たとしか……」

一言でまとめればそういうこと。

聞けば『母親から子供の育て方を聞ける機会ってそんなに多くないじゃない？』と。

“黒〳〵のアサシンが黒〳〵に協力することを条件に、これ以上魔術師を襲わなくても良いようにする、と。

そういう条件での契約は、つまるところ最初にダーニツクが想定していた形に落ち着いた、とも言える。

「マスターは一般人。なるほど、それならば魔力供給ができずに魔術師を襲ったことも理解できる」

ついでに言えば、それも結果として魔術協会側からのスパイを排除することに繋がっているのだ、ユグドミレニアとしては利益しかなかった。

聖杯戦争についての基本的な知識もないというのに、生き延びてここまでやって来たこと、“黒”の陣営に有利な働きを成したこと。

そう言った点は、まず間違いなく評価に値する内容。

魔術師ならば、評価するに値しない部分。だが、魔術が扱えない状態の自分が彼女ほドスマートに行動をすることができたのか、と問われれば疑問を呈する。それほどの動きをアサシンのマスター、六導玲霞は行った。

故に、彼女の視点というのは、どこかで役に立つ瞬間が来るかもしれない、ダーニツクにもそう思える。

現在は、アサシンとの契約を維持したまま、ホムンクルスからの魔力供給ラインを成立させるために魔力供給槽のある部屋に向かっているというアサシンのマスター。

昨晩の時点でシギシヨアラの魔術師を狩り尽くしたことで、トウリフアスにまで移動して来た彼女たちは、今夜にでも魂喰いを始めないといけない程度には残り魔力が少なくなっていた。

「フィオレたちが戻り次第、全員に通達せねばなるまいな」

最初の想定とは違う形で始まり、最初の想定よりも少し良い状況で決戦を迎えられる。

そのこと自体は喜ばしいが、確実な連携という点では外部の人間が二人、それも片方は魔術師ですらない存在がいるという状況の危うさ。

彼女に対する精神異常を防ぐ礼装を用意しなければ、と考えを張り巡らせるダーニツク。

現在、^ア“赤”の陣営で真名がわかっているのは^モ“赤”のセイバード

既に敗退しているので真名を知ることの意味がないのが^ア“赤”のアーチャー。

“赤”のランサーの真名はわからないが、^ジ“黒”のセイバードとすら渡り合える猛者であり、不死身の逸話を持つ英雄。

“赤”の^スバーサーカー^タに関しては、こちらのキャスターのマスターの弟子が現在手綱を握っている。

わからないのは、キャスターとアサシン。

この二騎は後方支援であり、むしろこちらのキャスターのように前線に出てアーチャーを串刺しにする方が異常なのだ。

だから、わからないというのは想定通り。

想定通りではあるのだが、だからこそそれが怖い。

ミレニア城塞は、彼の知る限り最高峰の工房だ。

キャスターの力添えもあって、もはや神殿クラスといってもいいかもしれない。

大聖杯が手元にある以上、こちらは打って出る必要性はなく、向こうは最終的に大聖杯を手に入れるためにはミレニア城塞を攻め落とさなければならぬ。

ミレニア城塞は、半世紀の準備とキャスターの数ヶ月分の工房としての強化がある。

城塞には数多の強力な魔術、結界が施され、サーヴァントであろうとそう易々とは攻めできないだろう。そう信じている。

だが、だからこそ安心などできないのだ。

セイバー、ランサー、ライダーの三騎は各々のクラスで最上位に名を残すレベルの存在。

もう、ここまで来ては認めるしかあるまい。魔術協会は、こちらの六十年を上回る触媒を用意している、と。

こうなるのであれば、触媒を自分で集めさせるのではなく、ダーニツク自身が集めればよかった、などと思ってももはや後の祭り。

相手のキャスター、アサシンも最上位の存在である、と仮定して考えた方が気が楽だ。

最上位のキャスター、最上位のアサシン。

それがどういふものなのか、ダーニツクには想像がつかない。

ダーニツク自身、今の時計塔では最上位たる『冠位』^{グラント}を頂戴しているが、神代の魔術師には遠く及ばず。神代においてなお『冠位』と称されるほどの存在がいたというのならば、それは一体どれほどの存在なのか。

こちらの魔術工房をたやすく粉碎できたとしても、そうおかしくはあるまい。

暗殺者で言えば、どれだけの魔術工房だろうとまるでないもののように扱って平然と命を刈り取る。そんな可能性もある。

あるいは、大聖杯を奪い取るために、それをできるようにする準備を整えている、なんて可能性も。

聖杯戦争に勝利するための要素の悉くがこちらが上であるというのに、触媒一つで六十年分の研鑽を無味にされてしまったのはただの阿呆である。

確かに潰したはずの、これから先のユグドミレニアの繁栄を邪魔する障害が、今また姿を見せて来たような錯覚をダーニツクは覚えてしまった。

『ダーニツク、それにランサーも』

その瞬間、届いたのは三つの情報。

一つは、“黒”のアサシンの魔力供給ラインが正式につながった、ということ。

“赤”が更なる侵攻を進めるよりも先に成り立ったことで、次の戦闘からはアサシンも戦闘に加えることができる、ということへの安堵が生まれる。

二つ目は、フィオレ、カウレスのフォルヴェツジ姉弟が帰還した、ということ。

これで、“赤”が攻め込んで来たとしても、合計八騎のサーヴァントで対応することができる、という第二の安堵が生まれる。

そして最後に――

「は？」

“赤”の陣営が、一兩日中に攻め込んでくるだろうこと。

それだけならば別にいい。いつ攻め込んでくるにせよ、移動は必ず必要になるのだから。

だから、驚いたのは別の理由。

「空中を、拠点ごと移動している？」

その攻め込み方にあつた。

ヴラド公は演説したい

ユグドミレニアが費やした六十年という時間は、ただの道楽ではなかった。

大聖杯を用いた一族の名譽を取り戻す事業。それは、未来の子々孫々に向けて残せる唯一にして至高の榮譽であり、だからこそ入念な準備を、半世紀以上もかけて行ってきた。

そんな彼らの予想を超えた相手は、その来歴を聞けば納得するしかない存在。

ダーニツクと同じく第三次聖杯戦争が終わり次第、ずっと大聖杯を求め続けてきた相手。受肉した英霊である、という事実には驚けど、同じ年月をかけてきたのだから、対抗できるのはおかしくないだろう、と。

個人で組ユグドミレニア織を出し抜いたならばともかく、魔術協会の援護も重なった状態ならば。

第三次聖杯戦争当時の能力スキルと聖杯より与えられた知識を以ってすれば、聖杯より与えられた深い英霊への造詣も合わさって、彼らの予想を出し抜くことだって、不可能なことではなかった。

その象徴たる空中庭園が今、ミレニア城塞へ向けて進撃している。

サーヴァントである以上、飛行してくる可能性は考慮していたのだが。

「こつちの世界の私は、ああいう空飛ぶお城って持つてなかったんですか？」

「伝説にはちよつとないかなあ」

「でも、もしかしたらあるかもしれないわね。伝説に出てくる馬が宝剣になるところを見るに」

城が空を飛び、超上空からピクト人を磨り潰す、そういうキャメロットの城があつてもおかしくはない。

とはいえ、そんなことを考えても仕方がない。この場がないのだから、たとえキャメロットが空を飛ぼうと、関係がないのだ。

城……拠点^①が空を飛ぶ、というのは非常に便利なこと。

まず、大人数を一気に収容できるのだから、全ての兵力を同時投入できる。

そして、拠点の防衛兵器を、全て攻撃に転用できる。

しかも、今回に至つてはその防衛兵器すら“赤”のアサシン……セミラミスの宝具の一部。

神代の魔術師の作った、『ハンギングガーデンズ・オブ・バビロン虚栄の空中庭園』の一部は、決して生半なものではない

だろう。

「では、行きましようかマスター」

「ああ、これが最終決戦、だな」

そも、聖杯大戦とは聖杯戦争の中でも一際特異なものである。

本来、全てが敵のバトルロワイアル。そのはずが、“同盟”ではなく“仲間”と呼べる陣営が生まれ、二つに分かれて争う。

この戦いでは、本来存在しない仲間がいる。それはすなわち、一対一で敵を潰すのではなく、仲間との連携を前提とした作戦が求められていることと同義。

小競り合いというものが意味をなさない戦いなのだ、この聖杯大戦は。

ミレニア城塞という拠点、大聖杯という報酬がユグドミレニアにある以上、ユグドミレニアに“赤”の陣営へと攻め込む理由はなく、逆に“赤”は大聖杯を奪取しなければ勝利にはならない以上、攻め込むしかない。

“黒”は、全てのサーヴァントが揃った状態で敵を迎えることができるのだから、攻め込んで来たサーヴァントは全員で迎え撃ち、一体ずつ確実に撃破することができる。“赤”のバーサーカーがそうであったように。

“赤”の陣営は、戦いという次元に立ち、サーヴァントを撃破しようと思うのならば総攻撃しかないのだ。

それならば、まだ一騎打ちという形にできたのだから。

だが、もう遅い。“赤”はアーチャーを失い、バーサーカーを奪われた。

現状はすでに八対五。バーサーカーを使い捨ての爆弾にするにしても、二騎の手が空

く。

「今回、多分キャスターは前線に出ることはないと思う」

「はい、それはわかっています」

キャスターは、倒れてはいけない立場。

それは、“赤”のライダーを倒し得る力を持つという点と、“希望のカリスマ”と呼ばれるスキル。

ホムンクルスたちを強化し敵の雑兵……竜牙兵と戦わせなければならぬ。

それが崩れれば、竜牙兵はミレニア城塞にたどり着き、あるいはマスターを撃破する危険性がある。

神代の魔術師が用意した、というのはそういうことだ。

そして、“赤”の陣営のセイバーは、彼女を殺し得る中でも最悪の部類。

アーサー王特攻なんて持っているのだから、表に出すことはできないだろう。

そういう意味では、サーヴァントの中では一番安全な立ち位置。

「でも、“もしも”があるかもしれないから気をつけてくれ」

だが、それも絶対ではない。

対城宝具があれば、ミレニア城塞など普通に吹き飛ばさぶだろう。

その上で打ち込めば、キャスターのところまで届くのは道理。

そんな会話をしている間に、二人は城壁にまでたどり着く。

そこにはすでに全てのサーヴァントが、そして一部マスターも集まっていた。

「遅くなりましたか?」

「いいや、未だ戦端は開かれていない以上、遅いも早いもあるまい」

いつ開かれてもおかしくはないが、今はまだ戦端は開かれていない。

“黒”はホムンクルスを編隊し待ち受け、“赤”は空中庭園の周囲に竜牙兵を配置する。

雑兵同士、聖杯大戦の行く末には関われない立場なれど、マスターを殺すだけの戦力としてみれば十分。

下手に放置することなどできはしない。

「我が領土にあのような醜悪な代物で乗り込んで来た挙句、あのような汚らわしい骸骨兵を撒き散らすとはな」

ランサーの言葉は、彼の抱く感情を如実に表している。

すなわち、不快感。

その不快の原因を滅ぼしたい、そう思うのは当然ではあるが、同時に体に満ちるのはそんな感情的なものだけではない。

充ち満ちるのは、この土地、ルーマニアの領王としての義務感。

サーヴァントとしての責務とは別に、“ヴラド三世”という英霊の根底。

生涯を侵略者と戦い抜き、万に一つも勝ち目がない戦いで勝利したことによって、彼は英霊となった。

今更、新たな侵略者が現れたとて、彼が膝を屈する理由はない。

「あら、それなら王様。これも使ってみないかしら。こちらが用意したんだから、これも立派な戦力になるんじゃない？」

「ほう……まさかこのようなものまで用意できるとはな」

「所詮はただの魔力の塊だもの。魔力供給ラインからホムンクルスの魔力を頂戴してしまえば、作るのもそう難しいことじゃないわ」

「では、各マスターに配って置いてもらおうか」

沙条愛歌が取り出したのは、白く細い腕。それを見た途端、集ったマスターもサーヴァントも、皆等しく驚愕する。

正確にはそこに幾重にも刻まれた聖痕。令呪と呼ばれる代物を見た瞬間に。

普通の魔術師では構造を解析することすら難しく、解析できたとしても膨大な魔力の塊であるそれを作るなどできないが。

彼女であれば解析することは不可能ではなく、ユグドミレニアには魔力供給ラインである大量のホムンクルスが存在する。

ならば、ホムンクルスを使い潰しさえすれば、作ることは不可能ではない。新しく作られたのは合計八画、一人につき一画分。

だが、令呪の現物そのものよりも、令呪を作れてしまふ、ということの方が事実としては大きい。

ユグドミレニアが令呪の使用をためらう理由がなくなってしまうのだから。

言葉を受けて、その場にいたマスター達が令呪を転写される。

ここここに至って、彼らの出る幕はない。もらった人物から一人、また一人と城塞の中へと戻っていく。

いない人物に関しても渡しておくように、と言ったランサーは、周囲のサーヴァント達へと視線を向ける。

「ライダー、ホムンクルスの指揮はお前とアーチャーに任せる。シャルルマーニュ十二勇士としての力を見せてみよ」

「らじやー!」

「了解しました。〃赤〃のライダーが発見された場合は?」

「その場合は、お前とキャスターに相手を任せる。キャスターは、基本的には後方から魔術による援護を。〃赤〃のライダー、並びに〃赤〃のセイバーの動きを特に注視し、〃赤〃のセイバーと出会うような事態だけは何かあるかと避けたまえ。最悪、姿を一時的

に消す、という意味では城塞を使っても良い」

キヤスターは、“赤”のライダーを撃破できる貴重な存在。

故に、使い潰すようなことはできない。それはアーチャーも同じことだが、英雄の教師として近接技能も複数熟練の域に達するアーチャーとは違い、魔術師の道を選んだキヤスターに近接戦を期待する方が間違っている。

特に、今回に関してはアーサー王を殺した逸話を持つモードレッドが敵対しているのだ。心配しすぎて損はない。

「敵の宝具と思しきあの要塞からの攻撃への対処もお前に一任する」

「ええ、任せましょう。何があろうとマスターは守り抜きます」

そして、何よりの大役。

あの空中庭園にどのような仕掛けがあるのかはわからないが、かといってそれを放置することはできない。

守るための要塞であるミレニア城塞とは違い、あれは攻め込むための要塞だ。

マスター狙いの攻撃が来た場合、それを防ぐ人員がいる。

「セイバー、お前の相手は“赤”のランサーで良いな？」

未だ、マスターからの命により言葉を発することのないセイバーは、されど領きで返答する。

その領きに隠しきれない感謝と熱量がこもっていることには、誰も触れない。自らを傷つけ得る戦士との再戦。今の彼に、これ以上の願望はない。

「バーサーカー。お前は存分に目についた敵を屠れ。狂戦士バーサーカーの名に相応しく、本能のままに果てるまで、な」

呻きのような声とともに、バーサーカーが首肯する。

狂化のランクがそこまで高くはないバーサーカーは、僅かに残った理性で頷く。

領いたが、戦いになれば理性を失うのでこの命令に意味はなく、何よりもこの命令は狂気に身を浸したサーヴァントが必ず行うこと。

わざわざ、命令するまでのことではない。

それでも、命令をしたのは『いちいち考える必要はない』と明言し、余計な雑念を取り除くため。

「アサシン」

「はい」

「お前は遊撃だ。大事な母を害そうとする雑兵は、お前の手で駆逐してやれ」

「うん、いいよ。わかりやすいし。でも、おじさんはどうするの?」

「無論、先陣を切り、相手が有する“最優”を砕く。こちらの陣営の動きをスムーズにするためにもな」

総員に対する命令が下された。

今、この聖杯大戦においてサーヴァントとは兵士である。

“黒”のランサーという王の元に集った兵士たち。

ならば、戦端を開くのは王の言葉でなければならぬだろう。

「さて、諸君」

生前も将であつた彼は、当然そのことを知っている。

故に、その言葉は“王”として周囲へ届ける声と共に放たれた。

「こちらはフルメンバー。不安要素であつたアサシンはミレニア城塞に戻り、さらには“赤”のバーサーカーを手にするこゝもできた」

それは、戦力差を正しく認識しているという証明。

「一方、向こうはすでにバーサーカーだけではなくアーチャーも失っている。こちらが八、向こうは五。サーヴァントの数だけで見れば差はあるように思える。だが、向こうのランサーはこちらのセイバーと互角に戦い、ライダーに至つてはアーチャーとキャスターがいなければ傷をつけることも能わなかつた」

この二騎だけを見てもそうなのだ。

さらにはあんな要塞を保有し、攻め込むことができるサーヴァントもいる。

まだ姿を見せないキャスター、あるいはアサシンも何れ劣らぬ英雄であろう。

量より質。

こちらがどれだけサーヴァントを有していようと、向こうがこちらの一切合切を消滅させるほどのサーヴァントを保有するならば意味はない。

そしてその上で、相手は“黒”よりも人数が少ない。逆境とも呼べる状況。

英雄が、その伝説の中でいくつも覆ってきた状況なのだ。

敵が英雄だとわかっていくからこそその恐怖、というものがあってもおかしくはない。

「では、諸君に聞こう。これを聞き、怖気付いた者はいるかね」

答えはわかりきっている。聞くまでもないこと。

当然、誰もが否定する。

ランサーにも、それはわかりきっていた。

「それでこそ英雄だ」

鷹揚に頷く。

「皆の英雄譚は、私にはわからん。だが、一つ確かなのはこの場に集つたのはその全てが一騎当千にして、万難を乗り越えてきた英雄である、という事実」

一人で逆境を覆すからの英雄。

それが七騎。ならば、目に見えてわかりやすくこちらが有利であろうとも、目に見えないところでこちらが不利になっていたとしても。

「こちらの勝利以外はありえぬ！」

英雄たちを鼓舞する姿こそは、かつてこの国を守り抜いた護国の鬼将。

この国を、領土を守護する上ではこれ以上ない人材だ。

もとより負けるつもりなどなかった英霊たちが、さらなる覇気を纏い始める。

「あれは蛮族だ」

敵もまた、英雄であるというのに、彼はその言葉一つで切つて捨てる。

「他人の土地^もを奪い去り、まるでそれが当然であるかのように振る舞う、下劣なだけの存在だ。己らが何に手を出したのかすら理解できない愚昧な輩は、牛革の鞭で徹底的に叩き、躰け直さねばならぬ」

彼にとってはオスマントルコも、“赤”の陣営も、等しくただの敵対者。

今、この一戦は何よりも彼の真価が発揮される戦いだつた。

ジークフリートは戦いたい

「では、先陣を切らせてもらおう」

告げたランサーは手綱を握ると、馬と共に城壁から飛び降りる。

『騎乗』スキルを持たないヴラド三世ではあるが、生前貴族であり将でもあった頃に得した技術を用い、馬への負担も最低限に着地を成功させた。

与えられた馬は巨額の——ただし、一般人目線であり、ユグドミレニア目線で見れば端金——費用をかけて育てられた唯一無二の魔術馬。

合成魔獣キメラに等しい存在であり、そこにキヤスターの魔術が加わったことで幻想種の末端に足を踏み入れるほどの性能が与えられている。

知能ある馬がランサーの意を汲み取り、ゆつくりと草原を進む。

いつ戦端が開かれてもおかしくないような状況。

であるにも関わらず、戦場とはまるで思えぬような静けさは、両陣営共に率いる軍勢が戦意を燃やす“人間”ではないからか。

馬が歩く中、続々と“黒”の総軍がランサーの背後に現れる。

アサシンは、背後に構成される軍勢の中枢で“気配遮断”、“情報抹消”のスキルを

用い、敵の思考から自らの全てを消し去りながら戦場から姿を隠す。

ランサーに付き従うライダーと彼らが率いるホムンクルスからは少し離れたところ。バーサーカーは彼らの東側、かつ少し距離をとった場所に展開し、セイバーは西側。

アーチャーはすでに姿を森の中へと隠し、いつ空中庭園から敵が姿を現そうと、あるいは空中庭園を囲にすでに戦場に足を踏み入れたサーヴァントが居たとしても逃すことはない。

キャスターはランサー達の出陣と共にミレニア城塞^{己の工房}へとすでに入り込んでいた。けれど、戦場に放たれた使い魔達はキャスターの目となって戦場の推移を見届けるため、援護に対しての不安を「黒」が覚えることはない。

「赤」のバーサーカーは、彼ら軍勢からは極端に離れている。屈強な肉体が拘束具をギチギチと鳴らしているその様は、拘束が外れた後の未来を即座に想起させるだろう。

「さて、どう動くつもりだ？」

ランサーの正面、広がる竜牙兵の軍中にはサーヴァントの気配はない。

あるのはただ、魔術の気配のみ。

魔術で隠してある、そう言われれば納得するほかないが、竜牙兵ごと吹き飛ばす選択肢を「黒」が取れば意味はないだろう。

ならば、正面には将はおらずただ有象無象があるだけで、サーヴァントは上空の空中

庭園にあると考えるのが相応しい。

視線は、自然と空中庭園に向けられる。

その直後、ルーマニア全土の魔術師が、どれだけ離れようと感じ取れる、濃厚な“魔”の気配にトウリファスの方向を振り向いた。

「どうするか、など決まっているだろうか？」

セミラミスの言葉に従い、動き始める空中庭園。

周囲の機構、総勢十一存在する近寄る者を破壊する迎撃術式、『十と一の黒棺』^{ティアムトゥム・ウーム}が稼働する。

狙いは戦場。庭園の周囲を囲むよう配置された全長二十メートルを超える巨大な漆黒のプレートから発射されるのは、対軍級の魔術光弾。

全て合わされば『幻想大剣・天魔失墜』に匹敵すると思われる光弾が断続的に戦場に投下される。

魔術が生み出す光の雨は、サーヴァントであろうと決して油断できない絶死の一粒。

唯一の救いは、躲しきれないほどの密度と量ではないことか。あくまで宝具の本体は空中庭園の方であり、この雨はその機構の一部。空中庭園の全てを合わせてこそその宝具ランクであり、一つ一つは殺せるレベルではあっても英雄ならば超えられないことはない程度。

だが、サーヴァントの相手をしながらということになれば、格段に難易度が上がる。とはいえ、この雨も数分の後にはきつとその役目を終えるだろう。

サーヴァント同士の戦いの中、降り注ぐ光弾を避けることは難しいだろうが、それは相手側も同じこと。

一発一発は途方も無い破壊力を有していようと、あくまで放つのはセミラミス。

女帝であつて戦う者ではない彼女に、高速で目紛しく動く戦場の全てを把握することなど、望むべくもない。

一歩間違えれば味方を殺しかねない攻撃は、味方が戦場に出る上ではただの邪魔だ。

「ぬ」

そんな、雨の起点に対して極光の螺旋が到達する。

ほんのわずかに空中庭園が揺れ、セミラミスの集中が解ける。

一瞬、止まった光弾に、今か今かと出陣の時を待ち構えていたアキレウスが獰猛な笑みを浮かべた。

「さあ、開戦だ。赤のライダー、いざ先陣を切らせていただく！」

空中庭園から踊り出たライダーは落下に身を任せながらもぴゅう、と指笛を鳴らす。

呼び出したるは彼が騎乗兵のクラスに据えられた理由。少し前、ミレニア城塞からの撤退に呼び出された戦車が、此度は進撃のために舞い降りた。

天より戦場へと突き進むその威容はまさしく流星。

人智を尽くしてもなお、止める手段が見当たらない神代の突進は、だからこそ異常によつてのみ止めることができる。

——来る。

視界に走つた殺意の煌めき。

一条の点は、彼を傷つけ得る数少ない同胞の一撃。

手に持った槍を軽く回し、飛んできた矢を打ち払う。

一瞬だけ槍が隠した彼の瞳は、これ以上ない喜悦が浮かんでいる。

「来たか、黒」のアーチャー！」

音となり、ホムンクルスを轢殺するアキレウスを捉えることができる英霊などそうはいない。

それこそ、神の血を継ぎ、弓の名手として名を残す、弓兵アーチャーのクラスに至ることができない存在くらいだろう。

飛んで来たのは森の方から。これは誘いだと理解する。自分は、お前を倒し得る英霊は森の中にいるぞ、という誘い。

尻尾を巻いて逃げるか、という挑発。常識的に考えるならば、傷つけ得るのがアーチャーとキャスターのみである以上、それらの相手は他の面々に任せることが勝利を手

にする最適解。

だが。

「いいや、それは違うだろう」

それは、“英雄であること”を己に課したアキレウスがとつていい手段ではない。障害を粉碎し、好敵手を撃破し、その上で掴む勝利にこそ意味がある。

自らを殺せる存在から逃げ出すように背中を向けるなど、英雄には許されない。走る、走る。疾風のように。

戦車ですらまだ足りない。どの時代、どの地域の英霊よりも尚疾いアキレウスは、視界に映るその全てが射程圏内。

宝具の域にまで昇華された俊足が、戦車がたどり着くことすら待ちきれぬと駆け出した。

そんなアキレウスの頭上を駆け抜けるのは幻想種。

“黒”のライダー、アストルフオがライダーのクラスに据えられた理由。

ヒポグリフ、と伝承に名を残す馬が空を駆け、空中庭園へとまっすぐ進む。

影がわずかにアキレウスを覆ったことで、ほんのわずかに女帝を気にかけて、あの女なら問題ないかとその心配を切って捨て、アキレウスは走り抜ける。

彼が、この聖杯大戦における因縁を結実させるまで、あとわずかか。

「さあ、我が国土を踏み荒らす蛮族共よ」

懲罰の時である。

“黒”のランサーがそれを口にすれば、瞬間その言葉が真実となる。

なぜならここはルーマニア。これ以上ないほどに彼という英霊の真価が発揮される土地。

ヴラド三世という英霊が、なぜ槍兵ランサーのクラスに据えられることになったのか。

それは、今この場で起きている現象を見れば誰の目にも明らかだ。

「我が慈悲と憤怒は灼熱であり、杭となって貴様達を刺し貫く」

ヴラド三世は護国の英雄である。

オスマントルコの侵略から自らの領土を守り抜いた、その実績こそが彼が座に招かれた理由。

そこに武芸の如何は関係なく、また彼の伝説に武芸が含まれない以上“槍を以つて伝説を残した”という槍兵ランサーのクラスは相応しくないように思えるが。

これを見てそう思う輩は誰もいない。

「そして真実、この杭は無敵であると知るがいい！」

ランサーの体から迸る魔力。

秘されるべき宝具の真名は事ここに至って隠す必要など決して存在しない。

『カズイクル・ベイ極刑王』！』

わずかに揺れる大地。

ランサーの進むべき道を傲岸にも塞ぐ竜牙兵達は、何が起きたのかもわからないままに屍を晒す。

だが、何が起きたのかは端から見ればはつきりと。

彼らが、地上より現れた血よりも尚濃い紅の杭に突き刺された状況が目に見える。

それはまるで、彼の逸話における串刺し刑のように。

半径一キロ、最大同時展開数二万の杭。

それがヴラド三世の宝具『極刑王』。

使用者と同じ名を冠する杭は、歴史的事実の具現。

二万のオスマントルコ兵を串刺し刑にしたという事実が、彼の杭杭なのである。

即時展開可能という事実、二万という物量。

それは、彼の道を塞ぐ竜牙兵が消滅するまでのわずかな時間、宝具による串刺し刑を維持しながらも、こちらに攻め込むこの聖杯戦争におけるもう一人のランサーの攻撃を防ぐには十分だった。

「黒」のランサー、ヴラド三世とお見受けする」

「ほう。余の真名を知り、そう呼ぶ貴様は「赤」のランサーか」

「そうだ。故あってお前を討つ。悪く思うな」

相對したのは一瞬。杭の壁が砕けた瞬間、彼らは言の葉を交わし殺戮の舞踏へと身を投げ出す。

防壁として、殺意として、杭は「黒」のランサーを守る盾となり、「赤」のランサーの喉元へと喰らい付く吸血鬼の牙となる。

「いやいや、悪く思う必要はないさ」

まるで彼らの狼藉を許すかのような、度量の広い笑み……などでは断じてない。

笑みは本来攻撃的なものであることを、その表情を見て理解できない愚鈍がいるはずもないとすら思えるような激怒。

その証明に、「赤」のランサーへの殺意を乗せた杭が今も尚津波のように押し寄せ
る。

「お前達は余を殺さねばならない理由があり、余にはお前達を討たねばならない理由がある。で、あればこの相對は当然の帰結であろう」

それらを、全て「赤」のランサーは手に持った神槍で打ち砕く。

宝具というにはあまりにも脆い、杭の数々。

「ふむ」

それに、納得するランサー。

伝承にある、どこかふんわりとした表現ではなく、明確に二万を貫いたという事実が具現したゆえか、数は多く融通は利くが、強度はそれほどでもない。

「やはり、この杭が宝具か。しかし……この数は異常だな」

動く。赤のランサー、その視界一面に杭が広がっている。

止まれば、杭は即座に彼に食らいつくだろう。

「ならば、その異常な杭に飲まれてしまえばよからう」

「御免被る」

「そうであろうな。侵略者といえども英霊か。ならば、喜ぶが良い。本来ならば百度串刺し刑にしても尚足りぬが……此度の聖杯大戦。貴様には相応しき最期が待っているぞ」

ぴくり、と小さく眉根を動かした。赤の槍兵。

いったいどういふことか、など考える隙間は一秒にも満たず、杭は苛烈に攻め立てる。だが、その瞬きに等しい時間だけで十分だった。

わずかに生まれる感情の揺らぎ。まさか、という期待が薄く、小さく、けれどカルナという英霊を考えれば無限に等しいほどの巨大な感情がそこにはあった。

一瞬でも隙を見せれば喰い殺す。

その殺意を見せながらも、同時に杭はどこかへとカルナを誘導するように。

杭の樹木は道となり、壁となりながら、その男の元へとカルナを誘う。

真実無限と嘯かれたヴラド三世の槍が、けれど不自然に展開されていない場所。

そこには、今生における唯一の宿敵が彼のことを待っていた。

「なるほど」

考えるまでもない。

“赤”のランサーはここに誘い込まれたというだけのこと。

聖杯大戦の初戦、サーヴァント同士の戦いにおいて彼が戦った、彼と戦える戦士の元へと。

「最初からこうするつもりだったというわけか」

その戦士こそは“黒”のセイバー。

竜を殺し手に入れた不死身の肉体を盾に、竜を殺せし真エーテルの輝きを宿す聖剣を武器にする男。

「どうやら、今度はお前と心ゆくまで殺しあえるようだ」

返答は、剣を構えることで。

ランサーも、槍を構えることでその誘いへの返事とする。

お互いの合意がここにある。

セイバーはランサーと、ランサーはセイバーと、再び武芸をぶつけあい、勝利するこ
とを心の中で望んでいた。

その願いが果たされる。

それはきつと、この二人にとってはこれ以上なく幸せな瞬間だ。

請い願われたから応える、そういう性質を持った二人の男が、仮初めの生の中で、誰
に願われるでもなく自分で願った瞬間。

今、ここにその時が舞い降りている。

もう、誰の邪魔も入ることはない。

その事実への感謝が、二人の思考の中で同時に展開され、奇妙なことに同時に終わりを告げて。

どちらからともなく、磨いた武芸を解き放った。

モーさん、ガチギレるの巻

「マスター、どうしまししょうか？」

「どうするもこうするも、まずは“赤”を倒さないとダメじゃないか？」

現在、“黒”のマスター達はその全てがミレニア城塞に、正確に言うならばミレニア城塞の中、己が最も安全と信じる己の工房の中に閉じこもった。

自らのサーヴァントを信じ、その帰還を待つ彼らの中の異端は二人。

沙条愛歌と永宮憐。真なる意味ではユグドミレニアの仲間ではない二人。

前者はそもそも“赤”のバーサーカーを使役していて、最初からこの戦いで使い潰すつもりであり。

後者に至ってはサーヴァントは真横に控えている。

「せっかく作ったのに、使ってくれるのがライダーアストルフォだけだなんて」

「えっと、一応私も使ってるのですが……」

「ええ、もちろんキャスターは除いての話よ？」

くるくる、と愛歌は手の上で礼装を転がす。

それは数枚のカード。クラスカードと呼ばれる代物。

“黒”のセイバーに与えられるのは、タルンカツペと呼ばれる陰襲。

“黒”のランサーに与えられるのは、吸血鬼としての己の側面。

その他の英霊には真つ当な別側面がないので、用意できたのはキャスターとライダー含めて4枚。

使用されているのは……というよりもサーヴァント本人が持っているのは二枚だけで、セイバーとランサーには各々の事情で受け渡されていない。

「まあ、そうは言ってもライダーもまだ使っていないみたいだけどな」

「黙りなさい」

憐が視線を向けたのは、戦場の混沌を映し出す魔水晶。

そこには、ライダーが己の相棒たる幻馬、ヒポグリフの真の力を解放しながら空中庭園へと向かっている姿がはつきりと映し出されている。

あるいは、ジークと呼ばれるホムンクルスの存在を知ったならば使うことをためらったかもしれない宝具行使は、現実にはそうならなかったから行われる。

角笛が妖鳥ハルヒユウアの如き骨格の、穢らわしい骸骨兵を粉碎する。

発見したジャンプ赤のアサシンへと突撃を敢行し、彼女の放つ神代の魔術をヒポグリフが異界へと跳躍してすり抜け、あるいはアストルフオが持つ魔術書の形をした宝具が打ち消しながら距離を潰す。

「さて、どうするんだろうな、あいつ」

ライダーの武器は宝具でもある馬上槍。

一応、剣を携えてはいるが、それでも主戦力は槍の方だろう。

“赤”のアサシンという小さな標的を、彼女の放つ魔術を避けながら接近し決り抜く。

言葉にすれば簡単だが、実行するとなれば難題ではある。

空中戦ではまず間違いなく敵無し彼の装備は、けれど空中庭園という足場がある本領を発揮できない。

だからこそ、地上戦という立場で戦うのならば、もうひとつ何かが必要だった。

その何かは、すでに彼が持っている。

「セイバーのクラスカード、セレニケはたっぷり楽しんでくれたみたいね」

服装ごとチェンジした黒のライダー。

連接剣が縦横無尽に駆け巡り、多種多様な方向からセミラミスを狙い打つ。

愛歌によってライダーに渡されたセイバーのクラスカードは、アストルフオの剣士のクラスを宿したもの。

水着やサンタといった色物ではないから、一応は用意することは可能だった。

ちなみに、これを見たセレニケはさらに拗つたらしく、翌日には愛歌とサムズアップ

を交わす姿が散見されたらしい。ナイス友情。

「この状況だと、“赤”のアサシンはライダーに掛り切りでしょうから、ほかの英霊への援護はできないでしょうね。空中庭園に気を配らなくていいのは助かります」

「まあ、この状況だとケイローンの援護以外はそう求められていないような気もするけど」

ロンゴミニアドを再現した魔術。

基本的に、彼女が持つ魔術の中でアキレウスに通用するのはその一つのみ。

最果ての塔そのものではないため、権能の行使は不可能だが、世界のテクスチャそのものに干渉する機能は限定的に再現され、有する攻撃機能は破格の代物。

「俺たちがやらないといけないことは忘れてないよな？」

「はい、もちろん」

彼らの目的は、聖杯戦争を勝ち抜くこと……ではない。

あくまで、それは手段である。目的は、聖杯を用いて願いを叶えること。

キャスターは身長を伸ばしたい、憐はキャスターと結婚したい。

どちらも、キャスターが受肉することで願いが叶う。

協力している愛歌も、キャスターを妹にしたいので、受肉してもらわないと困る。

そして、普通のアーサー王ならば、騎士にして王である存在ならば認められないよう

なことの一部は、魔術師としてある彼女ならば容認できる。

「サーヴァントが脱落して、仕掛けておいた大聖杯への命令が発動したら脱出」

「ついでにその時点であの筋肉ダルマに令呪による宝具使用を命令。爆発四散させて魔力を充填して大聖杯そのものを爆発」

「だから、その時まで私は死んじやダメ、なんですすよね？」

「そうそう。だから、早めに〃赤〃のセイバーは見つけてしまいたいんだけど……」

魔水晶の中には、キャスターと同じ顔をした、鎧兜に身を包んだ少女の姿はない。

隣にあるべき、強面のおっさんの姿は、戦場が戦場ゆえに仕方ない部分があるとはいえ、こういうパーティー的な戦場に遅れて来る輩だとは思えないのだが。

「見つからないな」

「見つかりませんね」

ちよつとだけ自分の子供の戦いに興味はあったのに、と呟くキャスター。

モードレッドが聞いていたら、これだけで一人死んだんじゃないか、と思うような発言。

王に、親に認められるという叛逆の騎士としての霊基の根幹を揺さぶられて、あるいはいいところを見せようと焦って本人が死ぬか、奮起したことでこちらのバーサーカーなどそこまで霊格の高くないサーヴァントが死ぬか。

想像は容易にできるので、本人には言つてやるなと口にしたところで、愛歌もまた口を出す。

「見つからないなら戦場にまだ来てないってことでしょう?」

「つてことは、〃赤〃の陣営は別行動してるセイバーには情報を伝えずに来たのか」

〃赤〃のセイバー陣営はモードレッドの直感に従つて別行動をしている、というのは彼らも知っている。

だが、だからと言つてこの戦場に遅れるとは信じがたい。

ならば、最初から〃赤〃の陣営……正確には天草四郎時貞は〃赤〃のセイバーをこの戦いに呼ぶつもりはなかった、と見るべきである。

愛歌の干渉により魔水晶は戦場となる草原だけではなくその周囲、トゥリファスの街やミレニア城塞東のイデアル森林にまで映し出す。

「お、いたいた」

その一角に、求めていた姿があった。

トゥリファスが一角、ミレニア城塞は周辺住民は誰一人として目指すことのない場所である。

夜を迎えれば、そこは恐ろしき魔の居城。呪われたくない住民は、誰もが瞳を逸らし、布団をかぶり、恐ろしき吸血鬼——ヴラド三世に見初められないことを祈る。

今となつては、真にヴラド公が住まう城となつたその城塞に向けて、一台の車が走り抜けていた。

それはスポーツカーと呼ばれるもの。

様々な時代、様々な土地の英雄が入り混じり、しのぎを削るミレニア城塞という場所へと向かうにはあまりにも時代錯誤な鋼鉄の騎馬。

けれど同時に、神代に逆行する戦場にこれは今を生きる者の戦いであると示すには、これ以上ない代物。

「おいおい………」

ぼやきは、叫びのようだった。

腹の底から声を出さなければ、今の状況では隣にいる少女にすら届かない。

獅子劫の叫びは、そっくりそのまま今の彼らの現状を示すものだった。

「もう少し安全運転つてものをだな！」

「んなことしてたら決着が着いちまうぜ、マスター！」

セイバーの言葉と同時に、揺れる車体。

森林の中、舗装されたわけでもない、獣道にすらなっていない土の上を爆走する車は、

その鋼鉄の躯体の限界が近づいていることを断末魔の如き音を立てていた。

「ただでさえ遅れてんだ！ このまま着いたら全部終わってました、だけはごめんだぜ！」

「最強のサーヴァントは自己顕示欲も高いなおい！」

「今のところのオレたちの戦績を考えろよ！ まだ一度も勝ってないんだぜ！」

負けてもねえだろうが、と言おうとした獅子劫。

けれど、唯一戦ったミレニア城塞周りの時。あれを勝利、ましてや引き分けなどと呼ぶことすら烏滸がましいと、それぐらいはわかる。

宝具を使わされて、令呪も切らされて、その上で相手には一切の痛痒を与えていない。

特に問題なのが、あの宝具が“アーサー王殺し”と呼ぶべきものであったこと。

それをアーサー王相手に使用して殺せなかった、というのはどれほどプライドを傷つけられたことか。

いや、その翌日の対応を見ればアーサー王に一度見た攻撃が通用すると思った自分の未熟を反省しているのかもしれないが。

とにかく、彼女視点、一度も勝利を掴めていないというのがセイバーのサーヴァントとして、円卓の騎士として、未来の王として許せないのだろう。

だから、これ以上なく“自らの最優”を証明するために、彼女は素早く戦場に推参す

ることを望んでいる。

とはいえ、この行動にも理はある。

いくら“赤”と“黒”が潰しあつて、彼らが到着した時点でほとんどのサーヴァントが倒れようと、結局のところユグドミレニアの中の大聖杯を手に入れられなければ意味がない。

戦場の混乱が終わり、“赤”のセイバーがたどり着いた時には、あるいは七騎で開くことを想定している大聖杯がすでに使用された後、なんてことも考えられる。

だが、そんな彼女の想いに振り回されるスポーツカーの方は可哀想だ。

獅子劫が当初より持っていた自分の礼装、あるいは装備ではないことが特に哀愁を誘う。

この車は、魔力の高ぶりを感じ取った獅子劫が戦場に馳せ参じるために拝借した、どの誰ともしれない人間のスポーツカーだ。

当初は終わった後に元の場所に戻しておけばいいか、と思っていたのだが、もうこれでは“何かがあつた”ことを隠すことはできないだろう。

彼に、この車を治すレベルの錬金術は使えない。

全てのサーヴァントには、サーヴァントとして召喚された時点で二種類のスキルを持つている。

一つは、逸話からなる固有スキル。サーヴァントの逸話が形となった、彼ら彼女らの伝説由来のスキル。

もう一つはクラススキル。全てのサーヴァントが、召喚されたクラスに対応して与えられるスキル。

今、セイバーが行使しているのは後者のスキル。

Bランクの『騎乗』スキル。幻想種、幻獣・魔獣クラスの獣でなければ乗りこなせるレベルの騎乗能力。

ただし、あくまでこれは『乗り方がわかる』というスキルでしかない。

現世における法律を教えてください。スキルではない故に、乗り方にはサーヴァントの性格が出る。

そういう意味で言うのなら、**“赤”**のセイバーの乗り方は『乗り物の性能を最大限に発揮させる』と言う意味では最適解であり、『乗っている人間の安全を考慮する』と言う意味では最低最悪の部類だった。

“黒”の陣営は誰もが、**“赤”**のセイバーはすでに戦場にいるものだと思つて戦つている。

だから、いずれ王に至る彼女の進撃を阻むような愚か者は存在しない。

それが彼女には不愉快である。

自分の存在を知りながら、戦場における輝ける希望を、王の威光が戦場になくすることを一切不思議がっていない。

その威光を見つけれないことを、隠れ潜んでいると思っただけに違いない、と彼女は断定する。

何せ、モードレッドには自らの出自を隠した逸話から得た隠匿系統の宝具があるのだ。

それを利用して隠れている、などと考えているのかもしれないが。

「王が隠れて何になるってんだ……」

彼の知る王とは、騎士や兵士をその姿によって鼓舞するものである。

故に、隠れるような存在と思われるのは、侮られていると思ってしまう。

その怒りによってつい、サーヴァントの身体能力が行使される。

あり得ない力で踏みしめられたアクセルは、嫌な音を立てながら車を加速させた。

それが、彼女たちの運命を救った。

一瞬の加速。速度を維持したままであったならば、死んでいた、そう悟った瞬間には“赤”のセイバーは己のマスターを全力で蹴り飛ばす。

窓を突き破り、車の外に蹴り出された獅子劫は当然の怪我を負い、咳き込みながらも魔術刻印による肉体の回復を受けて状況を知った。

「——ッ！」

一瞬、音が消える。巨大な爆発音の根源は、つい先ほどまで乗っていたスポーツカー。後部エンジン部分に突き刺さった巨大な杭は、獅子劫が聖杯大戦に参加する前にもらった情報と一致している。

すなわち、魔術協会がユグドミレニア誅罰のために送り出した五十人から成る獵犬部隊。それを一瞬で壊滅させた“黒”のサーヴァント、ランサー。

「ヴラド、三世……！」

「ほう、蛮族でありながら余の名は知っていたか」

最悪だ、と獅子劫は思う。

自らのサーヴァントとの距離はわずかに離れている。

それは、蹴り飛ばした反動でセイバーも車から脱出していたから。

そして、直感スキルが下手な動きをしたならばマスターが死ぬと警告しているから彼女が動けない。

動けないが、同時に許しがたい言葉をこの男は口にした以上、その責任は取らせなければならぬだろう。

「蛮族、だと………テメエ………！」

「違いあるまい。貴様らは我が領土への侵略者。それを蛮族と呼ばずして何という」

赫怒が、彼女の総身に魔力を行き渡らせる。

今にでもロケットスタートをしそうなその殺意を受けて、ヴラド三世はなおも平然としましたま。

敵意を向けられているわけでもない獅子劫ですら冷や汗をかいているというのに。時代は違えど英傑ということか、と納得したところで。

「俺を、あのピクト人共と同類と呼んだか貴様アツ！」

爆発した殺意。

『魔力放出』の赤雷が、彼女に爆発的な瞬発力と最高速度を与える。

対するヴラド三世の行動は単純。動けないマスターの方を串刺しにして、その一瞬、無防備となる自分を守るためにセイバーの動きを杭の壁で稼ごうとして——

「ツ！」

咄嗟に身を翻す。“黒”のランサーと“赤”のセイバーの間を津波のように通り抜けて行ったのは、黄昏の剣気、真エーテルの輝き。

彼の同胞である“黒”のセイバーの宝具。黄昏が去った頃には、すでにその場にセイバーはいない。

どこへ消えた、と一瞬だけ悩み、次の瞬間には身を震わせる悪寒に従い、咄嗟に杭を形成する。

「はっ、これで形勢逆転だな、吸血鬼野郎ー」

すでに、その場にマスターの姿はない。

黄昏の最中に魔力放出で手にしたスピードを用いて、マスターを回収。そのままどこかに隠し、戦場から離れさせたか、と思考の冷静な一部分が把握する。

だが、彼の思考の大部分は一つの感情で支配される。

怒りだ。

「余を、吸血鬼と呼んだな」

どちらも等しく、抱く感情は全く同じ。

目の前の存在は許せない。

自分のことを侮辱した。

故に死ぬ。

為政者でありながら、後世にて人を襲う怪物と変わった“黒”のランサー。

為政者になろうとしながら、その最後を国を砕く最低の存在となった“赤”のセイバー。

そのどちらもが、目の前の存在は許せぬと感情論に従って己の武器を振り抜いた。

カルナさん、宝具ブツパの巻

「そうか、それがお前の真名か。〃黒〃のセイバー、ジークフリート」

「同じことを言わせてもらおう。〃赤〃のランサー、カルナ」

ジークフリートの胸中に満ちるのは歓喜と感謝と驚愕と苦々しい思い。

歓喜と感謝は、武芸だけではなく宝具という観点でも彼と対等に戦ってくれる〃赤〃のランサーに対して。

驚愕は、宝具を以ってしても傷をつけられなかった〃赤〃のランサーの防御能力に対して。

苦々しい思いは、彼の持つ幻想大剣の真髄を解放した一撃が押し切ったのは、全力ではなかったということに。

ただ、良かったことがあるとするならば、真名を開帳したことで、もう『真名を隠すために喋ってはいけない』という縛りが彼を相手にするときだけは無くなった、ということか。

マスターが唾然としていることがジークフリートには気配でわかる。だが、それも仕方ないことだと彼は思う。

黄金の鎧とブラフマーストラ。

バラムンクと呼ばれる聖剣。

ぶつかり合った宝具と宝具。

幻想大剣とインドの奥義。

お互いの真名を確定させる一撃。

決着は、幻想大剣が押し切ったが、一瞬の拮抗すらなかったあの一撃が本気であった、などと樂觀することはできない。

「そのような顔をするな。別に、全力を出さなかったのは悔辱しているというわけではない」

本気を出さないのならば、出さないなりの理由があるはずである。

例えば、生前の彼の呪い。匹敵する敵対者が彼の前に現れた時、その奥義を思い出せなくなるという致命的なもの。

「サーヴァントとしての俺は、致命的と言えるほどに燃費が悪い。これすらも、濫りに使用するわけにはいかんのだ」

例えば、彼の装備。そのどちらもが強大な宝具であり、完全な状態を維持するだけでも消費される魔力は大きいものであるとわかる。

太陽神の息子という英霊としての格。神によって授けられた装備。そして奥義とす

ら呼べる宝具。

それら全てをフルスペックで行使させてやれるマスターが、この世界に如何程いるものか。

轟、と体から吹き上がる魔力。

誓つて、見逃したなどということはない。

ジークフリートの目の前で、吹き出した魔力が炎に変わったことに、魔の業が交わる余地は一切なかった。

つまり、これが彼の本質。彼の吹き出す魔力はその全てが一切合切を溶かす浄滅の炎と変わる。

最高ランクの『魔力放出』。それも、炎に特化した。

“赤”のセイバーの『魔力放出』はあくまでも普遍的な魔力放出であり、そこに赤雷が混じるのは彼女自身が変換しているから。

そうでなければ魔力放出スキルは『魔力放出（雷）』になっていただろう。

だが、“赤”のランサーのこれは違う。彼が魔力を吹き出せば、自然とそれは炎と変わる。

太陽神の息子として持つその炎は、サーヴァント基準で最高ランク。そのレベルの魔力放出は、ただそれだけでも必殺の宝具に等しい力を持つ。

踏み込みの瞬間、武器を振り抜く瞬間、インパクトの瞬間。

行使する時間はそう多くないけれど、重要な部分には必ずや乗せられる魔力放出。

下手な武具では受けることもできず、肉体ごと両断される未来を幻視するような一撃。

いや、下手な戦士ではそもそも受けることすら考える余裕もなく、動くこともできず、何が起きたのか理解できないままに死んでいただろう。

それを、ジークフリートは反応し、その手にある幻想大剣で受け止める。

「——っ！」

重たい。これまで以上に。

魔力放出が“赤”のランサーの一撃にさらなる威力を加えている。

これはただの魔力ではなく、ただの炎ではなく、人間が太陽に見出した灼熱の具現。

地上にあつて耐えられる物質はなく、当然のようにカルナが踏み込んだ地面が、射出されたかのような突きを通った空間が、その太陽の煌めきによって焼き尽くされる。

槍の穂先、インパクトの瞬間にその場に収束された炎が粉となって空を舞い散る。

ジュツ、とジークフリートの頬の近辺を通っただけで、その灼熱は彼の肉に小さくも確かな火傷を刻む。

鱗粉のごとく舞う火の粉すら、彼の肉体を傷つけ得る至高の一撃。

傷一つ一つは小さい。

治癒魔術があれば、一瞬で治るようなもの。

“赤”のランサーは、その黄金の鎧によるものなのか強大な自己治癒能力を持つが、“黒”のセイバーにそんなものはない。

故にマスターによってそれらは治癒されることになるのだが、その際にマスターへと一つ頼みを告げる。

悩む様子を見せるゴールドではあったが、逡巡は僅かな時間。セイバーとランサーの持つ鋼が百のぶつかり合いを終えた頃。

——令呪をもって命ずる。

彼の脳裏に、マスターの声が響く。

それは、マスターがマスターである特権。本来ならば三回限りの、今は四回に増えた絶対命令権。

ジークフリートのマスター、ゴールド・ムジーク・ユグドミレニア。

彼は、人並みの恐怖を抱きながらも非常にプライドが高い。サーヴァントを使い魔風情と見て、傲岸不遜に命令をしながらも、その心の中ではサーヴァントに対する恐怖を持つている。

そうして、自分の思い通りにいかなければ他の誰かに責任転嫁をして、心の中でぐち

ぐちという人間ではあるが——愚か者、というわけではない。

自分の意見が通らない、あるいは若造とみなすフォルヴェツジ姉弟などに言いくるめられる、そういつたことに文句は言えど、作戦そのものに否定はしないし、それが有用だと認めることもできる。自分の意見の方が優秀ではないか、若造のくせに意見しおつて、などと思うだけで。

だから、自らよりも戦上手、命を懸けて戦うジークフリートが勝機を見出したのならば、あとはそこに賭けるだけ。

ジークフリートは、確かに弱点はあれど、世界的に有名な、最上位に位置するだろう英雄である。

そんな彼を信用しないのは、何よりも彼を選んだ自分の見る目がなかったと認めると言うこと。

プライドだけが一丁前に肥大化したゴールドが、そのようなことをできるはずがない。だから、その頼みを聞くしかない。

——この決戦が終わるまで負けることを禁ずる。

——何が何でも勝て。

二つの令呪が同時に使用される。

二画分の魔力が流れ込むのは彼の敗北に繋がる要素。

すなわち、『攻撃を防ぎきれない肉体』と『敵に明確なダメージを与えられない聖剣』の二つ。

全ての攻撃を防ぎ、あらゆる攻撃を通せば勝てる。そんな子供でも分かりそうな単純で、けれどカルナを相手には決して不可能な理屈。

それを少しでも実現に近づけるために、費やされた令呪は、ジークフリートの力に変わった。

「本来なら」

普段のジークフリートならば、こんなことはしなかっただろう。

自らの願い、眼前の強敵に勝利したい、と言う気持ちに嘘はないが、それはあくまで自分の力でなされてこそ意味があるもの。

他者の手を借りることを悪いと言うつもりなどない。実際、先ほどもマスターからの治癒魔術の恩恵を受けていた。

「貴公との戦いには、己の力だけで勝ちたかった」

「悪い、などと思うことはない。今の我らは戦士である以前にサーヴァント。戦うためにはマスターの魔力ちからを借りる必要がある」

「ああ、だからこれは気分の問題だ」

それは、戦士の直感だった。

カルナが幅広の槍を構えた瞬間、不可視の剣が激突する。

ジークフリートの別霊基が持つタルンカツペと呼ばれる宝具が、剣身を隠しての一撃を成立させた。

だが、それも一度限り。燃える炎が剣に巻かれた宝具を焼き尽くし、すぐさま聖剣はその姿を晒す。

ジークフリートとして、そして何よりも“黒”のサーヴァントとして。持てる全てを用いてカルナを超える。そうでなくては失礼だろう。

その覚悟が、マスターへの令呪の後押しを頼むに至った理由。

瞳に宿った決意を知り、カルナもまた小さな笑みを浮かべる。これほどの男に、勝ちたいと思ってもらえるとは、と。

再度の激突。

ジークフリートとカルナが交わす剣戟。

先ほどまでの焼き直しのように、『魔力放出(炎)』を帯びた槍の一撃が聖剣に弾かれ、聖剣の一撃が槍に防がれ、あるいは掻い潜り届くが、両者ともに本来受けるはずだったダメージは鎧によって縮小される。

けれど違いが一つだけ。

直撃ならばまだしも、槍の軌跡に飛び交う火の粉ではジークフリートの体に傷をつけ

られない。

まるで計ったかのように、お互いの一撃が同時に互いの体に届く。

踏鞴を踏みながら、距離が開いた瞬間、半ばが砕けた杭の壁で覆われた空間に剣気が満ちる。

終わりを迎えたの夜。始まりを迎えるのは逢魔時。

黄昏が、世界を満たす。

『『幻想大剣・天魔失墜』！』

放たれるのは、竜殺しの宝具。

振り下ろされた聖剣の柄頭に嵌められた青い宝玉から溢れ出す神代の証。

真エーテルと呼ばれるそれが、解き放たれ宝具の増幅^{ブースト}として機能する。

A＋ランクの対軍宝具が、黄昏の津波がカルナの総身を包み込んだ。

光の洪水が止んだ後、その場にカルナの姿はない。

最高ランクの対軍宝具の直撃を受けては当然の帰結。如何なサーヴァントとて、これほどの神秘を浴びてしまえば生き残る道はない。

だが、ジークフリートにはこの程度では死んでいないと言う確信がある。

その確信が正しいことは、頭上に煌めく夜の太陽が示した。

「お前にはかり宝具を使わせると言うのも芸がないな」

ランサーの炎が槍に収束していく。

通常攻撃としても扱っていた、収束させた太陽の炎。

だが、彼の言葉を聞いてそれが先ほどまでと同じだなどと思えるはずもない。

黄昏を再装填。幻想大剣は今一度、世界を黄昏で満たす聖なる魔剣としての本領を發揮する。

「いけ、『梵天よ、我を呪え』！」
ブラフマ・イストラ・クンダーラ

槍のもう一つの使い方。斬る、薙ぐ、突く——そして、投げる。

構えは投槍。炎をジェット噴射として扱う彼は地上にある今生における最大の宿敵へとその太陽を発射する。

迎撃の黄昏が極光となって広がり、太陽の落下を受け止めた。

激突は、どれほどの時間だったか。

太陽と黄昏は、内包したエネルギーを互いに喰らいあい、同時に果てた。

太陽の光によって生み出される黄昏の光は、太陽の炎そのものと激突してなお、負けることはなかった。

ぶつかり合う二つの光源が消失した後、周囲は肅然とした暗闇へと変貌する。

先ほどまでの昼間と見紛うような明るさから、瞬間的に暗闇へと戻った視界に、尺ものサーヴァントも数瞬の時間を要した。

「互角か」

いや、あるいはわずかに太陽が上だっただかもしれない。

令呪の後押しを受けた幻想大剣は、総量としてカルナの太陽に匹敵しながらも、耐え切ることなく消滅した。

そこにすかさずの二発目が飛んできた。増幅効果は見込めなかったのだろうが、それでも太陽を防ぐには十分。

最終的にはこちら側が勝利するという形にはなったが、その上でなお己の奥義を受け止める戦士に、クシャトリヤ戦士としての血が騒ぐ。

「このまま朝までお互いの武芸わざをぶつけ合ってもいいが、それではお前を打倒することなどできない」

そして同時に、宝具を使用しても。

カルナが、インドの英霊として、インドの戦士として持つ最上の奥義。

宝具として昇華されたそれらを、令呪の加護を受けた状態とはいえ、ジークフリートは超えてきた。

令呪か、はたまた別の如何な理屈かは知らないが、この男は宝具の連射すらも成しえ

るらしい。

で、あるならば、カルナが勝利するためには、彼もまた宝具の連射が必要となるだろう。

一の宝具を二度の宝具で止められるならば、相手が二度放つよりも先にこちらも奥義を放てばいい。

どれだけの数が必要になるのかはわからないが最終的には相手が追いつかないだろう。

だが、それをするには魔力が足りない。自分のわがままのためにマスターに令呪を使ってもらう、ということカルナは拒み、そして何よりも大前提として彼はマスターの顔を見たことすらない。

ならば、この戦いは永遠に決着がつかないか。それともカルナが魔力切れで敗北することになるのか。

いいや、彼にも一つ勝ち筋がある。

「このまま戦い続けられれば、いずれはどちらかの陣営のサーヴァントが介入することになるだろう。だが、それは本意ではあるまい」

カルナの持つ二つの奥義は無効化されるといふのなら、それを超える一撃を放てばいい。

「故に、オレ達の戦いに決着をつけようと思うのなら、オレには絶対破壊の一撃が必要だ」

そして、それがカルナにはある。

カルナの本職、アーチャーでも、ライダーでもない。ランサーとして召喚された理由。神殺しの槍が。

ランサーの黄金の鎧が消失する。

彼ほどの男であろうと、皮膚に癒着していたと言われる黄金の鎧が消失する痛みは耐え難いものがあるのだろう。

代わりに、手にしていた槍とはまた別の、あまりにも神々しい槍がそこに現出する。

雷神インドラが授けたとされる神殺しの槍。強大なりし神話の中で、神々にすら扱えなかったと言われる槍が。

今日に入って、数えることも億劫になる程解放された黄昏が、今一度解放される。

カルナの一撃を迎撃するために。

それを、カルナは嬉しく思う。

「神々の王の慈悲を知れ」

「邪悪なる竜は失墜する」

これで決着はわかりやすい構図となった。

「インドラよ、刮目しろ」

「全てが果つる、光と影に」

カルナの一撃を耐えきり、防御を失った彼の肉体に一撃を叩き込むことができれば、ジークフリートの勝利。

「絶滅とは是、この一刺」

「世界は今、洛陽に至る」

逆に、この一撃でジークフリートを焼き尽くすことに成功すれば、カルナの勝利。

「焼き尽くせ——」

「撃ち落とす——」

——『ヴァアサヴィ・シヤクテイ日輪よ、死に随え』！

——『パルムンク幻想大剣・天魔失墜』！

聖杯大戦おーわり！

“黒”のバーサーカー、フランケンシュタインの怪物は戦場の一部となった森を疾駆する。

目的は一つ、敵対する“赤”の陣営のサーヴァントを求めてのこと。

“黒”のセイバーは“赤”のランサーと、“黒”のアーチャーはキャスターの援護を受けて“赤”のライダーを、“黒”のランサーは“赤”のセイバー、“黒”のライダーは空中要塞の持ち主である“赤”のアサシンを、それぞれ相手にしている。

“黒”のアサシンは万が一に備え“赤”が用意した雑兵の首を狩っていて、その上で“赤”のキャスターを探し、“赤”のバーサーカーはそんな雑兵の一撃を受けて、自らダメージを蓄えているらしい。

不甲斐ない、と自分でも思う。

マスターには姉であつてもいざれ敵として戦わなければならないと覚悟を決めさせようとしたくせに、こちらは創造主父親が出ただけで狂奔する。

挙げ句の果てにはその狂気を止めるためだけにマスターに令呪を使わせてしまうなど、これでは何のために僅かな思考能力が残っているのかわからない。

この失態を挽回するには、サーヴァントの首の一つは取らねばならないだろう。空を見上げる。

そこにあるのは空中庭園。アサシンの宝具だという話のそれは、さかしまの空中庭園。聞いた話だと、今回はネブカドネザルではなくセミラミスだったという。

先ほどまで立ち塞がっていた相手、シロウ・コトミネ。その横にいたサーヴァント、キャスター。口になっている言葉を聞いたマスターいわく、その真名はシェイクスピアだと。

性格的にはともかく、能力的には前線に出てくるようなサーヴァントではなかった。ならば、キャスターはすでにあの空中庭園の中に戻ったのか。可能性はないわけではない。

なぜならキャスターとは、本来後衛職。

魔術師キャスターのクラスにふさわしい、『陣地作成』能力があつた男にもあるはずだ。

魔術師の工房であり城。空中庭園という大規模な規格外の宝具。その中にあるとなれば、それ以上に安全な場所などそうは見つからないだろう。

“黒”のバーサーカーはさほど、戦闘能力が高いというわけではない。そもそもバーサーカーとは狂気に飲まれた逸話を持つ英霊が至るか、サーヴァント側が容認することで狂気を付与されることで弱小サーヴァントがステータスアップを図った姿かのどち

らか。

“黒”のバーサーカーは後者である。強化されたとはいえ彼女程度の火力では、空中庭園の中にあると思われる工房を破壊することは不可能だろう。

“黒”のライダーが“赤”のアサシンと戦っている今ならば、あるいは可能かもしれない。

失敗すれば即死である、ということには目に見えている。先ほど、ライダーが上陸するまでに空中庭園から放たれた魔術の数々は、彼自身が高い対魔力程度では耐えきれないことを示すように、全てを避けていた。

——さて、どうする。

長考はしない、できない。

理性は保持しているが、あくまで保持しているだけ。

狂気は当然、バーサーカーとして呼び出された彼女の中にあり、その狂気は正常な思考を蝕む。

まともな考えなど、彼女には浮かぶほどの時間がない。

令呪を使っもらう。

そんな考えが出たところで、考えを中断するほどの爆発的な魔力の奔流を、彼女は察した。

「来た」

つぶやきは、誰のものだったか。

水晶の中に映る戦場は、目紛しく変遷している。

今、“黒”のセイバーと“赤”のランサーの決着もついた。

どうやら、ゴールドがさらに令呪を使い、カルナの元までジークフリートを届かせたらしい。

そして敗者として消滅するカルナと、令呪でつかんだ一瞬を使い果たし勝者として消滅するジークフリート。

二騎分の魔力が大聖杯に宿り、すでに埋め込まれた“願い”が叶えられる。

「これが、受肉というものですか」

キヤスターの魔力で編まれた肉体を、無色の魔力が現実にある肉へと変化させる。

その威容を横目に、愛歌が令呪をかざす。

「なら、こっちも終わらせてしまいましょう?」

“黒”のバーサーカーが感じた魔力の出所は、“赤”のセイバーと“黒”のランサー。

バーサーカーが前衛となりセイバーと戦いながら、ランサーがセイバーを串刺しにしようとは杭によって苛烈に攻め立てる。

だが、セイバーはバーサーカーをはるかに超える霊格の持ち主。英霊としても、セイバーにバーサーカーが敵う道理はない。

巧みにバーサーカーを用いながら“黒”の二騎と戦う“赤”のセイバーなのだが、では対応する“赤”の陣営のバーサーカーはというと。

「あら、ルーラーと接触してるのね」

ちようどいいわ、と愛歌が笑った。

紅の燐光を纏う四つの令呪。

彼女たちの目的を達するために、絶対命令権が行使される。

「バーサーカー、ルーラー、つまりこの聖杯大戦において最も強権を振るう、あなたが嫌う圧制者を攻め立てなさい」

まずは一画。

これで、ルーラーは己の身を守るためにもバーサーカーとの戦闘を余儀無くされる。

何より、この聖杯大戦における絶対者へ逆らえ、という願いは彼にとつてもまた本懐。

終わった後に愛歌を殺すという気持ちも増幅されるが、それはもう関係ない。

「バーサーカー、宝具『疵獣クワイク・ウオーモンガーの咆吼』を最大効率で稼働させなさい」

敵から負わされたダメージの変換効率が最大になる。

今の彼の宝具稼働状態では、全ての攻撃が瀕死、あるいは致命傷状態で受ける一撃と変わりなく、最大効率で魔力を蓄え始めた。

圧制者を殺す喜びに笑みを浮かべながら、命令をしたマスターへと叛逆をせねばなるまいなど立ち上がる力に変わる。

「バーサーカー、あなたの宝具で貯蔵できる魔力の量を増やしてあげる」

三画目。消えた令呪によって、彼が貯蔵できる魔力量が上昇する。

彼の宝具が魔力を貯蔵し、己の力に変えるものであること、そして溜め込んだ魔力を解き放つものであることを考えると、この命令は事実上スパルタクスが放つ宝具の最大火力が上昇するということ。

すでに、願いは叶えた。

あとは後顧の憂いを断ち、撤退するのみ。

「さあ、最後よ。圧制者を、圧制者に従う走狗を、この戦場に集ったサーヴァントをその宝具の解放で皆殺しにしなさい」

彼女が作り出した四画目の令呪が輝きを失う。

聖杯は、今はもう中に溜め込んだ魔力を一気に解き放つことで周囲一帯を破壊する聖杯爆弾とも呼ぶべき代物に変貌してしまっている。

これを爆発させることでユグドミレニアを滅ぼし、これから先の人生で彼らが関わってくる余地をなくしてしまうことが憐の狙い。

故に、破壊力はあればあるほどいい。そして、その破壊力の源泉は、すでに敗退したサーヴァント。

超級のサーヴァントが二騎入ったことで願いを叶えても多少魔力の余裕はあるが、本当に多少の域。

故に、バーサーカーを供物に、バーサーカーの宝具で他のサーヴァントを数名撃破できれば御の字。

この令呪は、そういう命令。

「キャスター、バーサーカーの宝具解放に合わせてお前の宝具も頼む」

「ええ、任せてください。ただの爆発であれば、どのようなものでも防いで見せます」

少女が、己の持つ魔術礼装……『選定の杖』に触れる。

同時に、広がったのは花の楽園。鳴り響くのは鐘の音。

共に戦う仲間たちを守り、強化するその音色が鳴り響く楽園こそは、彼女の心象世界。「あれはいつか見た終わりの星、多くの言葉、わずかな煌めき」

百花繚乱の花の丘の中央には、彼女の持つべき選定の杖が肅然と立っている。

一步、また一步と近づいた彼女は、その杖へと触れて――

「どれほど遠く汚れても、私は星を探すのです」

展開されるのは、一つの結界。

それは、ワールドエンド級の一撃すらも防ぐことができる、世界最上位の防御。

聖剣の鞘に酷似した、けれど絶対的にどこかが違う究極。

「さあ、幕を上げて」

その種別こそは『対肅正防御』。

原初の英雄王の持つ天の理をも防ぎきる、究極にして至高の一。

故にその名を――

『『アラウンド・カリバーンきみをいだく希望の星』』

希望に包まれた星が、三人を守る。

こちらの世界で選定の剣と呼ばれた武器の名を冠する、究極の防御。

当然、たかだか叛乱を起こし、けれどその剣を時の皇帝に突きつけることもできずに消滅したスパルタクスごときが突破できるようなものではない。

とはいえ、それはこの宝具を超えられない、というだけのこと。

この宝具の範囲は彼女の工房、すなわちキャスター陣営が集う部屋のみを対象としており、ミレニア城塞のそれ以外の部分は覆っていない。

そして、彼女の部屋にまで光の斬撃とでも呼ぶべき爆撃が到達したということは、ミ

レニア城塞の内側にまでその爆発は届いたということであり、それは当然、生半可な一撃であればサーヴァントの一撃であろうと、あるいは宝具すらも受け切れるかもしれないと思われたミレニア城塞の守りを突破した、ということである。

「あら、運がいいのね。それとも悪いのかしら?」

会話の最中、どうやらバーサーカーの爆発に驚き、ミレニア城塞に一瞬気を取られたアストルフォが墮とされたという光景が水晶に映る。

同時、発進する空中庭園。目的は、大聖杯の奪取。全てが終わり次第、自らの願いを叶えるために“赤”^勝の陣営^者が使用するべき、そう考えているであろう景品の強奪。

「マスターは死んでないのか?」

「ええ、でもこちらのアサシンは死んだみたいね。バーサーカーもモードレッドを殺すために食らいついて、宝具の最大解放をしたみたい」

「つてことはバーサーカーも落ちたか」

「それに、向こうのセイバーもね」

「え、モードレッドもですか?」

「ええ。バーサーカーが宝具をゼロ距離で使用するために令呪まで使つて抑えられたところを、こつちのランサーが自分の槍でグサリつて。その傷を起点にバーサーカーの宝具を叩き込まれたみたいよ」

「そう、ですか……」

何をキャスターが思ったのかは理解できない。

それでも、自らの知らなかった子供への死に何かを思ったのだろうか。

「あ、でも勘違いしないでちょうだいね？ そのタイミングであの怖い顔の人も令呪を使つて脱出させたみたい。そのあとに、ランサーの宝具の効果で、串刺し刑にしたつてことになって心臓から生えた杭に殺されたようね」

「いや、何の救いにもならんぞそれは」

「うるさいわね」

どん、と巨大な爆発音。空中庭園に回収された大聖杯が、聖杯爆弾として機能して空中庭園を破壊する。

戦場にいるサーヴァントたちも、彼らを維持するための魔力源たるホムンクルスを破壊され、さらには彼らの維持のほとんどを賄っていた大聖杯まで砕けてしまつては、もう現界を維持することなど不可能。

聖杯大戦は、彼らの一人勝ちとなつたのだが。

「それじゃ、後顧の憂を断ちに行こうか」

その一言で、キャスターも立ち上がる。

この聖杯戦争にはもう一人、受肉したサーヴァントがいる。

それを倒さないことには、この聖杯大戦は真の終わりを迎えたとは言えないだろう。キャスターが彼を抱え、サーヴァントとしての身体能力を用いて飛び出した。

「キャスター」

少年の言葉に少女が応じる。なんでしよう、と。

ここは空中庭園。すでに地に堕ちることすら許されず、惨めな姿のまま飛ぶ敵の本拠地。この聖杯戦争を終結させる上で、必ずや打倒しなければならぬサーヴァントがいる場所。

そのような場で、無駄な会話をしている暇などどこにもありはしないというのに。

「四画の令呪をもって命じる」

少年の手の甲に刻まれた、四画の赤い文様が光を放つ。

聖杯が与えた、聖杯戦争への参戦チケット。本来ならば三度限りの絶対命令権が、愛歌によって新たに与えられた一画も加えて最後の戦いを前に消費される。

「第三のスキルを解放し——」

一画、消滅する。

赤い文様は莫大な魔力となり、契約の経路を通じて少女の内へと流れ込む。

解放されるスキルの名は“選定の剣”。少女が最後に辿り着くべきあり方を示す、栄光と破滅を両立するスキル。

「神話の力をその手に宿し——」

一画、消滅する。

二画目もまた嵐の如き魔力と変わり、契約の経路を通して少女の総身に張り巡らされる。

少女の手に現れるのは、神話礼装マルミアドワーズ。火の神が鍛え上げた、『最強の幻想』すらも超える究極の一振り。

「至ることのなかった全ての幻想を胸に抱き——」

一画、消滅する。

三画目が変わった無限に等しい魔力を前に、契約の経路が悲鳴をあげながらもその命令を少女へ通す。

姿が変わる。ただの村娘、ただの魔術師だったはずの少女が、夢幻の如き究極へ。

まさに“王”と呼ぶほかない。

究極、至高、最強。子供が思い描いたような夢物語が、ここに実現する。

「我が手に勝利をもたらせ——！」

最後の一画が、消滅する。

四画目の、もはや駄目押し of の如き解放が、神霊を超える何かに至ったとすら錯覚する少女を契約を通して後押しする。

もはや、無限に等しい魔力すらもその少女にとっては芥の如く。

だが、芥子粒に等しい魔力なれど令呪である。故に当然、サーヴァントとしてある少女の全てを、少女が勝ちを求め続ける限りにおいて永劫の強化をもたらず。

「無論です」

放たれる言葉も、ただの少女然としたものから威光を纏う王のものへと変貌した。

けれど、その中にはマスターである憐への親しみが確かに残っている。

無限に等しい幻想を束ねたその上で、少女は確かに王でありながら魔術師キャスターのサーヴァントとして存在している。

「あなたの望む勝利を、ここに具現しましょう」

故に。

「聞かせてください、あなたの望む勝利とは、いったい何なのかを」

「俺が求める勝利は——」

いつだって決まっている。

最初から、彼が求めたものは口にしていた。

「この戦いをお前と共に勝ち抜いて、ずっと一緒に暮らすことだ」

「わかりました」

笑みを浮かべる。

少女然としたものではなく、王族としての、けれどどこかに村娘の感傷を残したような冷たくも暖かな笑み。

「では、それを実現するためにも、行きましようか」

「……え？」

これは、つまり告白を受け入れられたということか。

思考が止まり、魔術回路の制御を見誤る。

一瞬、体内を回る魔力が滞り、爆発して死ぬところだった、と憐は後で語った。

えびろーぐ

聖杯大戦は終わりを迎え、憐には日常が戻ってきた。

時計塔に通い、己の魔術を磨きあげる毎日。

ただ、少しだけ違うことがあるとするならば、以前よりも注目を集めるようになった、ということか。

理由は二つ。

まず一つ目は単純に、聖杯大戦の生き残りである、ということ。

聖杯大戦で生き残ったのは、彼と獅子劫界離の二人だけ。

それに伴い、最大規模の聖杯戦争で何の後遺症もなく戻ってきた、という理由で注目を集めるようになった。

“赤”の陣営のマスターは聖杯爆弾の爆発の結果、滅ぶ空中庭園からの脱出に失敗して死亡したらしい。

その結果、獅子劫に『彼に弟子入りすれば聖杯戦争でも生き残れるのでは?』という噂が立ったらしいが、そこは憐の預かり知らぬところ。

獅子劫……憐の戦い方における師匠はまた戦場に戻ったのだが、目的を達成できたの

かは定かではない。

爆発した大聖杯の欠片を魔術協会が回収した時には、いくつか足りない破片があったということなので、もしかしたらその内の一つが内包していた魔力次第では、呪いを解呪することもできたのかもしれないが、現在連絡を取っている余裕もない憐では、知ったとしても遠い未来の話だろう。

ユグドミレニアのマスター達は、聖杯大戦が終わったところで、魔術協会が新たに編成した魔術師狩に特化した猟犬部隊によって処罰されることになった。

あるいは、“赤”のマスターが生き残っていたならば、聖杯大戦そのものをなかったことにすることでユグドミレニアとしては終わっても、生き残ることはできたかもしれない。

もしくは、超一流の、時計塔としても類を見ないほどの天才がいたならば、その身柄を担保することもあり得たかもしれないが、ユグドミレニアという一族の性質上、そんな輩はいなかった。

聖杯大戦に参加する魔術師の中にすら二流がいたくらいだ。ダーニックが死んだあと、ユグドミレニアをまとめられる人材がいるはずもなかった。

それでも奇跡的に『悪いのは全てダーニックである。彼の実力、そしてサーヴァントという兵器を持っていたことで逆らえなかった』という形にすることで全ての家系が滅

ぶことだけは避けられた。

そこに、いろいろなところに手を出しているユグドミレニアを全て滅ぼすのは面倒だ、という魔術協会の意向がなかった、とは言えない。

では、二つ目の理由は何かという。

「マスター」

「アルトリア」

「あ、はいすみませんレン」

よろしい、というように頷く憐。

そんな彼の横にいるのは、現代風の装いに身を包んだ元サーヴァント、キャスター。

受肉したサーヴァントという希少な例故に、彼女はいろんな人物からの注目を集めている。

当然、彼女のマスターであつた憐も。

「それで、どうかしたのか？」

「何を書いているのかなあつて」

見る、という問いに頷いたキャスター……アルトリアに、渡した紙の束。

それは、いわゆるレポートというやつであり、その表紙に書かれている言葉を目で追って、少女は口にする。

「アーサー王について……？ 私のこと、ですか？」
「そうそう」

聖杯戦争は、世界中で巻き起こっている。

その中では、アーサー王と似通った顔立ちのサーヴァントもいれば、お前アーサー王だろ！と言いたくなるような、でもこれをアーサー王と認めていいのか、と思うようなサーヴァントが召喚されることも例としては希少だが確かに存在する。

その中でももつとも古い英霊がアーサー王であり、そこにはきつと何かの意味があるはずだ、ということで作られたレポート。

聖杯大戦で出会ったモードレッド。彼女の宝具が持つ『アーサー王特攻』とでも呼ぶべき力。『アーサー王』に対してのみ力が増幅される、というのは少々不思議である、ということも。

他の英霊であれば、『○○を殺した宝具』であつてもその個人に対して力が増幅されることはない。相手が勝手にその攻撃に対して弱体化するだけだ。

で、あるというのにアーサー王に対してだけは技の方が威力増幅されるという事実。つまり、アーサー王とは個人の名前ではなく、アーサー王という特性、あるいは概念ではないかというレポート。

相手に竜特性を付与する宝具を持つゲオルギウス、勝手に安珍認定して火力を増す清

姫。そういった例を鑑みれば、アーサー王が竜や神性といった特性の一種であつてもおかしくはないだろう。

いずれ、『汝はアーサー！』とかやりだす英霊も出てくるかもしれない。

「ええ……」

私の顔、また増えるかもしれないですか、と呟くアルトリア。

受肉した後、この現代魔術科の教棟に初めてやってきた時の彼女は、他の生徒の人気者だった。

その中で、最も彼女の印象に残つたらしい質問が『君の名前は？』という普遍的なもの。

普遍的ではあるが、その直後に自分と同じ顔をしていたという英霊の名前を大量に挙げられれば、印象にも残るといふものだ。

「そこ、お喋りをするな」

「おっと、怒られた」

「怒られちゃいましたね」

次はもう少しうまく、バレないようにしましようにと笑うアルトリアへと頷いて。

それを見ていたエルメロイⅡ世は額に青筋を浮かべる。

「ちようどいい。私の授業を聞いていないということは、これを聞かなくても解けると

いうことだな。よろしい、ならばこれを解いてみる」

授業を聞かない生徒、というのはエルメロイ教室では珍しいことではない。

むしろ、エルメロイ教室だからこそ、というべきか。

他の学部では持て余す才児たちの最後の拠り所。 “この男の元ならばあるいは”と
思われる魔術師たちが集められる場所。

エルメロイⅡ世という、生徒としつかり向き合う人間が教師をしているが故に、彼の
元に集う魔術師は多く、結果としてその勢力はどんどん拡大していく。

魔術は家系と才能でその大部分が決定されてしまう。

そのため、魔術における授業など、ついてこられる奴だけがついてこればいい、とい
うものである。

真面目に、相手に学ばせるための授業ではなく、餌になりそうな情報をばら撒き、そ
こから何かを見出せるほどの才能を持った生徒を弟子として囲い込む。

それが時計塔における授業の性質だったのだが、エルメロイⅡ世の場合、そこで相手
の得意を見抜き、その伸ばし方まで教えてしまうのだから、人気が出るのは仕方なの
いことだろう。

今回のことも、言ってしまうえば彼らがしつかりと授業内容を理解しているかどうかの
心配になるだろう。

「む……正解だ」

「せんせー、神代の魔術師に魔術の講義をしようなんて無理があると思いまーす」

「黙れフラット」

とはいえ、アルトリアという神代の魔術師の存在がある。

彼女の前では如何な権威とて、魔術師として勝利を掴むことは不可能だろう。

そういう意味では、どんな時でも彼女の授業を個人で受けられる憐にも問題を出す意味合いはそこまで大きくないのだが。

「わかってはいるならいい。が、一応授業は聞くフリだけはしているように。この教室には面倒な輩しかいないんだ。下手に面倒を増やしてもらうのは困る」

「はーい」

「君も」

「私、ですか?」

ああ、と頷いたエルメロイⅡ世は、どこか隠しきれない苦々しさを滲ませたような表情で。

まるで、彼女の顔に何かしらの恨みがある、といったような様子。亜種聖杯戦争に参加したことのある彼にも、何かがあったのかもしれない。

「元サーヴァントだという話だが、ならばこそ主人を諫めてくれ」

「はい。ちゃんと、一生面倒を見る予定です」

その言葉の直後、ぼん、と爆発音が響く。

音源は、憐の腕。魔術回路の操作を誤るといふ、魔術師としては初歩的なミス。

黒煙をあげる腕とは真逆に真っ赤な顔。

ついでにそれを見る、授業を受けている人の中で曖昧な、なんとも困ったような笑みを浮かべる、アルトリアと同じ顔をした灰色の少女。

「授業中に爆発するな」

「むりでーす……」

顔を突っ伏して応える憐。

これももう、アルトリアがやってきてからは慣れ親しんだ光景。

肩を寄せ合って授業を受ける程度ならば普通にできるが、少しでも好意を口にされると直後に彼の魔術回路が暴走するのは、もうこの教室では名物だ。

はあ、と一つため息を吐いたエルメロイⅡ世。

「とりあえず、爆発した机は直しておけ。それと、後で私の研究室に来るように」
「うつつ……」

時計塔には、正確には卒業という概念はない。

魔術師は年齢など考慮するものではなく、あくまで生まれつき持った才能こそが大部分。

だが同時に、卒業はなくてもたいていの生徒は一定の年齢になると自分の才能の限界を悟って、次の世代を作り出すために動き出す。

だから、一定の年齢を超えると生徒として時計塔にいる魔術師は非常に少なくなる。形式的な話ではあるが。

だが同時に、その年齢に達するよりも前に時計塔から出て行く人間も普通にいる。憐も、その類の人間になろうとしていた。

「ほい、先生」

「……なんだ、これは？」

「卒業論文」

「魔術に全く関わりがないように見えるが？」

「亜種聖杯戦争を材料に、魔術的な観点からアーサー王について判断したんだけど？」

エルメロイの研究室にて軽めに怒られた後、提出したのは作っていたレポート。

アーサー王についてをまとめた論文を提出したところ、先ほどに比べてなお怒っている様子が見て取れる。

タイトルも内容もふざけたものであること、それなのにその考証のために使われた、聖杯大戦のデータは真面目なものであるという事実。

魔術としてはかなり高等な代物をいたずらにしか使わないエルメロイ教室の人間が論文を作ればこうなるのか、と思わず天を仰ぎたくなるような一品だった。

(だが……)

この辺りが丁度いい塩梅かもしれない、とも思う。

すでに、受肉したサーヴァントを保有している、という一点で憐は時計塔の狡猾な連中に多少目をつけられている。

ここで、もしも蒼崎橙子……とまでは行かずとも多少時計塔にとって有用なものを提出してしまえば、それを口実にサーヴァントを手に入れよう、なんて考える輩もいるかもしれない。

それに比べれば、こうしたちよつとした与太を真面目に考察してみた程度の論文の方が、彼の安全のためにはちよつどいい。

というか、そうすれば自分もあの面倒な老人どもに合わなくて済むのだから、これを受け取っておけばいい。

そんな思考で、エルメロイⅡ世はその論文を受け取った。

「それで」

「はい？」

「これでお前は……お前と、あとはそちらのサーヴァントは時計塔にいる理由がなくなっただけだが」

これからどうするつもりだ、という質問。

心配と、余計なことをしてくれるなよ、という感情の入り混じった質問に対して、明確に「これ」というヴィジョンが憐にあるわけではないのだが。

「とりあえず、ピクニックにでも行こうかって話にはなってますね」

「ピクニック」

「ええ。今、どこか別のところをふらふらしてる愛歌も捕まえて」

沙条愛歌は、聖杯大戦が終わるとふらりと姿を消した。

『これが妹ができた感覚……そんなに変わった気分にはならないわね』なんて言葉を残して。

とはいえ、時折彼女は手紙を送ってきたりするので、今の賃貸を出て行くつもりは憐にはない。

「私が聞いたのは、これからの生活についてだったんだがな……」

「そのあたりはこれから考えますよ。まずは、アルトリアの願いを叶えてやりたいんで」

「……そうか。まあ、お前の人生だ。私に迷惑をかけなければそれでいい」
「はい」

それじゃ帰りますね、と口にして立ち上がった憐。

外には彼のサーヴァントが待っているはずである。

それを見つめるロード・エルメロイⅡ世の瞳には、一抹の羨ましさが見えた。

マスターとサーヴァント。

形は違えど、自分が求めた形をサーヴァントと築き、そしてそれを実現させられた生徒を眩しく思い、見送った。

おまけ！

統計、というものがある。

複数のデータをもとに、大きな集団の中の性質を求める、という勉強だ。

平均気温だったり、生徒の平均点だったり、あるいは魔術師的이라는のなら重ねた歴史の重さが神秘の多寡に直結する、というのも統計から求められたこと。

「そうですか、それで？」

だから、憐は今回のことは間違いではないと声高に主張する。

統計的にこの答えが求められたのだから、わかっている地雷に向けて突っ込むのはただの阿呆だろう、と。

目の前の彼女がそれで納得するとは思えないが、それでもこれ以上の理由はないのだから、赤裸々に語ってしまった方が後が怖くない。

「確かに統計としては間違いではないかもしれませんが」

「だろ？」

納得してくれたことに、驚きながらも感謝する。

だが――

「ですが一つ、レンは忘れていることがあります」

「……………え？」

そう、彼には一つ忘れていることがある。

「レンの求めた統計は、あくまで“この世界のアルトリア・ペンドラゴンは料理が下手である”という事実を示すものであって、“別の世界の存在であるこの私が料理下手だ”という証拠には一切ありません」

この少女は、自称ただの村娘であるが、戦うならば勝つことを目指す、というのはこの世界のアルトリア・ペンドラゴンと変わりないということ。

そんな彼女に対して、『統計的にアルトリア顔は料理できないからお前にはさせられないわ』なんて、どう考えても負けん気を燃やすだけの燃料にしかないということも。

完全にお説教モードに入ったアルトリアキャスターに、台所からひよっこりと愛歌が顔を出す。

「アルトリア。お説教はほどほどにね。じゃないと、私が全部済ませてしまうわ」

「ええ、わかっています。レンに私が料理下手ではないことを証明する必要がありますからね。……………まったく、普段から料理をさせてくれないのはなんでかと思えば、まさか私が料理できないかと思っていたなんて」

気がつけば、最終決戦で展開した王様モードを展開している。

村娘では未だ片鱗しかなかった。希望のカリスマが完全に発揮され、かつてマスタ―であった青年を萎縮させ、正座させてしまっていた。

普段、時折漏れ出る程度ですら厄介なことになるそれを、たった一人に向けて全力で使用している。

曰く、魔術は目分量などは許されず正確に分量を図ることを要求される。

曰く、魔術は魔術式通りにやらないと必ずや失敗することになる。

曰く、レシピ通りにやったとしても才能の如何によつて成功にたどり着けないことだつてある。

曰く、それに比べれば料理は、レシピ通りにやれば美味しい不味いの好みなどはあつても食べられないものになることはない。

曰く、だから魔術師として召喚されるレベルの私に料理ができないはずがない。

するりと、憐の脳内にそれらの言葉が入り込んできて。

「うーん、確かにその通りかもしれない」

なんて。そんな言葉が出てきてしまった。

では、その翌日、ピクニックに行き実際に食べることになった彼女の作ったお弁当はというと。

「……普通に美味かった」

「でしよっ?」

言葉通り、普通にちゃんと食べられるものが出てきた。

どこか自慢げに見えるのは、きつと間違いではないだろう。

「ああいう時代でしたからね」

「ああ、なるほど」

彼女と憐が初めて出会った時の服装は、どこか魔術を学ともがらぶ輩が大量に集う学院を想起させる服装だった。

魔術師キャスターのサーヴァントに相応しいその服装は、けれど近代に近くなればなるほど異質な服装であり、彼女が古い年代の存在であることをはつきり示す代物。

そして、たいていの場合、過去というのは男尊女卑であることが多かった。

女は家で待ち、男は働く。そういう類の役割分担が、生まれた時点で決められている時代。

そんな時代で、女が料理を一切できなくても許されるのは、それこそ“男として生きている”場合くらいだっただろう。

王様にならなかつた彼女は男装などする必要がなかつたのだから、当然のようにその技術を身につけていた。

くあ、と小さく一つあくびを漏らす。

二人は、正確には昨日ひよっこりと顔を出した愛歌も含めて三人なのだが、久々に憐の実家の近くに帰ってきている。

実家そのものは燃え尽きているので、実際には近場のホテルを取っているだけなのだが、アルトリアが彼の育ったところを見てみたいと口にしたので二人でやってきたら、愛歌が顔を出したのでついと言わんばかりに彼女も誘つてのピックアップ。

あまりにもものどかなのでついあくびが漏れてしまった憐をアルトリアは笑顔で見つめ、ぐい、と引つ張る。

すでにサーヴァントではないが、それでも常人に比べれば遥かに強大な筋力。踏ん張ることすら考えられず、憐は転がり込む。

「えつと……アルトリアさん……いったい何を……？」

顔に影がかかる。

この状況が何か、理解できないほど頭が悪いわけではない。

悪いわけではないが、認めたらいつものように魔術回路が爆発しそうなので認めてはいけない気がした。

「もちろん、膝枕ですよ」

ぎゅるん、と魔術回路が変な動きを開始する。

いい加減に理解しても良いかと思うのだが、どうやら彼女はまだ自分のどうい言う言動

が彼の魔術回路制御を失敗させるのかを未だに理解していないらしい。

直感スキルがもしもあつたならば、そのあたりを予測してくれたのだろうか、というそんな考えが脳裏をよぎったところで。

「はい、落ち着きなさい」

愛歌によつて魔術回路が強制的に制御される。

一歩間違えば、己の魔術回路にまでフィードバックが来る荒技。

憐は最近になって、こういう自分の命を顧みない所業を見るとこいつの友達との距離感ちよつとおかしくね、と思つたりすることが時々ある。

思つたりするのだが、こいつは根源接続者だしなあ、という気持ちもあるので、こいつからすればこの辺り別に命がかかってねえんだろうなあ、と思つたりもする。

「アルトリアも、少しは手加減してあげないとダメよ? すぐに爆発するんだから」

「わかつてはいるんですけど……爆発する条件がよくわかつてなくて」
「貴女が好意を示せば爆発するわ」

「ええ……」

一旦は愛歌の方に向けられたアルトリアの視線が、また膝上にある憐の方へと向けられる。

そんな瞬間。

「はい、一回落ちなさい」

キユ、と嫌な音を立てて眠る憐。

眠る、というよりも絞め落とされた、の方が正しいかもしれない。

アルトリアの視界に、なんかそれっぽい影が映ったし。

「いきなりこういうのはどうかと思いますよ?」

「毎回止めるのは面倒なもの。早く降ろしてあげなさい。じゃないと目覚めたらまた爆発するわよ」

今度は止める気にならないわ、と愛歌は言い捨てて立ち上がる。

「どっか?」

「カップルを当てつけのように見せられても困るもの。ちよつと王子様探してくるわ」

沙条愛歌は、聖杯大戦の後、そこらへんの亜種聖杯戦争で亜種聖杯をもぎ取っていた。

その時の願いは一つの亜種聖杯では叶わなかったため、いくつかもぎ取ってから直列でつなげることで願いを叶えられるだけの魔力を手にしていた。

願いは、『とある並行世界で召喚された、人理が不安定な場合のみ召喚できる英霊を召喚できるようにしなさい』とのこと。

つまり、彼女の王子様がこの世界に出現することになる。

どうしてそんなことをしたのか、アルトリアは聞いていない。

けれど、聖杯大戦で協力してくれた彼女の様子を見るに、そう悪いことにはならないだろうと信じている。

歩き去る彼女を見送って、アルトリアは小さく微笑み、彼女の願いが叶うことを祈った。